

---

**「闇から逃亡した少女とそれを追う漆黒の闇。」**

Natu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「闇から逃亡した少女とそれを追う漆黒の闇。」

### 【Nコード】

N4900H

### 【作者名】

N a t u

### 【あらすじ】

闇から逃亡してきた少女その名は龍崎ミレイ。彼女は元々黒の組織の人間では無いが彼女自身にも人には言えない理由があった。そしてある日何かしらの事情で黒の組織の幹部であるジンに拾われ「妹分」として側に置かれるようになったが、ある日たまたま出かけた後にジン達のある取引現場に遭遇し見てしまい闇に堕ちる前に心底敬愛していた「姉貴分」をジンに始末されてしまった。その後ミレイはその場をし闇からの逃亡を決意。だが・・・それをジンは見逃すはずが無かった。そして、ミレイとジンの追いかっこの時が始

まっ  
てし  
まっ  
た。

**作者からのご挨拶と注意書き。(前書き)**

ご挨拶にも書かせて頂いたと思いますが、

これは黒の組織のジンの兄貴様方が中心として

作者のオリキャラも交えて書かせていただく予定と

なっております。従いまして、オリキャラ等が

嫌な方のご観覧は大変に申し訳ありませんが

お勧め致す事は出来ません。

また、苦情、そして中傷等は一切お受けできませんの

でご理解とご了承承頂きますようお願い申し上げます。

また、もしかしたら残酷なシーンもあるかもしれませ

るのでその辺もご理解とご了承承頂きます様重ねて

お願い申し上げます。

## 作者からのご挨拶と注意書き。

作者ご挨拶と注意書き。

皆様、初めまして今日から登録させて頂きました。N a t uと申します。

このタイトルは闇から逃亡した少女と言う事で黒の組織、ジンの兄貴様方がメインのお話とし

て書かせて頂きたいと思います。作者自身のオリキャラも出る可能性も否定出来なくはありま

せん。のでオリキャラが出るのが許せない方、そして、オリストが嫌いな方のご観覧は

大変に申し訳ありませんがご覧頂かない事をお勧め致します。

それ以外の方はどうぞゆっくりとお読み頂ければと思います。

尚、評価、感想等に関しましては当方文才がないゆえ・・・。

お手柔らかにお願い致します。

中傷、また苦情等に関しましては此方も大変に申し訳ございません  
が一切お受け致しません

のでその辺もどうぞご理解ご協力をお願い致します。

また、もしかしたら、違うジャンルのキャラ（全部ではないですが）  
出る事も

ある可能性もございます。その辺もご理解ご了承願いたいと思いま  
す。

それでは、長文と乱文ではありましたが最後までお読み頂き有難う  
ございました。

2009年。7月23日（木）

訂正日 8月17日（月）

N a t u。



**作者からのご挨拶と注意書き。（後書き）**

今日初めて登録いたしました。文才無いながらも

私、私なりに頑張って書かせて頂きたいと思えますの

で応援の程宜しくお願い致します。

尚、ご感想そしてご評価がありましたらお手柔らかに

お願い致します。それでは、どうぞごゆっくりと

お楽しみください。



## 第1章プロローグ。(前書き)

此処では、まずミレイが通っている女子大からの  
スタートとなります。

## 第1章プロローグ。

此処は、米花町にある米花女子大学。此処に1人の少女が居た。

彼女の名は龍崎ミレイ。年齢20歳だが……。学年的には2年生。

彼女は、訳ありで、留年して丁度復学見たいな形でこの大学に戻ってきた。

学科は一応国文科である。そして彼女は只……。1限の授業が終わった後ずっとずっと。。。

浮かない顔をしてそして若干、怯えながら、毎日を過していた。

そして、1人の少女がミレイに声をかけた。

「ミレイさん。」

ミレイその自分の呼ぶ声がしてふっと我に返り「ああ……。沙江島（みえじま）

か。  
「

彼女の名は、ちょっと珍しい苗字だが沙江島真理恵さえししまりえ

彼女とは同期だが学年は3年。年齢20歳。

ミレイ」どうしたの？  
「

真理恵ため息をつき「もう、どうしたのじゃないわ！今日貴女の様子変よ？

貴女こそどうしたの？  
「

その事を聞きフツと笑い「・・・いや。特に何も。  
「

真理恵「本当に？  
「

ミレイ鞆から麦茶を取り出し飲み始めて「ああ。大丈夫さ。」

と続け様に窓を見て居たもう1人の少女が「ねえねえ！窓見てみなよ！今日は珍しく

電柱に沢山カラスが留まっているよ！」

真理恵「え？本当に？」そう言い窓を見て「うあ〜！何なのよ！！このカラスの数・・・。」

最初に窓を見て居た少女も「・・・そうだね。多分、5羽位居ると思うよ。」

と続け様に「あんたも見てみなよ！ミレイ！」

ミレイ遠慮しながら「え・・・わ・・・私は良いよ。前川。」

そう少女に呼んだ。(彼女の名は前川カノン。真理恵の幼なじみ。)

がカノン「そんな遠慮しないでさ。滅多に見られないんだし！」

と言いながらミレイの片腕を掴み窓に連れて行った。

ミレイ困惑した顔で「ちょっ……ちょっと!!前川！」

カノン「良いじゃん。ね？」と何食わぬ顔をして言った。

するとミレイハア〜とため息を付きながら偶然にも窓を見た。

するとミレイその窓の外に居るカラス達を見て只、只……黙って居た。

そして・・・。

カラスの群れの一匹と目が合い。

「やっと・・・見つけたぜ」？「俺の可愛い妹よ」。

と続け様に「いつか、必ず、迎えに行く、それまで大人しく待っている。」

とミレイにまるで語りかけるように口ばしを動かした。

ミレイそのカラスを見て再び「恐怖心」が襲った。

そして・・・それが、黒の組織との追いかけてこ、の始まりの前兆  
だとは知らずに・・・。

第一章、プロローグ完。

## 第1章プロローグ。(後書き)

最初にミレイの事について書かせていただきました。

今回はですね。多分黒の組織が出て来る予定です。

(と言いましてもジンの兄貴様方ですが・・・)

どうぞお楽しみに。



## 第2章。大学帰りと小学生組み。（前書き）

此方は、ミレイが友人である真理恵と一緒に帰宅している最中に小学生組みと会います。が、ミレイは

コナンの‘正体’を知っています。

ですが、哀の‘正体’は話しているうちに‘知る’

様になります。そして・・・2人は、ミレイの様子を見

てジンに未だに‘追われている’事を悟ります。

## 第2章。大学帰りと小学生組み。

アレから、ミレイは今日は1限だけだったので、早めに帰ろうと教室を出た。

すると、真理恵が再び声をかけ「今日、私も上がりだから一緒に帰りましょ?。」

しかし、ミレイ「別に構わないけどさ・・・。あんた?2限は?。」

真理恵「今日は、先生が緊急会議の為急遽休講!。」

と楽しそうに笑った。

ミレイ「そう。なら・・・もたもたしないでさっさと帰ろう。」

そう言いスタスタと校門にスタスタと歩き始めた。

真理恵「ああ……。ちょっと!!待って!ミレイさん!!!!」

真理恵慌ててミレイを追った。

そして、大学の校門を出て路上を歩いていたその時「あれ?ミレイ姉ちゃん?」

と1人の少年が声をかける。

ミレイその声の主に気が付き「お……!その声はもしかして「コナン」か?」

コナン「うん。僕だよ。」其処にはメガネをかけた小学生が友達と共に居た。

その少年の名は江戸川コナン。帝丹小学校に通う小学1年。

しかし・・・その正体はあの高校生探偵工藤新一。

黒の組織の取引現場を見た際にジンに毒薬を飲まされ小さくなってしまった。

そして、今は幼なじみの家に居候しながら黒の組織を追っている。

もちろん。ミレイ自身もコナンの正体は知っているが・・・

此処ではあえてコナンと呼んでいる。

するとコナン「今、大学の帰り？」

ミレイはコナンの目の高さまでしゃがみ「ああ。そうぞ。今日は1限だけだったからね。」

と続け様に「そういや・・・コナン今の時間帯は学校じゃなかったか？今日は金曜だよ？」

すると、カチューシャをかけた女の子がやってきて「今日は、学校の先生が緊急出張でね

朝から居ないから学校お休みなんだ。」と続け様に「ごめんなさい。お姉さんは？」

ミレイ「ああ。紹介遅れたね。お嬢ちゃん。初めまして。私は龍崎ミレイ。宜しく。」

と続け様に「んでもって・・・私の隣に居るのが、沙江島真理恵。私

の大学の友達。」

真理恵「沙江島真理恵です。どうぞ宜しくね。」と微笑んだ。

そしてその女の子「ミレイお姉さんと真理恵お姉さんだね。私、吉田歩美。コナン君の

友達なの。」と続け様に「コナン君の他にも紹介するね。」そう言  
い他のメンバーを

呼んで「このガタイが良い男の子は小島元太君。そして、その隣に  
居るのが円谷光彦君。

そして、その隣に居るのが灰原哀ちゃん。」

元太「俺、小島元太って言うんだ。宜しくな。」

光彦「僕、円谷光彦と言います。宜しくお願いします。」

哀「灰原哀よ。宜しく。」

と其々自己紹介した。

ミレイ「歩美ちゃんに、元太君に、光彦君に、哀ちゃんね。宜しく。」

と言いつつ哀に目をやり・・・。

・・・似ているな。‘あの子’に・・・。と心の中で呟いた。

すると、哀が口パクで「ミレイさん。久しぶり。」と言った。

ミレイ「・・・え?!」

ま・・まさか。この子・・・「志保」？

と続け様にミレイも口パクで「あ・・あんだ。もしかして・・・。  
「志保」？」

哀頷き再び口パクで「そうよ。『宮野志保』よ。だけど・・・此処  
ではこの子達が居るから

哀と呼んでね。」

ミレイ口パク換えて「OK。」

哀再び口パクで「悪いわね。ミレイさん。」

すると光彦が「灰原さん？何してるんですか？」



哀「別に・・・なんでもないわ。気にしないで頂戴。円谷君。」

それを聞いた光彦「分かりました。」と言いだりを見渡し「それにしても今日は・・・」

やけにカラスが多いですね。」

元太「ああ。そうだな。」と続け様に「不気味だぜ。」

その事を聞いてミレイに再び「恐怖心」が襲い掛かる。

すると、コナンと哀はそのミレイの様子を見て何かを感じていた。

そして、コナン小声で「灰原。」

哀も小声換えして「ええ。多分・・・彼女まだ、追われて、いるわね。」

コナン「ああ。そうだな。」

と続け様にミレイに「ミレイ姉ちゃん。顔色悪いよ？大丈夫？」

ミレイハッと我に戻り「ああ。大丈夫だよ。コナン。じゃ・・・悪いけど、もう

行かせて貰うね。」と続け様に「真理恵。」

真理恵頷き「じゃ、皆さん。また会いましょう。」

コナン達は一斉に「は～い！バイバイ～！」

とミレイ達を見送った。

その後コナン「じゃ・オメーらこれから博士ん家に行ってゲームでもしようぜ。」

元太「おう！」

光彦「良いですね。」

歩美「行こう！行こう！」

そう言い博士の家に向かった。

そして・・・空を飛んでいたカラス達が一斉にその場から消えて行った。

第2章、大学帰りと小学生組み完。

## 第2章。 大学帰りと小学生組み。(後書き)

まず、1つ謝らせて頂きたい事が・・・。

前回では黒の組織が出る予定でしたが・・・

ヒロインは大学の中だったものですから・・・

急遽大学帰りに変更させて頂きました。

次こそは・・・黒の組織を出したいと思います。

本当に申し訳ありませんでした。

次回もどうぞよろしくお願い致します。

### 第3章。漆黒の闇の人間。（前書き）

此方では、黒の組織のジンの兄貴様方を中心として書かせていただきたいと思います。ヒロインはもう

‘見つかってしまいます’が。あえて・・・

未だに‘泳がせておく事’に・・・。

この章ではまた新たにオリキャラが2人です。

この2人は・・・果たして一体何者でしょうか？

### 第3章。漆黒の闇の人間。

此処は、米花港。辺りはすっかりアレから、夜' になっていた。

此処に一台の黒のポルシェが止っていてそのポルシェに1人の銀色の長髪の全身黒ずくめの

男が寄りかかりタバコを吸いながら1人の少女の写真を見ていた。

そうこの男が見てる写真はミレイの写真だった。

男はタバコの煙をフーと出していた。

するとガタイの良い此方も全身黒ずくめの黒のサングラスをかけていた男がその男の所に

やってきて「兄貴っ！」

その男は自分に近づいて来た男にミレイの写真を見せ「こいつは、見つかった」のか？」

と続け様にその男を「ウオツカ。」と呼んだ。

その男にウオツカと呼ばれた男が「へい。見つけましたぜ。ジンの兄貴。あの女メド」

は間違いなくこの米花町にいます。」

それを聞いてウオツカにジンと呼ばれた男がニヤリと笑い「そうか。此処にいるか。」

ウオツカ「兄貴。どうしやす？」

ジン「そうだな。もう少しだけ、この表の世界で、泳がせて、やる



か。  
」

と続け様にタバコを吸いながらニヤリと笑い「直ぐに、捕まえても、  
、良いんだが、

それじゃ、つまらねえ、からな。」

それを聞いてウオツカもニヤリと笑い「じゃ・・じわじわとあの女<sup>メド</sup>  
を、追い詰めて、

行くんですかい？」

ジン「ああ。、追い詰めた所、であいつを再度、此方に連れ戻す。  
、あいつには、表では

怯え続けなければ生きていけねえ、って事を、教えてやらねえ、と  
いけねえからな。」

と続け様に「ソロソロ行くぞ。ウオツカ。今日は、お前が運転しろ。

」

ウォッカ「了解しやした！」そう言いジンとウォッカは黒のポルシエに乗り込み

米花港を後にした。

そして、その黒のポルシエを見て居た1人の少女が居た。

少女タバコに火をつけて「あれは……。黒のポルシエ……。356 A' か。間違いないね

あの男キトの車だ。」と続け様に「まさか……。もう、あいつが見つかって

しまったの?!」と驚きながら呟いた。

すると、1人の少女が彼女に声をかける「・・・夏美。」

夏美と呼ばれた少女はその声の主の所に振り向き「・・・ライカが。」

ライカタバコに火を灯し「ああ。私だ。」と続け様に「どうやら・・・あの男等<sup>ヒト</sup>」

は此処に来ていた様だね。」

夏美頷き「ああ。そうだ。」

ライカ「じゃ・・・標的<sup>ターゲット</sup>（ターゲット）は？」

夏美タバコを口に加えながら「恐らく。ミレイだろっさ。」

ライカ「・・・そうか。」

と続け様に「じゃ・・・ソロソロ私等も行きますか？」「相棒。」

夏美フツと笑い「そうだな。『相棒』。」

そう言い黒のベンツに2人共乗り込んでその場を後にした。

この2人は、橘夏美とライカ・ネアン。

2人共幼なじみで兼相棒同士。

年齢は2人共21歳で彼女等もコナン達の『正体』を知る人物だ。

しかし、黒の組織との関係は今の所・・・謎？のままだ。

だが、このジンとウオツカが米花町に現れた事はまだミレイは知らないでいたが、

此れでミレイの身に、漆黒の闇の人間、の魔の手が着実について言うて良いほど伸びて来てい

た。

第3章。漆黒の闇の人間 完。

### 第3章。漆黒の闇の人間。（後書き）

今回は、前回お話しした通り黒の組織を出させて

頂きました。さて、次回はヒロインの見た夢を中心と

して書かせていただきたいと思います。

次回もお楽しみ頂ければ幸いです。

#### 第4章。闇の夢。(前書き)

此方では、ヒロインの夢について書かせて頂きます。

と同時にヒロイン中心となります。

#### 第4章。闇の夢。

此処は、米花町にあるある高層高級マンションの9階。このマンションの903号室が

ミレイの今の家だ。と言いつつもミレイの‘姉貴分だった’女性の元自宅を今でも

ミレイ自身が住み続けている。家賃等は一切姉貴分だった女性が前払いしていたおかげで

支払い等もせずに気楽に住む事が出来た。

只・・・この家の香はミレイにとってはあえて‘酷’だった。

すると、ミレイ今までリビングにあるソファアに座っていたのだがシャワーを浴びる為

一度ソファアから立ち、シャワー室に向かいシャワーを浴びて、そ  
うしてから更衣室で



パジャマに着替えてもう一度ソファアに座りタバコに火を灯した。

そして・・・。

時計を見て「もう・・・夜の11時か。早いな。」と呟き「ソロソロ、寝よう。」

と言い寝室に向かいベッドの中で寝始めた。

すると、ミレイは夢を見た。

「見たくない夢を」。

とある日の夕方の雪の日。

ミレイは一人でアイポットを聞きながらいつも通りに大学を出て自宅へと向かっていた。

すると、米花町の国道に黒いポルシェが止っていた。

黒のポルシェの中からジンがミレイを見て

‘平和ボケも終りだ。’  
もうじき‘夢の偽りの世界が終わり、お前自身再び

お前の本当の世界に戻る時が来た’。

ガチャリ

ジンニヤリと笑い「さあ……。迎えに来たぜ？ミレイ。」

ミレイ何かの気配を感じ取り恐る恐る後ろを振り向き「！！！！！！」

そして、ミレイ汗だくになりながら目が覚めた。

「何だ……。夢か。」と呟きそして苦笑いをして「先ず、夢で安心した。」

「ただど……。何て言う、酷い夢なんだ。」

とベットから出てタバコを吸いに行った。

だが・・・。

この夢は・・・。時間が立つに連れて、現実になってしまっ。

しかし、ミレイはまだ・・・この『平和』が続くと信じていた。

第4章。闇の夢 完。



#### 第4章。闇の夢。（後書き）

色々ネタ考えながらやっていたら何時の間にか

深夜になりました。（笑……）

さて、今回はコナンと哀ちゃんとヒロイン達のやり取

りを中心として書かせて頂きたいと思います。

と言うわけで一先ず・・・今回は此処までと言う事で

おやすみなさい。

第5章。ミレイと2人の少女。（前書き）

おはようございます。

今回のお話は、ミレイと夏美のやり取りが主になりま

す。前回のお話よりか長くなっておりますので

ご了承ください。

## 第5章。ミレイと2人の少女。

あの‘悪夢’から1夜開けた朝。

ミレイは頭をかきながらフウトため息をつき「結局、アレから寝付  
けなかったわね。」

やっぱり、私と‘闇は’離れられない物なのね。

すると、ミレイ携帯をかけたすると、1人の少女が出た「はい！橘  
！」

ミレイ「ああ。夏さん？私？ミレイだけど。」

夏美「おう！ミレイか？おはようさん。」

ミレイ「おはよう。ごめんね。朝早くから・・・もしかして、寝てい



た？」

夏美時計を見て笑いながら「良いや。ついさっき私しゃあも起きた所さ。」

ミレイ「そっか。」

夏美「所で・・・お前さんから連絡してくれるなんて珍しいね。何かあった？」

ミレイ「うん。ちょっとね。」と続け様に「ねえ・・・夏さん。唐突で悪いんだけど

、今日この後会えないかな？」

夏美「今日かい？今の所は何も予定ないから大丈夫だと思うよ。」

ミレイ「有難う。じゃ・・・悪いんだけど、いつもの所、に来てくれる？ライカさんも」

連れて。」

夏美「OK！相棒も今日何も無いみたいだから。そう伝えておくよ。」

ミレイ「ごめんね。有難う。」

夏美「じゃ・・・時間は？」

ミレイ「午後でどう？午後の時間だったら適当に来てくれれば良いから。」

夏美「了解。じゃ……。1時位に行くよ。」

ミレイ「1時位ね？分かったわ。」と続け様に「じゃ……。また後で。」

夏美「ああ。じゃね。」

そう言い携帯を切った。

すると、ライカが何時もの様にタバコに火を灯し、「おはようさん。相棒。」

夏美「おう！おはようさん！相棒。」

ライカ「さっきの電話ミレイからか？」

夏美頷き「ああ。んで・・・お前さんには悪いんだが、唐突に今日の午後会う事になった。」

ライカ「そうか。んで？場所はあの子等が居る、あの場所、で良いの？」

夏美再度頷きた。

ライカ「了解。んで？時間は？」

夏美タバコに火を灯し「午後の1時位だ。」

ライカも再度頷き「んで？あの子には伝えたのか？」

夏美「いや……。まだだ。多分、あいつがやっていると思うが……  
只、此処ヒトにあの男

達が潜伏している事は否定出来ない。下手すりゃあ、あいつ等の  
事、自体ばれる可能性

もあるから……。多分、やらないんじゃないかな？」

ライカ「成る程ね。」と続け様に「じゃ・・・こちらから、伝えた方が、良いか？」

夏美頷き「ああ。その方が、  
「賢明」  
「ちゃあ・・・賢明」  
「かもしれないね。」

そう言い携帯でメールを打ち始めた。

メール。

おはようさん。

唐突で申し訳ないが、今さっきミレイから連絡があつて

今日午後1時位にそちらに相棒と向かわせてもらう事にしたよ。

だから、お前さんにも、何時もの所、で待っていて欲しい。

宜しく頼むね。

夏美。

そして、送信ボタンを押す。

ライカ「あの子にかい？」

夏美頷き「電話なら兎も角、メールの方が何かと、便利、だしさ、それに。」

ライカ「それに？」

夏美「足が付かない、場合もある。」

ライカフツと笑い「成る程ね。」

そして、メールの着信音があった。

夏美「おっ！！来た来たっ！！」

と続け様にメールを見る。



メール返信。

おはよう。俺も今さっき起きた所だ。

了解した。んじゃ、午後1時位に、何時もの所、で灰原にも話したから

待っているぜ。

夏美メール返えす。

有難う。助かるよ。

悪いけど・・・。

それで宜しく。

コナン。

再び送信ボタンを押す。

そして、再びメールが来た。

良いつて事だ。

実はさ昨日ミレイに会っているんだ。

その様子を見たらやけに、可笑しかった、から・・・。

気になってよ。

俺も灰原とアレから話して会って話を聞いたほうが良かったと思っ  
たんだ。

と、言う事でオメーからメール来て良かったぜ。

じゃ・・・また後でな。

夏美それを見て

ああ。また後で！

とメールを返した。

すると、ライカ窓を見て「なあ……。相棒。」

夏美「ん？」

ライカ「外見てみなよ。今日は珍しく、雪、だよ。」

夏美窓を見て「本当だ。珍しいね。」と続け様に「何だ？今日もカラスが、やけに飛んでる、」

な。  
「

ライカ苦笑いをし「こりゃ……。色んな意味で、不吉、な感じがするよ。」

夏美「ああ。そうだな。」と続け様に「相棒。どうやら・・・」早めに向かった方が、

よさそうだ。」

ライカ頷き「了解した。」

そう言い2人共灰皿にタバコを消しそして軽めに朝食を済ませ早いが出かける支度をしてい

た。すると、夏美達が潜伏しているビルに一台の黒のシボレーが止ってその中にニット帽を

被ってラフな格好をした男が夏美達の話盗聴していた。

男フツと笑い「成る程な。どうやら・・此処に「潜伏」している事は確かなようだな。」

と続け様に「どうやら、ようやく、会えそつだ。愛しき宿敵（恋人）さんと共にね。」

と楽しそうに呟いた。

一方、出かける準備をし終わって夏美リビングに戻り窓を再度見て黒のシボレーが止って

居る事に気付く。

それを見て夏美苦笑いをし「黒のシボレーか。彼、だね。」と続け様に

「多分・・あの様子だ、私等の会話、聞かれてしまったんだろうな。」

と更に「まあ、あの男<sup>ヒト</sup>に聞かれなかっただけでも良かったけどね。」

と呟き再びタバコに火を灯した。

第5章。ミレイと2人の少女。完。





第5章。ミレイと2人の少女。（後書き）

此処までご覧頂きありがとうございます。

今回はこのお話の続編？みたいなものを書かせて頂き

たく思います。

のでお付き合い頂ければ幸いです。

此処から先はオマケみたいなものです。

もし良かったらお読みください。

夏美「おや……。作者さん。朝からご苦労さん。」

N「あ……。どうも。夏美さん。ありがとうございます

。」と続け様に「貴女は一体??」

夏美「ハハッ。まだ、此処では悪いけど明かせないね

まあ、しいて言えば・・・私しやあは組織の人間

では無いよ。しかし、それを書くのが貴女だろ？」

N「・・・確かに。」

夏美「読者の皆さん。今後共相棒共々どうぞ宜し

く。」

**第6章。 再びの夢、そして目覚めた何時もの場所。 (前書き)**

前章での続編みたいな物です。

最初にミレイの‘夢’から始まり。

その後阿笠博士の家で目が覚めます。

前章と同じく長くなっております。

ので此方も此方でご了承ください。

## 第6章。再びの夢、そして目覚めた何時もの場所。

一方、此処はミレイの自宅。

ミレイは、夏美との携帯での会話を終え、'何時もの場所'に向かう為の準備をして今さっき

終えた所だった。そして、タバコに何時もの様に火を灯し窓を見た。

ミレイ「・・・雪か。」

すると、前に見た'夢'を不覚にも思い出してしまった。

ジン

「迎えに来たぜ？」ミレイ。

ミレイ思い出す度に冷や汗をかいてしまった。

そして・・・。

思わず「後ろを見てしまった」。

しかし、「誰も其処には居ない。」

ミレイ「ホツとしたように前を向きタバコを吸っていた。

その時、ゴトツと音がした。

ミレイ「ん???何だろう?今の音・・・私の部屋??」

タバコを灰皿に押し付け付け自分の部屋に向かった。

そして、自分の部屋を見て辺りを見渡し誰も居ない事を確認すると  
フツと笑い

「……何だ。誰も居ないじゃない。私、疲れているのかな。」  
とそう呟き

自分の部屋を出ようとドアがある所に振り向いたその時！！

ジンが不敵な笑みを浮かべてミレイの前に立っていた。

ミレイ「んなっ！……！」

ど……どうして?!「兄さんが?!」

ミレイ逃げようとしたが体が思うように、動く事が出来なかった。

だが、ジンに捕まってしまう。

ジンニヤリと笑い「久々だな。ミレイ。会いたかったぜ。」

ミレイ「……………な、何しに来たの??」

ジン「愚問だな。お前を、迎えに来たんだよ。」

そう言いミレイに睡眠薬を飲ませた。

ミレイ「な・・・何を？」

と言いかけた次の瞬間眠気がミレイを襲い、ジンの腕の中に倒れこむ。

ジンはミレイを抱き寄せ「もう、逃がさねえ、よ。」

そう言いミレイのマンションを出て黒のポルシェが止っている路地裏に向かった。

と同時にミレイの中で、ミレイを呼ぶ声がした。

ミレイその声と共に目が覚める。



すると、コナンと哀達が見て居た。

コナン「良かった！目が覚めた見てーだな。」

ミレイ「・・・し、新一？」

コナン「ああ。俺だ。」

と続け様に「因みに此処は俺達がいつも屯る場所だ。」

(コナン達がいつも屯る場所、阿笠家)

ミレイ寝ていたソファから起き出し「私、一体どうしたの?」

哀両腕組みながら「それは、こっちのセリフ。ミレイさん。此処に  
来た途端急に

倒れたのよ？」と続け様に「大丈夫？」

ミレイ「そっか。うん。大丈夫。」と続け様に「誰が私を運んでく  
れたの？」

「俺や！」

関西弁の男の声がした。

ミレイその男を見て「貴方だったんだ。ありがとう。」と続け様に  
その男に

「失礼だけど……。どちらさんで？」

「コナン」ああ。こいつは、服部平次。西の高校生探偵。で俺の仲間。」

服部「服部平次や。よろしゅう。」と続け様に「自分なんて言うん？」

ミレイ「服部平次君ね。私は、龍崎ミレイ。此方こそ宜しく。」

と続け様にコナンに「あれ？あの2人は？」

あの2人とは、夏美とライカの事。

哀「もう、来ているわよ。」

夏美とライカリビングに入った。

夏美「よ！ミレイ、お目覚めか？」

ライカタバコに火を灯し「あんだ、急に倒れこんだから心配したよ？」

ミレイ申し訳なさそうに「ごめんなさい。夏さん。ライさん。」

夏美ニコリと笑い「ま……。お前さんが無事に起きたから良かったよ。」

とライカを見て「なあ。相棒。」

ライカ頷き「ああ。そうだな。相棒。」

そして、コナン「んで？ミレイ。起きた当初から悪りいんだけどよ。  
「何かあったのか？」」

ミレイコナンを見て「此处最近カラスがやけに多いだろ？」

コナン「ああ。金曜日もそして・・・今日もやけに多かったな。」

ミレイ「先週の金曜の大学帰りで偶然にもあんたと志保に会っただ  
ろ？その時から「夢」を

見るようになったんだ。」

それを聞いて服部「夢なんか誰でも見るものやん。そんな気にする  
事あらへんかと思うぞ？」

コナン「良い夢」だったらの話だな。」

服部「え？それどういう事なん？工藤。」

すると、夏美が「横入りですまんね。3人とも。此れは、あくまでも私じゃあの考えに」

過ぎんが、カラスが多く出没したとなると大体「不吉な事」が起こる事が多い。」

と続け様に「下らん事聞くが、カラスの色は？」

服部「そりゃ・・橘の姉ちゃん。カラスは「黒」に決まってるやがな。」

と続け様に「！！まさか？！」

「コナン頷き」・・・ああ。その「まさか」さ。服部。」

哀「彼等が・・・この町に来ると言う事。」

ライカ「いや・・・もう、来ている」と言っただ方が正しいよ。哀ちゃん。」

その事を聞いて哀「え？それ、どういう事？ライカさん。」

ライカタバコ口に加え直し「・・・見てしまったのさ。先週の金曜、相棒と偶々夜のドライブ

をしていた時に、米花港で、あの男達<sup>キト</sup>をね。」

ライカからその事を聞きコナン達は驚いていた。

そして、ミレイは思わずその場で、固まってしまった。

第6章。再びの夢と目覚めた何時もの場所。完。



第6章。再びの夢、そして目覚めた何時もの場所。（後書き）

今回は、ミレイが見た夢をコナン達が聞いていると言  
う前提で書かせて頂きました。

今回は、多分、ジンの兄貴様の敵である、

赤井さんが出る予定です。

この先はまたオマケです。ご覧になりたい方はどうぞ

お進み下さい。今回のお相手は？

オマケ？。

赤井「ほう。次回は俺が出るのか。」

N「あら・・・聞いていましたか？」

赤井「勿論。」と続け様に「変更はないよな？」

N「・・・今の所はです。」

赤井「そうか。そう願っているよ。」

N「は・・・はい。」

**第7章。ミレイの夢の話と黒のシボレー。(前書き)**

これは、ミレイが見た夢をコナン達に話しています。

そして、後半辺りから赤井さんと少しですがジンの兄  
貴様が出てきます。

この章も長いので毎回同じ事を書かせて頂いて

おりますがご了承下さい。

## 第7章。ミレイの夢の話と黒のシボレ！。

そして、コナン達は我に戻るが、ミレイは只只固まり続けていた。

それを見たコナン「ミレイ。大丈夫か？」

ミレイ頷き「あ・・・ああ。何とか。」

哀「ねえ、ミレイさん。話してくれない？貴女が見た夢の内容。」

ミレイ「実はね・・・志保。先週の金曜とそして・・・今日私が此処でぶっ倒れて気を失っていた

る頃に二度も、悪夢、って言って良いのかな。見たんだよ。」

服部「どんな夢や？」

ミレイ多少うつむきながら「実はね……。先週の金曜と今日の悪夢はね両方とも「兄さん」

が出てきたんだよ。」

服部「「兄さん」？」

コナン「あいつが言う「兄さん」は、ジンの奴の事だ。服部。」

服部それをコナンから聞いて「なっ……。何やと?!と驚きそして続け様に

「それ……。ほんまか?!工藤。」

コナン頷いた。

そしてミレイ話を続けた「まず、先週の金曜の見た『悪夢』はね。  
ある日の夕方の大学帰り

辺りは雪が降っていたの。私は、アイポットを聞きながら1人で自宅に向かい路地を歩いてた

んだ。そうしたら、国道に一台の黒のポルシェが止っていてね。黒のポルシェの中から

兄さんが私を見て居たんだよ。そして……。こう言ったんだ。『平和ボケも終りだ。』

『もうじき夢の偽りの世界が終わり、お前自身が再びお前の本当の世界に戻る時が来た。』

そして、黒のポルシェから降りて私を見てニヤリと笑い「さあ……。迎えに来たぜ？』

ミレイ。「ってね。」

コナン達はミレイの話を聞いていた。

そして、夏美話を変えて「んで？その今日、見た、やつは？」

ミレイ「自宅に居た時、窓を見てタバコ吸っていたの。そしてね私の部屋からゴトって

音がしたから見に行ったら誰も居なくて部屋を後にしたら、兄さんが目の前でまたニヤリと

笑って立っていた訳。私はその場を後にしようとしたんだけど・・・体が思うように動かず

そのまま兄さんに捕まって睡眠薬で眠らされて、その後兄さんに抱かえられて私の自宅裏の

路地に止めてあつた黒のポルシェの中に連れて行かれた訳。」

その話を聞いて夏美、ライカを見て「あの男がミレイミレイに対する『執着心』は

余にも凄過ぎるな。相棒。」

ライカも頷き「ああ。そうだな。相棒。」

すると哀「・・・分かるわ。ミレイさん。貴女の気持ち。私もまだ・・・『組織』に

追われ続けているから。」

ミレイ、哀を見て「そっか。志保。あんた・・・。」



哀顔いて「ええ。」

ミレイフツと苦笑いをし、「お互いある意味色々と苦労するね。」

哀「・・・そうね。」

でも・・・。

ミレイさん。貴女はまだマシな方よ。

私なんかがもし、見つければもう、この世には居ないんだもの。

それだけ・・・ジンが貴女に対する、執着心、が凄いつて事ね。

何故、あのジンが其処まで貴女に、執着、するのは貴女の、過去

に纏わる

事なんでしょうけど。

服部「ま、この龍崎の姉ちゃんが折角話してくれたんやから俺等も力になってやらへんな。」

なあ？工藤。」

コナンフツと笑い「ああ。そうだな。」と続け様にミレイに「話してくれて有難うな。」

ミレイ。一人で抱え込むなよ。俺達が何とかしてやつから。」

ミレイコナンを見て「ありがとう。新一。助かるよ。」と続け様に「

だけど、良いのか？

下手すりゃ・・・あなたの事も志保の事も、ばれる、可能性あるんだよ？

兄さん、こつ言った所で結構勘が鋭いから。」

コナン「ああ。分かってるさ。だが、ジンには借りがあるからなその借りを返さねえと

いけねえからな。」

コナンは一切迷いもない顔をしていた。

コナンが言っていたジンへの借り。それは、コナンの体を小さくしてしまった事だった。

それを聞いてミレイフツと笑い「・・・そうか。」

すると、夏美何かを「勘付いた」のか。「ちよいと悪い。外出てくるな。」

と言い阿笠家を出た。

そして、その路地裏に行き止めてあった黒のシボレーを発見したため息をつきながら

その黒のシボレーに向かって運転席の窓をコンコンと軽く叩いた。

すると、窓が開きニット帽を被った男が「よう。良く此処が分かったな。」

とニヤリと笑って夏美を見て言った。

夏美「何となくですよ。秀さん。」と続け様に「んで？此処で何を？」

この男は赤井秀一。

FBIの捜査官で夏美の知り合いの男。

それを聞いて赤井「いや・何、仕事、さ。」と続け様に「お前は、あの阿笠家で

龍崎ミレイの「悪夢」話を聞いていたんだろ？」

夏美それを聞いて再びため息をもらし赤井を見て

「盗聴」ですか。相変わらず「趣味」悪いですよ。秀さん。」

赤井「仕方あるまい？「仕事」なんだからな。」

夏美「FBIは、「仕事」で盗聴なんかするんですか。」

赤井「それは、「アチラ」も同じだろう？夏美。」

赤井が言う「アチラ」とは勿論黒の組織の事。」

夏美それを聞いて只黙っていた。

と同時に赤井「どうやら……。お前も、奴の所から逃げ出したみたいだな。」

夏美「別に……。逃げた訳じゃないですよ?」

赤井それを聞いて顔を顰め「まさか……。」

夏美「違いますよ。勘違いしないで下さい??別にミレイをあの男の所に

連れて行くわけでは無いですから。只……。私も一応仕事でね。ワカバの。」

赤井「成る程な。で？『奴』に言わなかったは？」

夏美苦笑いをし「もしかしたら、『反対』されるかもしれないからですよ。秀さん。」

と続け様にまた何かを『勘付いた』のか「ソロソロ、退いた方が良いですよ？」

『誰かが見ていますから』。

赤井フツと笑い「そうさせてもらおう。」と続け様にタバコに火を灯し

「『奴』もお前を『連れ戻そうと』している十分気をつける。」



夏美ニコと笑い「『忠告どうも。』」

そう言い赤井は夏美に軽く挨拶をしその場を後にした。

夏美頭をかき「やれやれ。ある意味『面でー（めんどくさい）』事  
になったわね。」

そう、赤井が言っていた『奴』とはジンの事。

実は、夏美自身、FBIとつるんでいるワカバと言う組織の女リ  
ダー兼幹部でもあり

何と、ジンの『恋人』でもある。

それ故、ジンも夏美自身をミレイと同様に『追って連れ戻そうと』  
している。

夏美チラツと後ろを見て「・・・どうやら、近くに居るみたいね。  
私もとつとと

「退いた方が」よさそうね。「そう呟きまた阿笠家に戻って行った。

それを見たジンタバコに火を灯しニヤリと笑い「まさかな。お前に  
まで「此処で会えるとは

なあ。とても嬉しいぜ？」俺の夏美。「と続け様に「ミレイと同様  
にお前も「俺の所に連れ戻

してやるよ。」と言った。

一方、夏美自身もジンの声が自分自身に聞こえた様に思つて「・・・  
ジン。」と呟いた。

第7章ミレイの夢の話と黒のシボレー。完。

第7章。ミレイの夢の話と黒のシボレー。(後書き)

此方もお付き合いくださりありがとうございます。

今回はですね、ミレイの夢の話を中心として

書かせて頂きました。

今回はですね。これは予定ですが、多分ミレイの

過去話が、夏美達の事を書きたいと思います。

そちらもまたお付き合い頂ければ幸いです。

下は毎回？のオマケです。

ご覧になりたい方はどうぞ。

夏美「どうやら、私しゃあの事少しは何者が

「勘付いた」みたいだね。」

N「赤井さんと知り合いで・・・んでもって、

ジンの兄貴様の恋人だという・・・」

夏美「ハハハツ。ある意味？凄い事になりそうだ

よ。」

ジン「何だ？夏美。さっき赤井秀一と一緒に

居た所を見たが？此れは一体どういう事だ？」

そう言いベレッタを出す。

夏美「！！ジツ・・・ジン？！何時の間に??？」

ジン「ヤリ」ついさっきだ。」

夏美「あ・・・そう。ってか、赤井さんとは単なる

‘知り合いよ’し・り・あ・い！だから、別に

寝返った訳じゃないのよ。」

ジン再びニヤリと笑い「ほう。そうか。」

夏美「だ・・・だから。お願いよ。そのベレッタ

しまつて頂戴。ね??お願いよ。」

ジン「しょーがねえな。」

と続け様に「おい!!作者!!」

赤井「作者なら、自分の‘身の危険を察知したらしく

て’何時の間にか逃げて行ったぞ?」とニヤリ。

ジン「赤井秀一。てめえ何時の間に・・・。」

赤井「つい先程からいたぞ？ジン。」

ジン「フン。まあ良い。ウオツカ。」

ウオツカ「ヘイ。兄貴。」

ジン「作者を探して俺の所に連れ出せ。」

ウオツカ「了解。」

N

何かやばいことになってきたな（笑；）

## 第8章。ミレイの過去。（前書き）

此方にはミレイの過去を書かせて頂きたいと思いま

す。度々書かせて頂きますが・・物語が進むにつれ

長くなる恐れがあります。そちらもそちらでご理解

ご了承頂きたいと思えます。



## 第8章。ミレイの過去。

アレから、夏美は阿笠家に戻ってきた。

ライカ「お帰り。相棒。」と続け様に「どうした？急に外なんか行つて。」

夏美タバコに火を灯しフツと笑い「只今。相棒。何・・・単なる、気分転換さ。」

ライカそれを聞いてニヤリと笑い「どうせ・・・知り合いのあの男が居たから会って来たんだろ

う？」と小声で言った。

夏美ギクリとなり「・・・ハハッ。ばれたか。」と小声で換えした。

それを他所に服部はミレイに「なあ。龍崎の姉ちゃん。1つ聞いてもええか？」

ミレイ「答えられる範囲なら良いよ。」

服部「じゃ、質問するで？あの・・・黒ずくめのジンちゅう男と龍崎の姉ちゃんどうやって

知りあったん？」と続け様に「まさか・・・この小っこい姉ちゃんと同じ組織を脱走したん

とちゅう？」

コナン「おいおい。服部。」

コナンが服部をなだめる。

服部「・・・あ。」と焦る。

ミレイフツと笑い「別に構わないよ。新一。こんな質問が来るのは大体予想していたから。」

と続け様に「でも、良いのかい？答えても？」

服部「ああ。よろしゅう頼むで。」

ミレイ「つため息をつき」まあ・・・多分長くなるだろうけど・・・。  
「とミレイ

左腕を服部達に見せた。

コナン「な・・・こっ！この刺青はっ?！」

服部「紅の龍!!」と続け様に「も・・・もしかして!!姉ちゃん!  
!あの・・・!!」

ミレイフツと苦笑いをし「そ・・・あの闇の始末人、赤龍<sup>セキロン</sup>。」

と続け様に「ジンの兄さんとは・・・私がまだ・・・10代の頃かな?

会ったんだ。あの時、組織は香港に一時期拠点を置いていたみたいなの。

「ただ、組織のあの方の命で撤退命令が出てね。その時に偶々私も  
「仕事」でね。香港に

居たのさ。香港のとある組織の連中を始末してくれと言う内容でね。

」

夏美タバコを吸いながら「それは、黒の組織からの依頼だったのか  
??」

ミレイ首を横に振り「いや。。別の依頼人だよ。」

コナン「なあ。。その依頼人って？」

ミレイ「時期考え込むように「確か。。『メイラン』って女だった  
かな。」

コナン「え？メイランって。。あのワカバと対立しているあの。。  
『広州』の

女ボス?!」

ミレイ」「名答!」

夏美、ミレイからその名を聞いて一瞬憎悪が見えた。

め・・・メイランだと?!

あ・・・あの女!!まだ!!

ライカ、夏美のその様子を見て「・・・まずいな。」と呟いた。

そう・・・。

夏美の前ではそのメイランの話は禁句だった。

夏美自身もメイランの事・・・そして広州関連の事になると今は明かせないが

落ち着く事が出来なくなるのである。

哀「・・・夏美さん？」

と夏美の様子が可笑しいことに気付くが再びミレイの話聞いていた。

服部「で？何で？そのメイランちゅう女に香港のとある組織の連中を潰す依頼を

自分にしたん？」

ミレイ「『広州』の香港支部の発展の為って言った方が良いのかしら？」

その為に邪魔な芽を紡ぎたかったのよ。メイランは・・・」

コナン「成る程。んで？仕事は？」

ミレイ「案の定ギリギリの所で何とか成し遂げた。だけど・・・私も、私でその代償に



体中怪我負ってしまつてね。それで、何を逃げられたその組織の残党に運悪く追っかけられて

それで奴等に見つからないように・・・路地裏に逃げた訳。そうしたら・・・。」

夏美「其処で・・・ジンと出会つた。そうだろ？ミレイ？」

ミレイ頷き「ご名答！！夏さん。」と続け様に「最初はね。物凄く怖かつたんだ。」

片手にベレッタを握つて銃口をこちらに向けているの。別に、私は元々、闇に生きる人間、

別に、死、なんて、怖くなかつた。寧ろ・・・このまま朽ち果てても良かったと言つ

そんな感じだったの。そして、一歩ずつ、一歩ずつ、兄さんが此方に歩いて来たんだ。

その姿を見て私は、ああ。もう・・・此処までか。と諦めたの。だけど・・・。」

コナン「だけど？何だ？」

ミレイ「気が付いたら何時の間にか、兄さんがベレッタを懐にしまったていたのよ。」

それを聞いて哀驚いた顔で「え？あのジンが？」

ミレイ「そ・・・んで。私がね、殺さないの、？と聞いたら、兄さんニヤリと笑い

私の左腕の紅の龍の刺青を見て、お前、赤龍だろ？」と続け様に

「ええ。そうよ。でも・・今はこんなにボロボロだから使い物にならないわよ？」

と更に続け様に「そうしたら、行き成り兄さんが私の腕を掴んで、それでも構わん。」

着いて来い、お前は此処ではくたばるには惜しい奴だ、と言って私を連れ出したんだ。」

コナン「成る程な。」と続け様に「じゃ・・何でお前あの時、断らなかつたんだ？」

ミレイ「出来るわけないわ。だって・・・だって・・・。そっく

り、なんだもの。

ジン兄さんと・私の実の兄さん。雰囲気かね。」

哀「え？ミレイさんってお兄さんいたっけ？」

ミレイ「ああ。でも……もう、死んでしまっ居ないんだけどね。

」

哀「え？そつなの？」

ミレイ頷き「殺されたんだ。志保。あんたのお姉さんと同じくね。」

哀「まさか？ジンに？」

ミレイ首を横に振り「いや・・・それは、私の『姉貴分』だった女の方。」

私の実の兄さんを殺したのは・・・玲愛蘭<sup>レイアイラン</sup>。」

ライカ「な・・・！レ・・・玲愛蘭だと？！」

服部「なんや？ネアンの姉ちゃん知ってるん？」

ライカ「あ……いや。」

言えねえよな……うち等がワカバの人間だなんて。

FBIとつづるんで尚且つ広州の連中と対峙しているなんてな。

今は……まだ。と焦りながら呟いた。

すると夏美「構わんさ。相棒。」

ライカ「な……夏美！」

夏美「仕方ないさ。だって……この女の名が出た以上。私じゃあも話すしかないだろうよ。」

ライカ両手を挙げ「わくたよ。」と続け様に「その女は広州の女幹部の1人で

しかもエリート組って奴だな。」

コナン「え？何故……オメーらそれを?!」

夏美「新！悪いね。私らの事は後だ。今はまだミレイの過去話が終わっちゃ居ない。」

コナン「……あ。悪い。」

ミレイ「続けるよ？それでね・・・その女が兄を殺した事により私は、  
‘表’でなく

‘闇で生きようと決めただ。’ 元々・・・兄自身も私の何代目か分  
からないけど・・・

赤龍をやっていたから。」

コナン「そうか。じゃ・・・お前は兄さんの意思をついだって訳か。」

ミレイ頷いた。

と同時に「私は・・・あの女を許せない。兄を・・・そして・・・知らぬ  
間に私の・・・

両親を奪ったのだから!!」



哀「・・・ミレイさん。」

ミレイ「フツと笑いタバコに火を灯し」とまあ・・・大体こんな感じだね。私の過去話。」

服部「自分・・・色々辛い思いしてきたんやな・・・。」

哀「じゃ・・・ミレイさん。私からも1つ良いかしら？」

ミレイ「何？志保？」

哀「ミレイさん。貴女・・・ひょっとして今でもジンの事を・・・？」

ミレイは再度フツと笑い外を見に窓に行った。

その様子を影でジッとにジーンが見つめているとも知らずに・・・。

第8章。ミレイの過去。完。

## 第8章。ミレイの過去。（後書き）

第8章もお付き合いくださり誠に有難うございます。

さて・・・次回は夏美の過去について・・・

そして、彼女達がワカバの人間だって事を話す

と言う予定で書かせて頂きます。

今日は・・・オマケは都合上・・・

時間が出来次第書かせて頂きます。

それでは・・・今回はこの辺で失礼致します。

## 第9章。夏美達の正体。(前書き)

此処では、夏美とライカの正体が明らかになります。

ではまた長丁場となりますがどうぞじっくり。

## 第9章。夏美達の正体。

ミレイ窓側に立ちながら「さて・・・私が此処まで、口を割ったんだ。  
夏さん達も、ソロソロ

あね、？」

と夏美達を見てニヤリ。

ライカハアとため息をつき「・・・相棒。話すか？」

夏美「ああ。だって・・・前に言ったんじゃない!!」

ライカ頭をかきながら「参ったよ。ミレイ、降参だ。」

と続け様に「実は・・・私等、その広州と対立しているワカバって組織の一員なのさ。」

コナン「え？そっ・・・そうなのか?!」

夏美苦笑いし「ああ。私じゃあは、リーダーでそして相棒が副リーダー。

んでもって・・・序に幹部も勤めさせてもらっているんだ。」

哀「へえ〜。貴女達が。」

コナン「・・・あのワカバの？って・・・何で、隠していた？」

夏美再び苦笑いをし「悪いね。一応、極秘任務、ってやつでね。誰にも、言えなかった

んだ。」「

コナン「成る程な。」と続け様にコナン、夏美の首に掛けてある黒の四角い十字架の

ネックレスを指差し「なあ……。夏美。此れって、誰かの貰いもんか？」

とニヤリ。

夏美「ふえ?! なっ……。何言ってるんだよ。コナン。」と焦苦笑い。

と続け様に……。

言える訳ないわ。

ジンからの貰い物だなんて……。汗。

更に続けて服部「その……。『極秘任務』については、『教えてくれへんのか？』」

夏美「それ言うと……。『極秘』では無くなっちゃいますよ。平さん。

」

夏美が服部に敬語を使う理由。

それは、昔、大阪に居た時何か知らないが事件に巻き込まれ大阪府警本部長である



服部の父と服部に助けられた事があつたからだ。

それ以来夏美は何故か年下なのに敬語を使うようになる。

服部ニヤリと笑い「なあ・俺と橘の姉ちゃんの仲やんけ。話してくれへん？」

夏美慌てて「い・幾ら、平さんの頼みでも此れだけは、ご勘弁を」。 「

と苦笑いして言った。

服部「ほあゝ。そうか。ならこつちにも考えあるで？言わんかったら。。。

大滝ハンに調べて探りを入れてもらうだけや。」

ライカ苦笑いし「・・・夏美。この人を欺く事は出来んよ。」と続け様に「こうなら

此れも「言うしかない」んじゃない？」

夏美「馬鹿野郎。そんな事したら後でアジト（本部）に戻ってもしばれて兄様あにさまに

どやされるのはうち等なんだぞ？」

（夏美が言う兄様とは、後に出てくるワカバの首領。陳チエンオウガ。の事。

夏美達はオウガの妹分でもある。）

ライカ再度苦笑をし「・・・あ。そっか。」

服部「あ・・・それよかは大丈夫。さっきワカバのアジト（本部）に連絡したら

偶然にもオウガハンが出てな。平次君には夏美を助けてもらった借りがあるから

別に聞いてもええよ。って許可もろったから。」と再度ニヤリ。

それを聞いてライカ「え？マジ？」

夏美「ちょ・・・ちよっと！兄様あああああ。」

もう、勘弁してくれよ。

コナン横目で「ハハハッ。」と苦笑い。

と続け様に服部コナンを見て「なあ・工藤。お前も聞きたいやろ？」

コナンニヤリ「ああ。」

哀も「同感ね。」と続け様に「此処まで話してくれたんだから・最後までねえ？」

「ワカバのお2人、さん？」と夏美達を見てニコリと微笑んだ。

夏美「ため息を付き」「分かりましたよ。平さんお話すれば良いんですね？」

服部「最初からそう素直になれや。橘の姉ちゃん。」

夏美「・・・しつ、仕方ないですよ。兄様のご許可がなかったらお話しする事なんて

出来なかつたんですから。」

コナン「それだけ、やばいのか？」

ライカ「極秘……に関してはね。まあ……普通の‘任務’内容だったらうち等も簡単に」

‘話す事’が出来るんだけどね。」

コナン「成る程。」と続け様に「なあ……ライカ。物は序だが、どうして夏美の奴」

服部に敬語使ってるんだ？」

ライカ今まで吸っていたタバコを持ってきた携帯灰皿に押し付け消し真新しいタバコに火を

灯し「ああ。アレはね、新さん。夏美……昔、野暮用があつて大阪に行っていた時が

あつてね。其処で案の定事件に巻き込まれ怪我覆つたんだ。その時に服部さんのお父さん

と服部君に助けられたつて訳。だから……。まああいつにとって彼は‘命の恩人’なんだろ

う。それ以来、彼と会つたんびに敬語使っているよ。」

コナン納得し再度「・・・成る程ね。」

一方、夏美は「今回の私等の‘極秘任務’はミレイを広州の連中から守る事。」

服部「成る程な。でも何でそれが‘極秘何や’？普通の任務でもええんちゃう？」

夏美吸い終わったタバコを携帯灰皿に押し付け消しライカと同様に

また新しいタバコに

火を灯す「そう、普通は思うでしょ？平さん。それが・・・そうも行かないんですよ。」

服部「何でや？」

ライカ「下手に事を、起せば、周りの一般市民も巻き込んでしまう恐れもある、

しまいにはミレイはあの日本でも世界でも有名な、闇の始末人、赤龍。そんな事が

表でもし・・・知るようになり、一般市民が逃げ回ってしまい一般市民の事が広州の連中にも



知られた場合・・・。」

夏美「多分、‘大惨事’になる可能性も否定出来なくはない。」

と続け様に「だからこそ・・・今回の任務は‘極秘’なのですよ。平さん。」

我々、ワカバは一応、広州とは違い‘表’ですから・・・その事を表の世界の方に

悟られないようにするのが主な任務ですからね。」

（表は正義）

（裏は悪）

コナン「しかし・・・、何故また？その広州って連中が、ミレイの事を？」

ライカ「これは、新さん。私の考えに過ぎんが多分・・・ミレイのその、闇の腕の力、

がメイランの奴が、欲しがっている、からだと思うよ。それに私の勘がもし正しければ・・・

メイランはミレイに、誰か、を始末させる気だ。」

服部「な・・・何やと?!」と続け様に「それほんまか？ネアンの姉ちゃん？」と続け様に

「メイランちゆう女が始末しようとしている、標的、は誰や?」

ライカ領き「ええ。」と続け様に「申し訳ないね。服部さん。其処まではまだ・・・。」

服部「さよか。」

そして夏美「・・・だからこそ！です！平さん！！」

此れだけは！！阻止せねばッ！！ワカバの・・・リーダーのそして幹部の名に

かけて！そして・・・橘の‘本家’の人間として！！！！」

もう・・・。

「あの時と」……。

同じ……事は絶対に……。

させないわ……！

必ずや……！

止めてみせるっ……！

だから……。

父さん、母さん見てね。

私、  
‘頑張るよ’。

と心にある決意を秘めて。

その様子を見て

ライカ「・・・夏美。」

と呟いた。

と同時に、大樹さん、楓さん。

どうやら・・・また貴方方の娘さんは、  
‘無茶を’、しそうですよ。

と続け様に心の中で呟いた。

第9章。夏美達の正体 完。

## 第9章。夏美達の正体。（後書き）

此方も此方で最後までお付き合いくださり有難う

ございます。遂に、夏美とライカの正体がばれました

（笑；）次回はですね。夏美の過去について書く予定

でいます。ですが・・・あくまでも予定ですので

もしかしたら変更があるかもしれないので

ご理解とご了承頂きたいと思います。

前回オマケ出せませんでしたので

オマケ取りあえず。

夏美「おいおい・・・うち等ばれてんじゃん！」

ライカ「だね〜！」

夏美「ハアとため息を付き」だね〜！じゃ無いよ！

相棒「これじゃ・・・任務が・・・。」

ライカ「所でお前さん。大丈夫なのか？」

夏美「何が？」

ライカ「何がじゃないよ。あの男ヒトミレイの

序にお前さんも見つけてしまったようだよ。」

夏美「・・・そうみたいだね。」



ライカ「その様子だと・・・黙って、こっちに  
戻ってきたんだろう？」とニヤリ。

夏美「だって・・・しゃくないやんけ！もし・・・

あの男に反対されたかもしれないんだもの。  
「泣き笑……」

ライカ「ははっ。」

って・・・話す所違うよな（笑……）

まあ・・・良いか。

と続け様に服部「次回もどうぞ宜しゅう！」

夏美「って！平さん！！何時の間に?!」

これ以上長くなるので以下自粛(笑；)

**第10章。夏美の過去。（前書き）**

此方は、夏美の過去についてのお話です。

後半には若干ですが・・・ジンの兄貴様が

出てきます。

## 第10章。夏美の過去。

哀その様子を見てライカに「夏美さん。やけにその広州って組織に『執着』しているよう

ね。」

ライカタバコを吸いながら頷き「ああ。無理もないさ。だって・・・」

哀「だって？」

ライカフツと笑い「いや・・・止めておこう。この話はいっ・・・基本的に『1番嫌がる』話

だからな。」

それを聞いた哀只両腕を組み黙っていた。

コナンも黙って夏美とライカそして哀を見て居た。

と続け様に「なあ。服部。」

服部「ん？」

コナン「あいつの過去……お前知っているか？」

服部首を横に振り「いいや。それが……俺も知らんねん。あいつ余  
自分の事話したがない

んせ。」

コナン「・・・そっか。」

と続け様に服部「只な。工藤。あいつご両親おらんらしいんせ。」

コナン「何？それ本当か？」

服部「あぁ。確か・・・事故で、両方とも亡くなったそうや。」

ミレイ「それを聞いて「いいえ！事故なんかじゃないわ！！あれは、やつ等」が

のせいよ！そつでしょ？！夏さん！！」

(やつ等は広州の事)

ライカ「おい！止めるよ！ミレイっ！！」と少々怒鳴りながら声を上げた。

ミレイハッと我に戻り「・・・ごめん。夏さん。私・・・。」

夏美フツと笑い「構わんよ。ミレイ。お前さんが別に気にすることもない。」

と続け様にライカを見て「相棒。私は大丈夫だからさ。」

ライカ「・・・でも。」と夏美を心配そうな顔で見る。

と其処で服部「なあ。。。橘の姉ちゃん。もし、良かったらや。この龍崎の姉ちゃんと

同じ様に話してくれへん？何が・・・過去にあったのか、を。」

夏美「・・・平さん。」

そして、ため息をフツとつき「分かりました。平さんが其処まで仰るのなら

お話ししましょう。」と続け様に「実は、私の両親もワカバの人間で



した。

父の名は橋大樹。母の名は橋楓。2人共、ワカバの幹部であり格闘隊の一員でも

ありました。」

服部「その時から自分、ワカバの団員だったんか？」

夏美「・・・はい。と言いましてもまだ末端でしたけど・・・。」

とコナン「橋大樹と橋楓は確か・・・あの伝説の拳法の使い手だったよな？」

夏美コナンを見て「ああ。父はあの伝説の拳法の4代風拳の1つである雷風拳。」

で、母が火炎風拳の伝承者。」

哀「で？何で貴女のご両親亡くなってしまったの？」

夏美頭をかき「アレは・・・私がまだ10代の頃。兄様のご命で父と母は私を連れて

広州のアジトに潜入捜査という形で入ったんだ。私達、ワカバの情報が入ったフロップーが

何処にあるかをね。それで・・・情報部にある事が分かりそれを奪還した。その時に・・・

案の定、広州の侵入者警報が鳴り、父は先に私達を外に逃がそうとその場に残り私は

母と共に外に出た。出たのはよかった物も。其処には広州の討伐隊って部隊が待機していて

そのリーダーがチェンランって言う女なんだけど・・・そいつが厄介でね。」

コナン「何で、厄介なんだ？」

夏美「あの女は、標的を滅ぼす為に常に、死の槍を持っていくのよ。」

コナン「死の槍？」

夏美頷き「あいつの槍の内部には、猛毒が仕込まれていて投げられて一歩でも刺さったら

もう・・・待ち受けているのは確実なる、死、それで・・・その、死の槍が私に襲い掛かったの

でも、私は刺さった感覚も、それに、痛みも、なかった訳。」

と更に続けて「私は、一応覚悟目を瞑っただけど・・・だけど・・・。

私は、助かった。そして・・・私が目を開けたら・・・。」

哀「開けたら？」

夏美悔しそうに「私の目の前に、私を庇って、あの女の、死の槍を、食らってしまった」

母の姿だったんだ。」

それを聞いたコナン達は驚き思わず固まってしまった。

ライカは、撥が悪そうに顔を顰めた。

と続け様に夏美「序に話しておく、私達ワカバの人間は、仲間達」の気を感じる事が

出来る。だけど・・・あの時、父の「気」も感じる事が出来なかった。

其処で私は悟ったんだ。「父さんは死んでしまった」。とね。序に、アレから

私を庇った母も私の中で息絶えた。そして、私は、両親の拳法を受継ぎ私自身も

「ワカバ」にこれからもずっと仕えよう。そう決めたんだ。」

と続け様にコナンようやく口を開き「んで？そのメイランって奴は・  
・・。

お前と何か‘関係’があるのか？」

夏美「あの女は・・・。嘗ての私の‘姉貴分’だった女だよ。新  
」

コナン「な？！お・お前の‘姉貴分’だった奴だと？！」

夏美頷き「だが、広州設立に当たり・私の左肩に銃弾を浴びせ  
捨てたよ’。

と続けて「ま・・・こんな所かしら。これ以上は・ちよいと勘  
弁ね。」

服部夏美の側によって「良く・・・話してくれたな。お前も。俺とても嬉しいねん。」

お前・・・あの時も'余話してくれへんかったから。'

夏美フツと笑い「・・・私の暗い過去なんか、話しても何も得にならんとお思いますてね。」

それに、私の過去なんかよりも・・・ミレイの方がずっと'重い'ですよ。」

と続け様にライカを見て「すまん。また・・・外出てくるな。」

そう言い夏美外に出て行った。

ライカ「・・・夏美。」

やっぱ・・・気まづくなったのか？

相棒。

服部を始めコナン達も夏美が外に出たのを只見送ったが・・・次の瞬間ミレイが震え始めた。

コナン「おい！ミレイ！どっした？！」



ミレイ「……し、新一！！早く夏さん連れ戻した方が良い。このま  
まだと……」

「あの男<sup>キト</sup>」が夏さんに接近してくるっ！！！！」

哀「あの男<sup>キト</sup>って？」

ミレイ「ジン兄さまよう……」

哀それを聞いて「……！！！！」

ジ・・・ジーンがこの近くに居るっ?!!

と続け様に「ライカさん!!急いで夏美さんに連絡を!!!」

ライカ頷き「あ・・・ああ。」

夏美の携帯に連絡を入れる。

すると夏美「あいよ!私!」

ライカ「あ……。相棒か？私だよ。」

夏美「ん？相棒どうした？」

ライカ「外に出た途端ですまんが、大至急こっちに戻ってきてくれ  
！」

夏美「良いけど……。どうかしたか？」

ライカ「ミレイが……。あの男ヒトの気配を察知したらしいんだよ。」

夏美苦笑いをし「・・・そうか。分かったよ。戻る絡まってな。」

ライカ「ああ。待ってる。」

そう言い携帯の電源を切り阿笠家に戻ろうとした次の瞬間。

「よう。何処に行くつもりだ？俺の夏美。」

と低い男の声がした。

夏美

あ・・・。

じっ、この声は……。

まさか？

と心の中で呟いた。

第10章。夏美の過去 完。

第10章。夏美の過去。（後書き）

今章もお付き合いくださりありがとうございます。

今章は夏美の過去編についてお送りいたしました。

さて、次章はですね。

何と・・・先に、ジンの兄貴様と夏美が会ってしまいま

す（笑；）

さて、彼女はどうかこの場を、乗り切るのでしょうか、

?次章もお付き合い頂ければ幸いです。

オマケ・・・。

夏美「おいおい汗。どうなってるんだ？

この小説の主演はミレイだろう？笑；；；

何で、私じゃあが？」

N「だって・・・ヒロインが早く窮地きつちに

立たされるのもどうかと思ひまして・・・。」

夏美「でもなあ・・・。」

ジンニヤリ「見つけたぜ？2人共。」

夏美「あ・・・ジン。また見つかったわね。」

笑・・・」

N「あ・・・後は、夏美さん宜しくです。」

逃亡を図ろうとするがウォッカに捕まった(笑・・・)

**第11章。夏美と漆黒の闇との再会。（前書き）**

今章では何と、ミレイより先に夏美がジンの兄貴様に

再会してしまいます。

そして・・・ジンの兄貴様は夏美に自分の下に戻るよう

に言います。

そう言われた夏美自身が出した答えとは・・・？



## 第11章。夏美と漆黒の闇との再会。

アレから自分の過去話をした後、気まづくなっただのか夏美は再び外に出た。

そして、相棒であるライカから緊急に戻るように携帯で言われ、阿笠家に戻ろうとした

その時「よう。何処に行くんだ？『俺の夏美』。」と低い男の声で声を掛けられた。

夏美その声に見覚えがあった。そして……その声の主の方に振り向いた。

其処にはジンが居た。

夏美「……ジン。」

そうまるで何事も無かったのかのように呟いた。

ジンニヤリと笑い夏美に近づいてきて「久しぶりだな。会いたかったぜ。」

そう言い夏美の頬に触れる。

夏美フツと笑い「ええ。久しぶりね。私も……会いたかったわ。ジン。」

そう言いジンの久しぶりの「ぬくもり」に触れた。

と続け様に「良く……此処が分かったわね。」

ジン再度ニヤリと笑い「盗聴器を忍ばせたんだよ。お前の・・・そのコートにな。」

と続け様に「以前にミレイを此処で見つけた時に偶然にもチラっとだが、お前が

相棒と共に居たのを見たんだよ。」

夏美「流石ね。貴方は欺ける事は相変わらず出来ないみたいね。」

ジン「ミレイは何処だ？」

夏美「さあ・・・でも、貴方ならもう、分かっているんじゃないか？」

ジンタバコに火を灯し「フ・・・そうだな。」

夏美「ねえ……。ジンお願いがあるの。」

ジン「何だ？」

夏美「もうしばらく……。ミレイをそっとおいてやって欲しいの。彼女は

広州の連中に狙われているから。下手に事を起せば恐らく大惨事になりかねない。」

ジンフツと笑い「。良いぜ？お前の頼みならな。」

夏美「。有難う。」

すると、ジン「但し、条件がある。」

夏美「何？」

ジンニヤリと笑い「お前が、今直ぐに・・・俺の下」に戻ってくる事だ。

そうすれば、ミレイの奴の事当分ほっておいてやる。」

夏美首を横に振り「しめんなさい。その条件は飲めないわ。」

ジン「何故だ？」

夏美「ワカバの『極秘任務』があるからよ。今回の任務は、私と相棒に任されたから。」

今直ぐにと言う訳には行かないのよ。」

ジン「ほう。そうか。」

そう良いロングコートのポケットに入っている愛用のベレッタの安全装置を外す。

夏美

や・・ヤバイ。

もしかして、怒らせちゃった、か？

夏美身の危険を感じ「まっ・・待って?!ジンっ!」

そう言いジンに抱きつき「この・・ワカバの、極秘任務、が終わってワカバの仕事が

ひと段落したら・・昔の様に、ちゃんと貴方の腕の中に戻るから、」。

だから・・・今は・・ね?お願いよ!」!

必死にジンに頼み込んだ。

その姿を見てジンクツと笑い愛用のベレッタの安全装置を元に戻し  
夏美の顎を挙げ夏美に

キスをした。

ジン「良いぜ」？その代わりに・・・ちゃんと「約束」守れよ？」と  
ニヤリ。

夏美頷き「・・・ええ。分かってる。」と続け様に「ごめんなさい。  
もう、戻るわ。」

そう言いジンから離れ阿笠家に再度戻ろうとしたその時「夏美。」

夏美「何？」



ジン「お前に1つ聞きたい事がある。」

と続け様に「シェリーの奴の居場所何処か分かるか？」

夏美その事を聞いてハツとしたが冷静を装い

「さあ……。ごめんなさいね。私は組織の人間では無いから分からないわ。」

と続け様に「組織には関与しないようにしているの。私は、あくまでも

ワカバの一員だから。また、会いましょう。ジン。」

そう言い今度こそ阿笠家に戻って行った。

ジン夏美の姿が見えなくなるまで夏美を見続けていた。

と同時に「お前……。まさか。広州の野郎を、1人、で潰す気なんざ……」

ねえだろうな？」と彼らしくなさそうに呟いた。

第11章。夏美と漆黒の闇との再会。完。

第11章。夏美と漆黒の闇との再会。（後書き）

今章もお付き合いくださりありがとうございます。

次章では、多分コナン達が屯している家の主

阿笠博士が出てくる予定です。

それでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ・・・5番目？

阿「皆さん。こんばんわ。此処では初めまして

じゃな？ワシが天才発明家である阿笠博士じゃ。」

コナン「おいおい・・・博士。自分で言うなよな。」

と呆れ顔。

阿「仕方あるまい??他に言ってくれる人がおらん

のじゃからな。」

哀「・・・はいはい。」

此方も此方で呆れ顔。

と続け様に「次回は・・・遂に博士のご登場のようよ。

ここまで読んでくれて有難う。」

N

・・・私の出番が(笑；；；)

ま・・・たまには良いか(笑)

## 第12章。博士。（前書き）

今章では、遂に博士が出てきます。

とまあ・・・出番が少ないとは思われますが・・・

お楽しみ頂ければと思います。

## 第12章。博士。

夏美は、アレカラジンと別れ再び阿笠家に戻った。

すると、1人の老人が出迎えた「お帰り。夏美君。久しぶりじゃのお。」

夏美「あ、博士。お久しぶりです。」と一礼。

この老人の名は阿笠<sup>ヒロシ</sup>博士。通称阿笠<sup>はかせ</sup>博士

コナンと哀の正体を知る人物の1人でもある。

夏美「今までどうされていたんです?」

阿笠「すまんのぉ。ちょっと野暮用が会って出かけておったのじゃ。

」

と申し訳なさそうに話し続け様に「何か、ワシが居たら話せそうな内容でもなかったからの

。。。  
」

それを聞いてミレイ「悪かったね。博士。気を使わせてしまって。」

と申し訳なさそうに言った。

阿笠「何。。。構わんよ。ミレイ君。何せ、此処にはコナン君や哀君がおるんじゃ。

皆で話さないと出来ん話でもあるじゃろつ。」と微笑んで言った。

と続け様に服部、夏美を見て「んで？すぐに戻るちゅうゆつて自分遅くなつたん？」

夏美分が悪そうな顔をして「いやはや……。ちよいと、トラブルに巻き込まれてしまっ

て。」

服部「トラブル？何の？」

夏美苦笑いをし「そ……其処まで言わないと駄目ですか？平さん。」



服部「当たり前やんけ。どんだけ心配したと思ってるん？」

と続け様に「それとも・・・自分『言えないんか？』」とニヤリ。

夏美ギクリとし心の中で焦りながら苦笑いをし・・・。

・・・言えるわけ無いじゃない。

ジンと会ったあつたなんて。

と続けて哀「ねえ。夏美さん。」

夏美「何？哀ちゃん。」

哀「貴女・・・ひょっとして、ジント、会ったんじゃないの？」

夏美それを聞いて「いや・・・、会っていないよ。」

コナンニヤリと笑い「夏美。嘘はいけねえよ。おめえ、ジント会って遅くなっただらろう？」

すると、夏美のもう片方のコートのポケットから盗聴器を取り出し、夏美に見せた。

夏美それを見て驚き「何時の間に？」と続け様に「分かった・・・降参だ！」

と両手を上げた。

コナン「お前・・・ジント、恋人同士、だったんだな。」

夏美「ビンゴ。話し聞かれていたんだ・・・。」

コナン「ああ。おめえが何時までたっても戻らないから心配になってな。」

夏美「悪かったね。新。」

と続け様にコナン「奴は、灰原の事まで聞いてきたんだろ？」

夏美、哀を見て「ああ。だけど・・・言わなかったよ」。言ったら大変だからな。」

哀それを聞いて安心した。

夏美「只ね、哀ちゃん。余安心しない方が良い。あの男はまた再び君を

探して来る」と思うよ。」「と続け様に「博士。これからも哀ちゃんの事頼みます。」

阿笠「ああ。任せておけ。」

すると、夏美の携帯が鳴った。

夏美「ちよつと失礼。はい！橘！！」

すると男の声が出た「あ……夏美の姉御？！俺！！雷外！！」

その声の主は夏美とライカの弟分でありワカバの一員でもある李<sub>ライカイ</sub>雷外

夏美「おう！雷外か？どうした？！」

雷外「姉御。大変だ！米花町に広州の捜索隊が来ている見たいなんだ！」

夏美「何？！それ本当か？！」

雷外「ああ。俺の兄さんからの情報だ。間違いないと思うよ。」

雷外の兄の名は、李ライフエイ。オウガの幼なじみでワカバの情報部の部長を務めている。

夏美「んで？今、場所分かるか？」

雷外「多分・・・4丁目か5丁目辺りだと思う。」

夏美「了解した。んで・・・奴等の狙いは？」

雷外「多分・・・ミレイの姉御だと思う。」

夏美「そうか。よし！今から私が探りに行く。また何か分かり次第。連絡をしてくれ。」

雷外「了解！」

そう言い携帯を切り、「ライカ!!」

ライカ「あいよ!相棒!!」

夏美「これからちよいと米花町の4丁目と此5丁目辺りを搜索してくる。」

奴等が居る可能性があるからな。お前さんは、此处でミレイ達を匿っておいてくれ。」

ライカ再びタバコに火を灯し「了解した。だが、お前さん1人で大丈夫か?」

夏美フツと笑い再びタバコを取り出し「大丈夫さ。相手は奴等の搜索隊、主に搜索するのが



任務。下手に物事をお越しはしないさ。」火を灯し言った。

ライカタバコ吸いながら「だと・・・良いんだかね。」と続け様に  
「もし、何かあつたら

連絡してね。」

夏美ニヤリと笑い「了解した!」と続け様にミレイに「良いかい?  
ミレイここから出ちゃ駄目

だよ?皆と一緒に居るんだ!良いね?」

ミレイ頷き「夏さん。気をつけてね。」

夏美「ああ。」

そう言い再び阿笠家を後にし黒ベンツに乗り込んだ。

阿笠「しかし・・・夏美君一人で大丈夫かのお？」

コナン「大丈夫だって！博士！」と続け様に「あいつには悪いが・・・  
・実は、

あいつの愛車である黒ベンツに発信機と盗聴器を仕掛けたんだ。い  
ざとなれば俺が

行ってやるからよ。」

服部「工藤。俺だけじゃうやる？俺等やる？」とニヤリ。

コナンそれを聞いて呆れ笑いをし「お前も来んのかよ。服部。」

服部「当たり前やんけ！！あいつは、俺に取っちゃあもう、家族、  
みたいな存在やからな！」

あいつに何かあったらまた助けに行く！」

コナン「・・・服部。お前・・・。」

と続け様に心の中で

お前にとって・・・夏美は其処までの、存在、なんだな。

と呟いた。

それを聞いてライカ「有難う。服部さん。其処まで相棒を思ってくれて。あいつ・・・」

大樹さんと楓さんが亡くなってから余・・・『自分の事』話さなくなつたからな。

それに・・・本家に戻っても本家の皆が心配してくれて色々と接してきてくれてるんだけど

中々ね。多分・・・あいつの事だから心配掛けさせたくないと思つて自分の中に留めている

と思つんだ。だけど・・・それが返つて周りから心配させられていると言つね・・・。」

服部を始めコナン達はそれを黙って聞いていた。

そして、服部ニツと笑い「いやはや……。俺は別に心配掛けれるとは思っても

あらへんで？寧ろそいつは大歓迎やからな。」

ライカ「・・・服部さん。」

なあ……。

相棒。

お前さんはこんだけ、お前さんを思ってくれている仲間、が居るんだよ。

だから、余ミレイの様に一人で背負い込むな。

そんな姿を見るのが一番心配なんだからな。

そして、皆・・・お前さんの帰りを待っているからな。

ちゃんと帰って来いよ！

相棒！

と夏美に語りかけていた。

第12章。博士。完。

## 第12章。博士。（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うございます。

さて・・・次章では、登場人物についてちよつと

書きたいと思います。（此方も此方で遅くなりましたた

が・・・汗）と言う事で特別章と言う形でお送り

したいと思います。此方も是非お読み頂ければ

と思います。

オマケ6・・・？

夏美「次章は何かオマケみたいだね？相棒。」

ライカ「そうみたいだな。と言うことは・・・

話はお休み？」



哀「まあ・・・そんな所になるかしら。」

と続け様に「此れからも色々な新キャラが出ると

思っけど楽しんで頂ければ嬉しいわ。」と続け様に

ミレイ「今後ともどうぞ宜しく。」

**特別章。登場人物。（前書き）**

これは、前半章に出てきた登場人物紹介です。

後にまた増える恐れがありますが、そちらは、

また別個で紹介したいと思います。

## 特別章。登場人物。

龍崎ミレイ。

米花女子大学に通う2年生で学科は一応国文科。

訳ありで留年をした。と同時にその正体は日本と海外で名を白めた  
‘闇の始末人’ 赤龍（セキ

ロン）性格は穏和かで優しい性格だが、仕事になると仕事に対して  
厳しい？性格になる。

黒の組織の幹部の1人であるジンの妹分である。が、ある日にジン  
達の取引を目撃し

その現場で闇に堕ちる前から心底敬愛していた姉貴分をジンに殺さ  
れる所を目撃してしまい

その日からジンの所から逃走し、米花町に潜り込んでいる。ジンに  
今でも追われている。

因みに、赤龍の名の由来は左腕に紅の龍の刺青が施されているから  
だ。

と同時に、身内は一切不明、（今の所？）である。

さえじままりえ  
沙江島真理恵

ミレイの大学の友達。であり幼なじみ。20歳。

学年はミレイより1個上の3年。学科は国文科である。

常に、ミレイの事を気に掛けている。優しい性格。

しかし、彼女は、ミレイがああ赤龍と言う事は知らない。

沙江島財閥のご令嬢でもあり、後から出てくる予定の鈴木財閥のご令嬢である

鈴木園子とも友人同士である。

前川カノン。

真理恵の幼なじみでありながら・・・ミレイの幼なじみでもある。

大学は真理恵達と同じ。で、年齢20歳。

性格は、若干天然が入って明るい性格。

此方も信じた外が・・・あの沙江島財閥と同じ有名財閥である前川財閥のご令嬢。

ジン。

黒の組織の実行部隊のリーダー格であり幹部の1人であり、ミレイの兄貴分。でもあり

ウォッカの兄貴分でもあり、夏美の恋人。

性格は冷酷無慈悲と言われるが、ミレイと夏美の事になると彼は彼

なりに優しさを見せる。

が、裏切り者やミスする者にはかなり厳しい。

それ故、今でもシエリー事宮野志保を追っている。と同時にミレイや夏美を自分の下に

連れ戻そうとも企んでいる。因みに愛車は黒のポルシェ356A。

ウォッカ。

黒の組織の実行部隊の1人でありジンの弟分。

常にジンと行動する事が多い。

任務にも冷静沈着と同時に冷酷にこなすが・・・心慮深さ?等に掛け

るのかたまたに兄貴分で

あるジンに注意を受ける。

阿笠博士。

コナン（新一）の近所に住んでいる自称天才発明家。

と同時にコナンと哀の正体を知っている数少ない1人。

でコナン達に取ってはとても頼りになる人。

江戸川コナン。

見た目は子供だが、その正体はあの有名な高校生探偵工藤新一。

幼なじみの毛利蘭とのトロピカルランドのデート中に黒の組織を追跡し取引現場を

目撃するが、ジンに頭を殴られ気を失い。口封じの為に組織の毒薬を飲まされ

体が小学生の体になってしまった。それから、蘭の家である毛利探偵事務所に居候し

黒の組織を追っている。今は帝丹小学校の1年生。

灰原哀。

見た目は子供だが、その正体は組織の科学者で新一が飲まされた毒薬の研究者でもある

宮野志保。コードネームシエリー。

唯一の身内だった姉、宮野明美をジンに殺された後、毒薬を自ら飲



み小学生の体になり

組織から逃走。今は、阿笠博士の家で居候し其処で解毒剤を研究中。

今は、コナンと同じ小学校に通っている。

小島元太。

コナン達と同級生。

性格は明るい所もあるが、若干短気な所もある。

自称少年探偵団のリーダー。

歩美の事が好き。

円谷光彦。

彼もコナンと哀の同級生。

で、性格はしっかりとした性格？

両親が学校の先生の為言葉遣いが丁寧。

歩美の事が好き。

少年探偵団の物知り？

吉田歩美。

彼女も、コナンと哀の同級生。

性格は好奇心旺盛な性格。

でコナンの事が大好き。

少年探偵団のマドンナ的存在？ならしい。

橘夏美。

ワカバのリーダー兼幹部の1人。でジンの恋人。でもあり対立している広州の女ボスである

メイランの嘗ての妹分。

で、4代風拳の2つである火炎風拳と雷風拳の伝承者であり、

先代の伝承者である橘大樹と楓の娘である。

性格は仲間思いで心優しく性格。その為仲間を傷つける奴は許せない。

年齢21歳。タバコはピアノシモワンとペイテルワンを愛用している。

愛車は黒のベンツ。

ライカ・ネアン。

夏美の相棒でありワカバの副リーダー兼幹部の1人でもある。

と同時に「死業一家」と言われたネアン家の娘。

であり夏美の幼なじみでもある。年齢21歳。

性格は夏美と同じ様な性格。

タバコはマルボロのウルトラメンソール四ミリを愛用している。

今は出ていないが車も持っている。愛車は赤のベンツ。

赤井秀一。

黒の組織と対立しているFBIの捜査官。であり、灰原の姉の宮野明美の恋人でも

あった。夏美の知り合いの男。

性格は・・・読めない？性格。

愛車は黒のシボレー。

服部平次。

西の高校生探偵であり、大阪府警本部長の服部平蔵の息子。

新一のライバルであり、親友同士でもある。

彼も新一の正体を知る人の1人。

性格は熱血漢？

それ故に両親に心配される？

夏美が嘗て大阪で何故か知らないが事件に巻き込まれその時に傷だらけの夏美を助けた。

夏美からは「平さん。」と呼ばれている。

陳オウガ（チェン・オウガ）

ワカバの首領であり、夏美やライカの兄貴分。と同時に考えられないが。。。

ジンの古くからの友人でもある。

性格は心優しく真面目な性格で、後から出てくる予定のライカの実の姉でワカバの副首領

であるレイカの恋人でもある。

年齢24歳。

リ・ライガイ  
李雷外

ワカバの幹部の1人でもあり、李ライフエイの実の弟であり夏美やライカの弟分である。

2人の事を「夏美の姉御。」「ライカの姉御。」と呼び本当の姉の様に慕っている。

年齢は18歳。

性格は夏美達と保々一緒の性格。

李ライフエイ（リ・ライフエイ）

ワカバの幹部の1人であり、情報部の情報部長も務めているオウガ

の幼なじみ兼相棒であり

雷外の実の兄。性格は雷外とほぼ同じ性格。年齢24歳。

(後から出演予定のキャラ)

メイラン。

ワカバと対立する広州の女首領であり、夏美の嘗ての姉貴分だった女。

性格は、昔は心優しい性格だったが・・広州設立後にその性格も曲がっていき

その当時の夏美が止めようとしたが夏美の左肩に銃弾を浴びせ夏美



を捨て、しまいには

夏美の両親を、死に、追いやる命令をした張本人でもある。

それ故、夏美は彼女の事を憎んでいる。

しかし、捨てたにも拘らず夏美への執着が凄く、夏美自身をジーンと同様に自分の下に

置きたいと思っている。年齢23歳。

レイ・アイリン  
玲愛燐

愛蘭と龍湾の実の姉で広州の女スナイパー。

性格は愛蘭とほぼ似たような性格。

年齢23歳。

レイ・アイラン  
玲愛蘭

広州のエリート組女幹部の1人。であり、ミレイの実の兄を殺した女。それ故、ミレイはこの

女憎んでいて、今でもミレイは追っている。性格は、仲間以外だつたらどうなっても

構わないと言つ冷酷な性格。それ故にメイランからの絶対的な信頼を得ている。

年齢21歳。

玲龍湾（レイ・ロンワン。）

愛憐と愛蘭の実の弟。

メイランを物凄く敬愛している。

性格は姉達と似たような性格。

年齢19歳。

レイカ・ネアン。

ライカの実の姉でありワカバの副首領でありオウガの恋人でもあり夏美の姉貴分。

性格は物凄く優しい性格。

年齢23歳。

宇津川雪音うづがわゆきね

ミレイが闇に堕ちる前から心底敬愛していたミレイの姉貴分。

だが、とある日のジン達の取引現場でジンの手により殺された。

と同時にミレイがジンの所から逃亡する理由も此れが原因だった。

だが、この女は後から分かったが、広州の末端だった。

性格は、心優しく基本的に誰にでも面倒の見る良い性格。年齢20歳。（享年）

チェンラン。

広州の幹部の1人で討伐隊の隊長でもある。

と同時に過去に夏美と有理の両親を、死に追いやった、張本人でもある。

性格は広州の仲間以外には無慈悲冷酷な性格。

年齢22歳。

常に武器である、死の槍、を持っている。

橘大樹。

夏美と有理の父であり夏美の先代の雷風拳の伝承者。

ワカバの幹部の1人でもありオウガの友人でもあった。

性格は夏美と似たような性格である。

享年40歳。

橘楓。

夏美と有理の母であり夏美の先代の火炎風拳の伝承者。

性格はまじめで心優しい性格。

まだ、末端だった夏美を庇ってチェンランの死の槍を浴びて死んで

いった。

それ故に夏美は両親が死んだのを、自分のせいだ、と思い込んでいた。

享年37歳。

橘有理。

夏美の実の妹。

性格は心配性で心優しい性格。

常に今のたった一人である身内の姉夏美を心配している。

年齡 19 歲。



## 特別章。登場人物。（後書き）

今章は、特別章として登場人物をまとめてみました。

次章は、夏美が広州の捜索部隊を追う所を書きたいと

思います。

それでは此処までお付き合いくださり

ありがとうございました。

何時ものオマケは今回これがオマケみたいな物ですか

らなしと言つ事でした承ください。

コナンと哀ちゃんの性格の事に関しては申し訳ありません。。。

ちょっと作者の方では読めない部分もありまして・・・（笑……）

省かせて頂きました。

今後とも物語りが進むに連れてキャラが増える恐れもあります。

その時はまた・・・追加する予定ですのでご覧頂ければと思います。

第13章。広州の捜索隊追跡（前編）。（前書き）

今章では、夏美と弟分である雷外のやり取りが主になります。

雷外は香港出身なので広東語を少しだけですが、入れさせて頂きました。

しかし・・・当方広東語分からないので

夏美のお礼の部分は日本語にさせて頂きました

（笑；；）

その辺はご了承下さい。

でも・・・広東語個人的に好きなので・・・

何となくどうしても入れたかったのです（汗）

### 第13章。 広州の捜索隊追跡（前編）。

アレから夏美は、弟分である雷外からの連絡を受け1人で愛車である黒のベンツを走らせ

広州の捜索隊の追跡に向かっていた。

すると、米花町4丁目の交差点で赤信号で止まっていた所、青のクラウンを見かけた。

夏美タバコ吸いながら「あの青のクラウン。まさか・・・奴か？」

と其処に夏美の携帯が再び鳴った。

そして、ディスプレイを見た。

相手は雷外だった。

夏美「おう！私だっ！」

雷外「あ・・姉御？俺だけど。」

夏美、信号が青になった事を確認し黒のベンツを走らせた。

「んで？何かアレから、分かったのか？」

雷外「ああ。って、姉御1つ聞くけど・・今米花町の何処走ってる？」

夏美「今か？米花町4丁目の交差点を走っている。それがどうかしたか？」

雷外「実はさ……。俺もボスのご命でさ。‘奴等の捜索隊’を追っているんだ。」

夏美「そうか。で？お前さん今日は車？それとも電車？」

雷外「いや……。タクシーだよ。」

夏美「で？お前さん今何処居る？」

雷外「姉御と同じ米花町の4丁目の交差点の左側。」

夏美「そうか。なら、私しゃあも今丁度其処通るから拾おうか？」

雷外笑顔で「え？良いの？」

夏美笑い「ああ。1人より・・・2人の方が良いだろ？」

雷外「ああ。って、所でライカの姉御は？」

夏美「あいつには、阿笠博士の家でミレイ達の保護を頼んでる。しかし、もし、緊急事態

になれば連絡入れる予定だ。」

雷外「了解した。あ……。姉御の車見えたよ。今行く！」

夏美「あいよ！」

そう言い携帯を切り道路の脇にベンツを止めて雷外を拾った。

231

雷外後部座席に座る。

と同時に「多謝！！」（ドーチエ）（有難う。）（姉御。）」

夏美「いや！構わないさ！雷外。シートベルト締めた？」



雷外頷いた。

夏美「じゃ・・・出すよ。」

そつ言い車を走らせた。

と続け様に「雷外。」

雷外「はいよ。」

夏美「携帯で話したんだが、青のクラウンを見かけてな。」

雷外「その青のクラウンの車体番号分かる？」

夏美「いや・・悪いが一瞬だったから其処までは・・。」

雷外「そうか。でも、421だったら。多分あの女。」

夏美「そうか。玲愛蘭。」

雷外頷いた。と続け様に「姉御。」

夏美「ん？」

雷外「さっきから……。後ろに二台の車が付いてきているよ。」

夏美「何？何の車？」

雷外「一台目は黒のポルシェ。二台目は……多分黒のシボレー。」

夏美「なあ……。その黒のシボレーの車体番号は分らんが、黒のポルシェは

356Aじゃないか？」

雷外「多分そう。」

夏美心の中で苦笑いをし

ジンだ。

もしかして、尾行しているのかしら？

と呟いた。

第13章。 広州の捜索隊追跡。 (前編) 完。

第13章。 広州の捜索隊追跡（前編）。 （後書き）

今章もお付き合いくださり有難うございます。

さて、次章はですね。今章の後編を書く予定で居ます。次章も今章と共々お付き合い頂ければ幸いです。

オマケ6？

夏美「ようやく・・・お前さんの出番が来たな。

雷外「

雷外「そうだね。姉御。」

と続け様に「次は奴等と会つのかな？」

夏美「さあな。作者次第だと思うよ。」

雷外「成る程ね。」と続け様に「では、次回もどうぞ

宜しく！」

雷外。  
」

**第14章。 広州の捜索隊追跡（後編）。 （前書き）**

今章では、前章の続きとして書かせて頂きました。

此方は、主にワカバの首領であるオウガと夏美と

やり取りが多いです。

## 第14章。 広州の捜索隊追跡（後編）。

夏美は、弟分である雷外と合流し米花町の4丁目を走っていた。

すると、雷外から二台の黒い車の尾行を受けていると報告を受けた。

一台は黒のポルシェ。

二台目は黒のシボレー。

夏美はその事を聞いて苦笑いをした。

多分・・・。

黒のポルシェは356A



自分の恋人の愛車だからだ。

すると、夏美「ん？」

雷外「どうしたの？姉御？」

夏美「前見てみな！雷外！また、あの青のクラウンだ。」

夏美の黒のベンツの前にその青のクラウンが止っていた。

と同時に車体番号を確認する。すると、421Bだった。

雷外「あ．．本当だ。姉御。」

夏美頷き「ああ。今さっき車体番号確認したよ。そしたら、421Bだった。」

雷外「じゃ．．．。」

夏美タバコを灰皿に押し付けそして新たなタバコを取り出し火を灯しながらニヤリと笑い

「ああ。多分．．奴の愛車だろうさ。玲愛蘭のね．．。」

すると、携帯を取り出しアジトに連絡を入れた。

すると1人の男が出た「はい！此方！ワカバ！」

夏美「あ・・ライフエイ？私だ！」

その声を聞いてライフエイと言う男が「おう！夏美か？お疲れさん！どうした？」

夏美「お疲れさん！唐突で申し訳ないけど・・今、兄様お時間大丈夫かな？」

ライフエイ「ん？オウガ？」　そう言いオウガをちらと見る。

オウガOKサインを出す。

ライフエイ頷き「ああ。大丈夫だそうだ。」と続け様に笑いながら。。。

「しかし、良く俺がオウガの部屋に居るって分かったな。」

夏美笑い換えしながら「お前さんが居る場所ならたいてい見当付いてるよ。」

ライフエイもそれを聞いて笑い返し「そうか。」と続け様に「じゃ・  
・オウガに代わるな。」

そう言い電話をオウガに渡した。

オウガ「代わった！俺だ。」

夏美「兄様。夏美です。お忙しい中申し訳ありません。」

オウガ「何、構わんさ。それより、アレから、何か奴等動きあったか？」

夏美「ええ。多少は・・・。」と続け様に「現在、雷外と共に米花町4丁目を走っているのです」

が、偶然にも奴の愛車を見つけました。」

オウガ「玲愛蘭のか？」

夏美「はい。」と続け様に「情報によると・・・奴は今回来る予定はなかったはずなんです」

・・・  
」

オウガそれを聞いて「大方、メイランの命令で奴も此処に来たのだろう。多分・・・」

目的場所は米花港だ。其処で、奴等は・・・仲間と遭遇し、ミレイを奪う、為の作戦を

練るのだろつ。「と続け様に「お前・阿笠さんの家に最近出入りしていただろつ?」

夏美「はい。」

オウガ「実は・あそこに、うちの他の連中を何名か張り込ませたんだ。」

そうしたら、広州の連中共も偶然見つけて阿笠さんの家を張り込ませてあつたらしい。」

夏美それを聞いて驚き「え?それって、本当ですか?!兄様?!」

オウガ頷き「ああ。後・赤井の奴とジンの奴も密かに張り込んでいたらしいから

多分・・・奴等も馬鹿ではそんなに馬鹿では無い。もし・・・それが、メイランの耳に

入っているとしたら・・・。」

夏美「もう、ばれている可能性がある・・・と言つ事でしょうか？」

オウガ頷き「その可能性は否定出来ない。もしかしたら、奴も現れるかもしれない。」

夏美・・・出来るだけ慎重に頼む。」

夏美「了解致しました。兄様。」



オウガ「じゃ・・・また何かあったら連絡頼む。」

夏美「はい。それでは。」

そう言い携帯を切った。

と同時にタバコを吸いながら「・・・ある意味、面でー（面倒）  
事になった。」

それを聞いて雷外頷き「ああ。そうだね。姉御。」

そして、青のクラウンは米花港方面に向かい始めた。

夏美それを見て「・・・逃がさないよ！」と続け様に「雷外。悪いね。ちよつと

スピード上げるよ！」

雷外頷いた。

そして、スピード上げ青のクラウンの追跡を再度始めた。

一方、夏美達を追跡している黒のポルシェの中では・・・。

ウォツカが運転していた。

ウォッカ「兄貴。」

ジン頷き「スピード上げる。ウォッカ。巻かれるな。」

ウォッカ「了解！」

そう言いスピードを上げて夏美達を追う。

それを見た黒のシボレーもスピードを上げて夏美達を追った。

第14章。 広州の搜索隊追跡。 (後編。 ) 完。

第14章。 広州の捜索隊追跡（後編）。 （後書き）

今章もお付き合いくださり有難うございます。

次章はですね、米花港に夏美達が潜入する場面を

書かせて頂く予定です。

それでは、次章も今章と共に楽しんで頂ければ

幸いです。

オマケ・・・？

ミレイ「夏さん。大丈夫かな？」

ライカ「大丈夫だろ？あいつを信じよう。」

私等があいつを信じてやれなくて・・・一体誰が

あいつを信じてやるんだ？」

ミレイ「・・・そうだね。」と続け様に

「皆さん。次章もお楽しみに。」

**第15章。夏美達、米花港に潜入（前編）（前書き）**

今章では、夏美達が対立している広州の捜索隊が

潜んでいる米花港へと潜入する話を書かせて頂き

ました。長くなると思いますので此方も前編と後編

に分かれて書かせていただきます。

第15章。夏美達、米花港に潜入（前編。）

アレから、オウガへの報告を終えた夏美達は、広州の捜索隊が居ると思われる

米花港へと向かっていた。

夏美

「……今度こそ！また、掴んでやる、そして……。ミレイを、奴等から

「守ってやる！！」と心の中で強く決めていた。

と同時に、父さん達の二の舞もね……。



雷外その様子を見てうすうす感じていた。

夏美が何を思っているのかを・・。

と同時にチラッと後ろを見て苦笑いをし「姉御？」

夏美タバコ吸いながら「ん？何だ？雷外。」

雷外「サイドミラー見てみなよ。黒のポルシェと黒のシボレーがまだ俺達を付けてるよ？」

どくすんの？」「

夏美笑いながら「構わないさ。このままで。」

雷外「え？良いの？」

夏美頷き「多分、あの黒のポルシェはジンの車だよ。気になって尾行してきたんだろうさ。」

と続け様に雷外「へ？ジンの兄貴さんの？」と更に続けて「じゃああの黒のシボレーは？」

夏美苦笑いをし「多分・秀さんの車だよ。」

雷外それを聞いて「・・・黒の組織とFBIか・・・何かある意味やばくなりそう」だよ？

姉御。」と苦笑い。

夏美「・・・同感だ。」と続け様に「・・・ドンパチ」にならない事を願うしかないね。」

そう言い米花港へと段々入って行く。

と同時にジンとウオツカ・・・そして、赤井は盗聴器で夏美達の会話を聞いていた。

すると、夏美「なあ・・・雷外。」

雷外「はいよ！」

夏美「さっきから何か、気にならないか？」

雷外「多分・姉御。そいつは、ノイズだ。」

夏美「それを聞いて辺りを搜索すると・・・。」

夏美「ハハハッ。『やられたよ』。」

雷外「ん？何か、オマケがあったのかい？姉御？」と笑いながら言った。

夏美、小型盗聴器付きの発信機を二台見つけて雷外に見せた。

一つは、黒。

もう一つは、赤。

雷外「ハハッ。と言うことは……。あの男達トか。」

夏美「・・・多分ね。」

雷外「んで？どうすんの？」

夏美「まあ・・・広州の面子の仕業じゃないって事が分かったから取りあえずこのままって

事で……。」

それを聞いて雷外若干呆れ笑いをし「姉御……。相変わらず、そういう所に関しては

‘呑気’だし……警戒心がないね。」

夏美「ほっとけっ!!」と笑い換えした。

と続け様に再度心の中で……。

しょうがないじゃないの!

だって……。もし、此れ壊したら……。

もし今度、再度ジンや秀さんに会った時に、どやされる、んだから・  
・。

特に、ジンの、どやされ方は……。

ある意味マズイんだもの……（汗笑）

と呟いていた。

第15章。夏美達、米花港に潜入（前編）完。

第15章。夏美達、米花港に潜入（前編）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うございます。

次章はですね、今章の続きを書かせて頂きたい

と思います。

次章もお付き合いくだされば幸いです。

オマケ・・・？

雷外「何かある意味、やばい事、？になってきたね。

夏美の姉御。」

夏美「そうだな。雷外。」

と同時に心の中で苦笑いをし、



ミレイと哀ちゃんを追われている気分だった気がする

よ。と同時に「んじゃ！次章も宜しくどうぞ！」

**第16章。夏美達、米花港に潜入（後編。）（前書き）**

おはようございます。

今章は、前章の後編です。

此方も此方で夏美と雷外のやり取りが主になります。

第16章。夏美達、米花港に潜入（後編。）

夏美達は、あれから広州の搜索隊に勘付かれぬように、夏美の愛車である黒のベンツを

誰にも気付かれぬ部分に止めて降りた。

そして、歩き始めた。

一方、ジンとウォッカも黒のポルシェをばれない所に止め降り夏美達の後を追った。

しかし、赤井は黒のシボレーの中に居た。

ジン達との接触をあえて今は避ける為だ。

そして、歩き続けると・・・。

1つの倉庫から物音と声があった。

夏美達は其処で足を止める。

雷外夏美を見て小声で「姉御。」

夏美頷き小声換えて「ああ。多分・・・この声と言っている事するのは・・・」

「奴等しか居ないだろうな。」

と続け様に「倉庫番号確認して。」

雷外頷き「D - 123。」

そして、メモを取った。

と続け様に「はい。姉御。」

夏美、雷外からメモを受け取り「じゃ・・・兄様に報告だ。」

雷外「了解。って・・・姉御!! あ、あれあれ!!」

と道路の方に指をさした。

すると、其処には赤のベンツが通っていた。

と続け様に「こっちに向かってくるよー!」

夏美軽く舌打し「こっちに来るって事は恐らく、あの女だ。」

(夏美が言うあの女とは広州の女首領。メイラン。)

と続け様に「隠れるよ!取りあえず、今は隠れて様子見だっ!」

雷外頷きばれなさそうな倉庫のコンテナの死角に隠れた。

そして、聞こえない程度に夏美、アジトに連絡をしオウガに報告した。

と同時に赤のベントはその夏美達が見んだ倉庫の前で止り運転手が後部座席のドアを開け

其処から1人の女が出てきた。

運転手そして・・・広州の捜索隊らしき1人がその女に一礼した。

雷外小声で「やっぱな。あいつだ。メイランだ。」

と呟いた。

そして、夏美、アジトへの報告を終え携帯を切った。

雷外「姉御。終わった？」

夏美頷き「ああ。念の為うちの連中も何名か此方に向かわせて下さるらしい。」

雷外「んで？俺等はどくすんの??」

夏美前に吸っていたタバコをばれないように携帯灰皿の上で消し、  
そしてまた



タバコに火を灯し「先ず・・・待機。もし、ばれそう・・・また動き」があり次第

動けとの事だ。」

雷外それを聞いて「了解した。それまで・・・此处ね。」

夏美、雷外を見て頷いた。

と同時に、密かに、ジンとウォツカが夏美達に近づいていた。

第16章。夏美達。米花港に潜入（後編）。完。

第16章。夏美達、米花港に潜入（後編。）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うございます。

さて、次章は、広州の連中の動きについて書く予定

でいます。もしかしたら、変更等も考えられますので

その時はご了承ください。

オマケ。。。9？

夏美「遂に・・・広州の捜索隊の目的が明らかか？？」

雷外「かもだよ。姉御。」

夏美「何で？」

雷外「・・・だって、あの作者・・・気まぐれ者、だも

の。  
「

ライカ

おいおい（笑……）

と続け様に「次章も宜しく。」

第17章。ワカバと広州と漆黒の闇（前編）（前書き）

今章は夏美達が遂に広州の女首領であるメイランと

会います。因みにメイランは夏美の事を中国語で

呼びます。

昔・・作者自身が中国語習っていた事もありますので

遊び半分に入れてみました（笑）

第17章。ワカバと広州と漆黒の闇（前編）

すると、雷外、ふとジン達の‘気配’を感じたのか。

「・・・姉御。」

夏美苦笑いをし、「近づいている、？」

雷外頷いた。と同時に「ねえ・・・ソロソロ、奴等の所に、乗り込む、？」

夏美フツと笑い「・・・そうだな。」そう言い携帯灰皿に静かにタバコを消し

「行くよ！雷外！」

雷外「あいよ！」

そう言い二人して広州の搜索隊等が居る倉庫に乗り込んだ。

その様子を見てウォッカ「兄貴。どうやら夏美さん達、俺達の事勘付かれた'みたい

ですぜ?」

ジンニヤリと笑いながらタバコに火を灯し「どうやら。その様だな。ウォッカ。」

ウォッカ「で?これからどうしやす?」

ジン「そうだな。広州の連中も気になるからな。夏美達が潜入した倉庫に俺達も」

潜入するでしょう。」

それを聞いてウォツカ「了解！」

そう言い2人して夏美達の後を追った。

此処は、広州の搜索隊等が居る倉庫の中。

メイラン「ご苦労様。お前達。」

広州のメンバー一同（捜索隊も含め）

「はっ！メイラン様！」

とメイランに一礼する。

と続け様に「愛蘭。」

愛蘭「御前に。メイラン様。」



とメイランに一礼する。

メイラン「赤龍と夏美シヤマメイは見つかったの？」

愛蘭「はい。此処米花町の阿笠家にいらっしやいます。」

メイランそれを聞いて微笑んで「そう。良かったわ。探す手間が何とか省けたわね。」

愛蘭「それで？この後いかなさいます？我が主様。」

メイラン「・・・そうね。あの子達をいえ・・・赤龍だけを、あそこ、から連れ出しましょう。」

愛蘭「え？赤龍だけをですか？」

メイラン頷き「ええ。」と続け様に「だって・・・あの子、はもう、此処に居るんですも

の、。」と更に死角の部分に隠れている所を見て「そうですね？シヤマメイ夏美

私の、可愛い妹。」

すると、夏美が雷外と共に出て来た。

夏美軽く舌打「もう・・・バレたんかい？早いな・・・。」

と苦笑い。

雷外警戒をする。

すると、メイラン雷外を見てクスツと笑い「あら・・・あのライフ  
エイ所の弟君まで

来ているの？」

夏美フツと笑い「悪い？だって・・・今回は、仕事、出来たんだか

らな。

メイラン「姉さん」。

それを聞いてメイランフツと笑い「そう。『仕事』でね。その辺は相変わらずね。

シャアメイ  
夏美」

夏美タバコに再び火を灯し「此れでも・・・あなた所の対立している『ワカバ』の一員

だからさ。「と続け様に「赤龍はあなた達『広州なんかに渡さないよー!』」と続け様に

「『彼女』は私の『大切な人』の大事な『妹分でも』あるからね。」

と続け様に後ろを見て「そうでしょ？ジン。」

すると、後ろからジンがウォッカを連れて出てきた。

第17章。ワカバと広州と漆黒の闇（前編。）完。

第17章。ワカバと広州と漆黒の闇（前編）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うございます。

さて、次章は、この続編を書く予定でいます。

次章もお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ……。10？

雷外「お疲れ〜！姉御。」

夏美「お疲れ〜！弟よ〜！」

ミレイ「……。何か……。私の出番が最近少ないような

気が……。泣」

ジンニヤリ「なら、俺が作者に頼んでやるつか？

元々はお前が主人公だからな。」

ミレイ「本当？ジン兄さん？」

ジン「ああ。」

ミレイ「やった ジン兄さん大好き」

ジンに抱きつく。

ジンミレイの頭撫でて「おい。作者。」

N a t s u 探す。

夏美「彼女なら・・・またどっか行ったみたい。」

と苦笑い。

ライカ「そう言えば・・・明日、テストだって言ったなあ。」

夏美「あれ？作者さん学生？」

ライカ頷き「大学4年らしい。」

夏美「・・・成る程ね。」

これ以上長くなる恐れがあるので以下自粛（笑……）



第18章。ワカバと広州と漆黒の闇（後編）（前書き）

今章では、前章の後編です。

雷外が撃たれそうになりますが、逆に夏美が雷外を

庇い撃たれてしまいます。

第18章。ワカバと広州と漆黒の闇（後編。）

「ジンニヤリ「良く、俺達」が此処に居るって事が分かったな？夏美。」

それを聞いて夏美フツと笑い「雷外の奴が薄々、勘付いて、居たのさ。」

と続け様にウオツカを見て「久々だね。ウオツカ。」

ウオツカ夏美に一礼し「お久しぶりです。夏美さん。お元気そうで何よりです。」

夏美「ウオツカもね。」と微笑んだ。

そして、メイラン再度クスと笑い「あらあら・・・しばらく見ないうちに、随分と、」

たちの悪そうな「お友達」とつるむようになったのね。夏美<sup>シヤマメイ</sup>？」

夏美「・・・あなた達とつるむよりかはある意味、随分とマシな方だ  
と思うがね。」

と悪戯笑みを浮べて言った。

ジン夏美の側により「悪いな。メイラン。こいつは「ダチ」ではね  
えんだ。」

それを聞いてメイラン「あら？だったら・・・この子は貴方の「何」  
？」

ジン再度にやりと笑い「こいつは俺の『女』さ。」

と続け様に「・・・昔からな。」

と続け様に雷外メイランに向かって「あんた！『あの時』夏美の姉御を『捨てたんだろ』

う、？！なのに・・・なのに・・・今更何さっ！！今更っ！！姉御の姉貴面してんじゃねえ！！」

と怒鳴った。

すると、広州の捜索隊のメンバーの1人が「貴様っ！！メイラン様に向かってなんて事を！！」

「そう言い雷外に飛び掛ってきた。

だが・・何時の間にかジンの側から離れた夏美が雷外を庇っていた。

と同時にその雷外に飛び掛ってきたメンバーに「・・私の『相棒』  
達（仲間の事）に手出し

したらこの私が許さないよ。」とひと睨み・・。

メンバー「クソツ！夏美様！貴女様まで『ワカバ』に味方を?!」

夏美前吸っていたタバコを携帯灰皿に再び消しそして真新しいタバ  
コに再び火を灯し

「勘違いしているんじゃないよ？」私は元々最初から「ワカバの一員。」

それは「昔も」「今も」変わらないんだからさ。」

メンバー「クッー!!」

そして、メイラン「戻りなさい!」

メンバー「……ですが。」

メイラン「戻りなさい!」と言っているの!分からないの?」

メンバー納得しない顔しながらもメイランに一礼し下がった。

すると、メイラン夏美を見てフウとため息をつき、「その辺は変わっていないのね。」

シャアメイ  
夏美。」

夏美「・・・あなたは変わってしまったよ。」

と悲しそうに呟いた。

すると、倉庫に銃を構える音がした。

ジン「ん？」

ウオツカ「・・・兄貴。」

ジンニヤリと笑いタバコを下に落とし踵で踏みつけもう一本に火を  
灯し

「ああ。」「どっかに」「こいつ等の他に」「仲間」が潜んでいるようだ。  
」

雷外「・・・姉御。」



夏美頷き「ああ。どうやら、良い展開、ではなさそうだ。」と笑った。

メイラン「・・・残念だわ」。シャアメイ夏美。貴女なら、分かってくれる」と

思ったのに・・・。」と再度クスツと笑い「死んだご両親と、同じ道を歩んだ事後悔すると

良いわ。」と同時に「貴女に、教えてあげる」。ワカバに付いてしまった事がどんなに

「愚か」だったって事を。」

夏美「何？」

すると再び、何かを感じ、「伏せろっ！！雷外っ！！」

雷外「え？」

すると、一発の「銃声」が響いた。

そして・・・。

雷外が撃たれた・・・はずだった。

が・・・。

雷外「・・・え？」

其処には再び雷外を庇った夏美が左肩を抱えて立っていた。

そして・・・序に左太もも撃たれていた。

夏美の左肩と左太ももから血が滴れる。

雷外「・・・な、夏美の姉御っ！！」

と続け様にジン夏美の側に駆け寄り、夏美を支える。

夏美少し息切れしながらも雷外を見て微笑んで「・・・け、怪我不いか？雷外。」

雷外頷き「ああ。有難う。」

メイランは信じられない顔をしていた。

と続け様に「どうして？」「庇うの？」「別に、私は、貴女を傷つけようとした訳じゃ

ないのよ？」

夏美フツと笑い「そいつは・・・愚問、だよ。メイラン。」

と続け様に「別に・・・ワカバ」や私じゃあの「大切な人達」を守れるんだったら

こんな傷、軽いもんさ。」

そう・・・。

嘗て、母が「あの時」私を庇ってくれたように・・・。

死なせはしないわ！

もう・・・誰一人も。

それが、今の私に与えられた使命。

と同時に倉庫周りが車の音がし始めた。

それと同時に外に待機していた広州のメンバーの1人が入って来て  
「メイラン様っ！」

メイラン「何事?!」

メンバー「ワカバ、です!、ワカバ、の面子がこっちまで嗅ぎ付けて来ました!」

メイラン「何ですって?!」

と同時に再びどうして?という顔になった。

それを見てジン再度ニヤリと笑い「・・・悪いな。こいつが銃撃受ける前に俺が

ワカバに連絡しておいたのさ。」

夏美、ジンを見て「・・・ジン。有難う。」

ジンフツと笑い夏美を見て「・・・何。気にするな。オウガにも俺から言っておいたから、

多分・・・。」

夏美「兄様自ら態々お出に?」

ジン「ああ。来るだろうよ。」

そして、緑のベンツやら・・・

様々な車が止り

ワカバのメンバーとそして、何と服部とコナンまでもが降りてきた。

夏美それを見て「・・・なっ?!」



平さん！それに・・・新！！

どうして此処に？！

そして、それを見たジンは再びニヤリと笑い「ほう。西の探偵のガキまで出て来たか。」

と続け様にコナンを見て「ん？あのガキ・・・。」

誰かに似ているな。

と心の中で呟いた。

そして、服部血相を変え「夏美！！！！何処やっ？！何処におるんやっ？！」

と珍しく下の名前を呼んで倉庫の中に入って行った。

コナンそれを見て「おいっ！待てっ！服部！！！」

そう言い服部の後を追った。



第18章。ワカバと広州と漆黒の闇（後編）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うございます。

さて、次章は、ワカバの総メンバー？が

倉庫に大集合する予定です。

此方も前編と後編に分けて書く予定で居ます。

と続け様にこの前編、後編シリーズは

後もうしばらく続く予定でも居ます。

では、次章も今章と同様にお付き合いくだされば

幸いです。

いつものオマケ。

オマケ・・・10？

雷外「・・・姉御。」

夏美「ん？」

雷外「・・・ごめんね。本当に・・・。」

夏美フツと笑い「気にするな。」

と雷外の頭を軽く撫でた。

と続け様にジン「ま・・・夏美も大丈夫そうだし、

取りあえず安心だな。」と更に続けて

「次章もよろしく頼むぜ。」

第19章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場（前編）（前書き）

おはようございます。

今章では、平次君達がワカバと共に乗り込んできます

と言いつつ・・・先に平次君が乗り込んでしまいました

けど・・・（笑……）

では、今章もどございゆるじと。。。

第19章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場。（前編）

服部「夏美〜！何処や？！何処におるんや〜！」

そう言い倉庫の中を駆け回った。

コナン「服部！」

そう言い服部を追い続けた。

すると、メイランクスと笑い「あらあら……。態々、こんな所で来るとはね。」

何と物好きな探偵坊や達事。「と続け様に「でも……。此処に来られたら、只じゃ帰せない。」

わね。「と更に「彼らにはちょっと、痛い目」に合わせた方が良さそうね。」



そう言い格闘隊を出させた。

そして、「夏美!!」

と服部夏美の所に現れた。

夏美「へっ・・・平さん?! どうして此方に?!」

服部「お前がいつまでたっても連絡来んから・・・心配になって来たんや!」と続け様に

「あの・・・ボウズが仕掛けた盗聴器付発信機を頼りにな。」

夏美「・・・そうでしたか。ご心配おかけして申し訳ありません。」  
と続け様に

「ですが・・・もし、平さんの身に何かあったら・・・私、平さんのお  
父さんに顔向け出来ませ

ん。此処は危険です！早々にあそこにお戻りください！」と促す。

服部「怪我している奴を見て誰がほっとくんかい！俺も、やるで  
？」

と続け様に「もし・・・お前にまた何かあったら・・・俺もお前の、  
両親、に顔向け出来へん

ねん。」と苦笑い。

それを聞いて夏美「・・・へ、平さん。」

と続け様に雷外「ねえ・・・姉御。お話中横入りで申し訳ないんだけど・・・。」

夏美「どうした？雷外？」

雷外「服部君って・・・一体??」と続け様に「服部君のお父さんって・・・??」

夏美納得した顔で「ああ。お前さん。あまり平さんの事詳しく知らなかったな。」

と続け様に「平さんが西の高校生探偵って事は・・・多分お前さんも知っているよな？」

雷外頷いた。

そして、更に続けて「平さんはね・・・あの大阪府警本部長である服部平蔵さんの息子さん

なんだよ。そして・・・昔私が、大阪で何が原因で起きたかは知らんけど・・・。

事件に巻き込まれんでもって・・・大怪我追いそれを助けてくれたのが・・・

この服部親子って訳。」

ジンそれを聞いて

・大阪府警本部長の倅せがれか、ある意味、面倒な、奴だな。

と心の中で呟いた。

雷外「成る程ね。姉御が、服部君に何となく、敬語、使っている理由分かった気がしたよ。」

夏美フツと笑い「おしゃべりは・・・此処までだ。どうやら、奴等の格闘隊、が現れた」

と言う事は・・・やりあう、つもりらしい。」

と夏美が立ち上がろうとしたその時「お止めくださいっ!!姉者あねさま!!」

と男の声が聞こえた。

第19章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場。（前編）完。

第19章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場。（前編）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うございます。

さて、次章はこの後編に付いて書かせて頂く予定です。

す。

次章も今章と同様お楽しみ頂ければ幸いです。

と同時に今まで書き忘れてましたが・・

平次君の関西弁にはひよつとしたら変な部分も

あるかもしれません。それに関しましては

当方が、関東人なので・・その辺に関しましては

ご了承くださいますようお願いいたします。

オマケ・・11？

夏美「・・・まさか平さんまで乗り込んで来られるとは

・・・。」

雷外「・・・予想外だったね。姉御。」

夏美「・・・ん？そうだな。」

N

まるで・・・かつてのソフトバンクのCM見たい？

(笑；)

服部「まあ・・・何はともあれ・・・此処まで読んで



くねておおきに。またよろしゅう！

夏美「！！へ・・・平さん！いつの間に？！」（笑）

第20章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場（後編）（前書き）

今章は、前章の続きです。

後半にはオウガ様が出てくる予定です。

第20章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場（後編）

夏美その声に聞き覚えがあった「ら・・・雷龍ライロンか?!」

その男の名は李雷龍リ・ライロン。夏美の実家である橘家本家の使用人でも

ありワカバの一員でもあり夏美の弟分でもある。

雷龍「はい。俺ですよ。雷龍です。姉者あねさまもつすぐ他の我々のメンバーも来ます。」

ですから・・・申し訳ありませんがもつしばらく、「ご辛抱を。」と更に続けて

「お怪我なさっているのに・・・。『ご無理は、禁物ですよ。もし・・・姉者に何かあったら

俺・・・旦那様方に顔向け出来ません。」

夏美苦笑いをし「それ・平さんにも言われたよ。と言っても似たような事だな。」

と続け様に「・・・ッ！」

顔しかめ撃たれた左肩の傷を手で押さえる。

すると、ジン「大丈夫か？夏美。」

夏美フツと笑い「ええ。平気よ。」

・あの女に「撃たれた過去の銃弾の傷」がこんなにも今になって  
「疼いている」なんて

・。。と心の中で呟いた。

と同時にジン「夏美。お前は自分の車の中に戻った方が良いんじゃない  
ねえか？」

このまま此処に居るのも危険だしよ。」

其れを聞いて夏美「。。。でも。」

服部「その男の言う通りやで。夏美。此処は俺らに任せてお前は自分の車の中に戻り休みや。」

夏美「・・・平さん。」

そして、ジン、ウオッカを見て「夏美をこいつの愛車の中に連れて行ってやれ。」

ウオッカ「了解。」と続け様に「夏美さん。立ってます?」

夏美頷き「ええ。大丈夫よ。」そう言い立とうとしたその時倉庫の中に再び銃弾が鳴った。

しかし、その音は外されてその銃弾を放った広州の仲間の1人はサッカーボールで

気を失わされていた。

メイランその状況を見て「だっ・誰?! サッカーボールを蹴り飛ばしたの?!」

すると「俺だよ。」

その声の主を必死で探すメイラン「何処?! 何処に居る?!」

「此処だよ。」

そして、メイランその声の主の前に目をやり「・・・なっ！何者なの？！あんた！」

すると、コナンがキツクカ（強化）シューズの電源が入ったまま歩いて来てニヤリと笑い

「江戸川コナン！探偵さっ！」

メイラン「た・・・探偵?!」

まさか？こんな坊やにあいつはやられたの???



メンバーの1人がコナンに気を失われたメンバーの確認をし「メイラン様。どうぞやら・・・」

この少年に・・・愛憐アイリンはやられたそうです。「

と信じられなさそうな顔をして報告した。

メイラン「・・・なっ?!!」

コナン「へえ・・・あの女の人、愛憐アイリンって言うんだ。僕・・・知らなかったな

」。

雷外

・・おいおい。

新の兄さん。マジかよ？

あの・・広州の中でも凄腕のスナイパーである愛燐の奴を糸も簡単に・・・。

それに・・この女愛蘭の実の姉貴だぜ？

って・・此れは関係なかったか。と苦笑い。

ジンニヤリと笑い「・・・あのガキ。ひょっとして・・・。」

俺が前にばらしたはずの・・・

「工藤新一」じゃねえのか？

普通の小学生のガキがこんな事しねえだろう。

とコナンの事疑っていた。

と同時にコナンニヤリと笑い「どうする？メイランさん？このまま何もしないで只

ボーっとしていると、「あの人」が来るよ?」

あの人とはオウガの事。

メイラン「坊や! 大の大人をなめてはいけないわ! 奴が来る前に・

何としても片付けて・・・。」

すると、男の声で「俺が・・・どうかしたって?」

メイランその声を聞いて再び驚き「な・・・こっ! この声は・・・。」

まさか？！

もう来たの？！

と心の中で呟いていた。

第20章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場（後編）完。

第20章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場（後編）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うございます。

さて・・・次章もまだまだ当分長く？なりそうなので

このまま多分（前編と後編）に分けて書かせて頂こう

と思っております。

それでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ・・・12???

夏美「・・・いよいよか？」

雷外「んだね？俺らワカバと広州の対立。」

夏美「だけど・・・私じゃあは、車ん中戻されるんだろ

?笑」

雷外「さあ・・・どうだろう?作者の気まぐれだからね。」

コナン

・・・おいおい。笑……

「次章もどうぞよろしくお願いします!」

**第21章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（前編）（前書き）**

今章では、ワカバの首領であるオウガが登場し

ワカバと広州の戦闘を書かせて頂きました

此方も（前編）（後編）に分けて書かせて頂きます。



第21章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（前編）

メイランがその声の主を見て「お・・・お前は！！！」

すると、其処には紺のスーツ姿をした男が出てきた。

ジンニヤリと笑い「よう。やっとお出ましのような。オウガよお！」

オウガフツと笑い歩き出して「久々だな。ジン。この度は連絡感謝する。」

夏美「・・・あ、兄様。」

オウガ、傷だらけの夏美を見て「ご苦労さん。夏美。大丈夫か？」

夏美フツと笑い「・・・平気ですよ。此れ位の『傷』、どつって事も。」  
と続け様に

「私は、『自分が傷つく事』よりも、『相棒達が傷つく方が』余程・  
・『痛いんですよ。』」

とオウガに言った。

オウガ「・・・夏美。」

そして、大樹、楓・・・。

お前達の‘魂’はどうやら着々と娘に‘受け継がれているようだ。’

と呟いて前を見て「……久しぶりだな。メイラン。この度は、俺の妹分達’が

世話になったようだ。」

メイランクスと笑い「いいえ。でも、‘大して世話してないけど。’

と続け様に「でも、ワカバの首領自ら態々こちらに出向いてくれるとはね。」

‘歓迎しなきゃ’ね。お前達っ！！！！」

すると、一斉に倉庫内に居たメンバーがメイランの所にやって来た。

メイラン「やっておしまい!!」

そう言いメンバー一斉にオウガに向かって突進してきた。

夏美「兄様!!」

と続け様に「雷龍!!!!そして……。」

「ライメイ雷明居るか？」

すると、夏美の所に1人の少女がやって来て「はっ！姉上様。此処に。」

彼女の名は李リ・ライメイ雷明

雷龍の実の妹。

夏美「頼む。」

雷明「御衣に！兄上様！」

雷龍頷き雷明と共にオウガの前に出てメンバーを一斉になぎ倒した。

と同時に夏美の一斉掛け声によりワカバの待機していた他のメンバーも一斉に広州の

メンバーの連中を打倒して来た。

ジンの様子を見て「ほう。奴等中々やるじゃねえか。」

とニヤリ。

すると、予想外にも「コナンくん!」

「平次!」

服部とコナンその声を聞き「な?」

ら、蘭？！

か・・和葉？！

其処に居ないはずの・・。

‘ 2人の最愛の女<sup>ヒト</sup> ’ が居た。

夏美「・・・なつ？！」

メイランその声を聞きクスと笑い「愛蘭。彼女達も、歓迎、してあげなさい。」

愛蘭「仰せのままに。我が主。」

そう言いナイフを取り出し蘭達に迫って来た。

夏美「・・・野郎!!」

そう言い火炎風拳の技の1つである火炎風回復波を使い撃たれた所を修復し

「危ないよ!蘭さん!それに和葉さん!!」そう言い蘭達の所に走って行った。

雷外「姉御っ!!」

夏美フツと笑い「あれ使ったから、もう大丈夫!其れよりかお前さんは、皆の『サポート』」



を頼む！！！！」

雷外其れを聞いて頷きニヤリと笑い「了解！俺も・・・やられてばかりじゃ、納得出来ない

からな。」

夏美其れを聞いてニヤリと笑い返し蘭達の下に向かい「やめろっ！！愛蘭っ！！！！

この私が相手だっ！！」そう言い愛蘭の下に突進して行った。

第21章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州（前編）完。

第21章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（前編）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うございました。

さて、次章は今章の後編を書かせて頂く予定です。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ・・・13??

雷外「姉御。遂に俺らのボスもお見えになられた

よ。」

夏美タバコに火をともし「ああ。だが、兄様が

自らお出ましになるとは・・・これは予想外だったな。」

雷外「・・・俺もだよ。笑」

雷明「何は、ともあれ・・・次章もどうぞよろしく

お願い致します。「ニコと笑い」礼した。

第22章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（後編）（前書き）

1日？ぶりですか？

更新しました。今回は前章の後編で書かせて頂きました

た。と同時に次章は多分第2戦目を書かせて頂きたい

と思っています。夏美が若干？暴れています。（笑）

## 第22章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（後編）

愛蘭其れを聞いて「夏美様<sup>シャアメイ</sup>。危ないのでお下がりください。」と続け様に

「もし、貴女様の身に何か起こってしまわれたら我が主であるメイラン様に顔向け出来ませ

んから。」ニコリと微笑んで言った。

夏美その事を聞き怒りが増した「だくから！！私しゃあはもうメイランの‘妹分’じゃ

無いって言うの！！！！」と続け様に「平さん達の‘大切な女<sup>ヒト</sup>’の身に何か起こったら

私……此れから平さん達に顔向け出来ん！！！！」と続け様に「いいから！！私と

「戦いなー!!」ワカバのリーダー兼幹部として・・・此処は「やらなきゃ」私じゃあが

「収まらない」!!」

愛蘭フウとため息をつき「・・・本来ならこころ貴女様には「手荒なまね」したくはありませんが

・・・致し方ありませんな」。

そう言いナイフを取り出し夏美に突進してきた。

蘭「夏美さんっ!!」

和葉「夏美っ！！！！」

夏美、蘭達を見て微笑んで「大丈夫です。其れよりか・・此処に居ては危険です。」

早くお戻りを。」

蘭「でも。コナン君を置いて逃げる訳にも・・・。」

和葉「あたしもやで。平次置いて行けへんもん。平次のお父ちゃんに無事に大阪に連れ戻せ」

と言われているし。」

夏美「え？平蔵さんにもですか??？」

和葉頷き「せや。」と続け様に「だから・・あたしも、逃げる訳にもいかんねん。」

一応、こう見えても大阪府警刑事部長の娘やからな。」と微笑んだ。

夏美「・・蘭さん。和葉さん。」



2人とも「親が居て」

そして・・・「帰りを待っていてくれている。」

でも・・・。

私にはもう「待つてくれる親は」・・・「居ない」。

だから・・・「蹴り付けないと」いけない。

本家で待っていてくれている「妹」の為にも。

楓死に様に・・・。

「夏美、これからも有理ゆづりをずっと・・・ずっと「宜しくね」。

そう託した。

だから！私は「生き続けなきゃ！！」あの子（有理）の為に！！

そう言い戦闘態勢になり、愛蘭を向かえ撃つ為再度突進しかけた。

夏美「ハアアアアア！！！！火炎風拳！！！！火炎風爆龍拳！！！」

其れは龍の様に舞そして・爆風をもたらした。

愛蘭「・・・クッ!！」

こっ・・・此れは橘楓の・・・。

どっして?!

シャアメイ  
夏美様が?!

オウガメンバーに指示を出しながら「夏美の奴、久々に、熱くなっ

ているな。」「

と笑った。

と続け様に雷外「し・・・しかし、ボス。下手すりゃ・・・姉御暴走を引き起こすかも

しませんよ？何せ・・・相手はあの愛蘭と同時に広州のメンバーですし。」「

と若干慌てながら言った。

オウガ「・・・そうだな。」と続け様に「楓の拳法火炎風拳は、大樹の雷風拳とは違い・・・」

元々‘復讐’の拳法だったからな。楓はそう簡単に‘暴走に’飲み込まれていなかったが

夏美の場合・・・広州に‘対する復讐’もあるからな。」

その事を隣で聞いていたジンがタバコに火を灯し「どういうことだ？オウガ。」

すると、オウガ「ジン。お前・・・夏美の両親知ってるよな？」

ジン頷き「ああ。大樹と楓だろう？昔、お前ん所で会わせてくれたじゃねえか。」

と続け様に「奴等は？」

オウガ悲しそうな顔をして「・・・死んだよ。昔ワカバの任務中に・  
・広州のアジトに

行った時に・・広州の手にかかってな。」

ジン「な？奴等が・・・『死んだ』だと？！」

オウガ頷き「ああ。だから・・・夏美は『ワカバに』残った。『両  
親の使命を』

今度は「自らが果たす為」にな。」と続け様にジンを見て「だから・  
。。お前には

「言えなかったんだよ。」俺は、お前と共に「幸せな道」を選ぶ事  
を進めた。

だが・・あいつは、「父さん達が残した任務」そして・。。「宿命  
を」残して

私だけ・・「幸せには」なれないですよ。兄様。」と言ったんだ。

と続け様に「この事は、彼には言わないでください。おそらく「反  
対」すると思うんで。

いつかは分かりませんが・・・「広州の戦のすべて」が終わった後は、彼の腕の中、

に戻ろうと思います。とな。ワカバの任務の「危険性」が高いと言  
う事は昔・・・

大樹達の任務を見てあいつはあいつなりに痛感したんだろう。」と  
更に続けて

「あいつは、お前に心配をかけさせたくなかったんだろうさ。」と  
も付け加えた。

其れを聞いてジンコンクリートの床にタバコを落とし踵で消し・・・  
・ッ！あの、馬鹿が。」

ウォッカそのジンの様子を見て「・・・兄貴。」



そう呟くしかなかった。

そして・・・ワカバと広州の戦は続いて行った。

夏美の攻撃を間一髪で交わす事が出来た愛蘭はナイフで夏美に攻撃をした。

夏美避け切れずに左腕に軽く傷が付けられた。

夏美「・・・ッ！」

夏美の左腕から血が垂れる。

と同時に夏美次々と拳法の技を繰り出し愛蘭を追い詰めていく。

一方、蘭達は他に潜んでいた広州のメンバーと対立していた。

第22章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（後編）  
完。



第22章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（後編）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ・・・14???

雷外「お疲れ様です！作者さん。」

N「お疲れ様です。雷外。」

雷外「んで??ミレイの姉御いつまた再登場??」

N「・・・後もうしばらく??先の予定です。」

夏美「早めに頼むよ？作者さん？」

と続け様に「ミレイ再出番心より待ち望んでいる

んだから。」タバコ吸いながらニコリ。

N「う……がつ、頑張ります！！笑……」

夏美「皆さん。誤解させて頂かない様予め申し上げます

おきますが、この物語の主人公はあくまでミレイで

す。その辺をご理解ご了承頂きたいと思えます。」

と続け様に「其れでは、次章も宜しくどうぞ。」

第23章。ワカバ対広州第2戦。(前編)(前書き)

今章は、前章の続きみたいな物です。

ワカバ側に蘭達がついています。

尚・・・。

ワカバ対広州編は後もうしばらく？続く予定です。

今しばらくお付き合い下されば幸いです。

### 第23章。ワカバ対広州第2戦。（前編）

あれから、ワカバの助っ人のように現れた蘭達。

そして、彼女達も広州のメンバー達と対立する羽目になった。

すると、メンバーの1人が軽く舌打ちし、「女2人かよ。」と呟いた。

蘭其れを聞いて「女だからってなめると、痛い目に、あつわよ?」

和葉も「せや! あんた等の相手はあたし等がしたるさかい! ! かか  
つてきいや! ! !」

そしてメンバーも「フン! 後で後悔しても知らねえからな。」

そう言い仲間達と一斉に蘭達に襲い掛かってきた。

蘭「アアアアアアアアア！」 気合を一気に溜め込み上段蹴りを広州のメンバーに食らわす。

一方、和葉も襲い掛かったメンバーの腕をつかみ「ハッ！」と投げ飛ばす。

投げ飛ばされたメンバー「な・・・こいつ、合気道使いか??」

驚きながら体勢をすばやく立て直した。



一方、服部とコナンはその様子を見て只相変わらず驚いてばかりいて・・・。

服部小声で「なあ・・・工藤？毛利の姉ちゃん、ものすごく強くなったへんか？」

其れを聞いてコナン頷き小声で「ああ・・・俺もそう思ったよ。」

と続け様に「後・・・和葉ちゃんも・・・。」

服部「あの2人は、怒らせない方が、身のためやな。」

と続け様にコナン「あちらは、蘭達に任せて大丈夫そうだ。」

服部「せやな。俺等は・・・すでに、戦っているワカバのメンバーの皆と合流し

加勢や・・・」

コナン再びキック力増強シューズの電源を入れながら「ああ。そうだな。」

服部倉庫にあった棒を持ち「じゃ・・・そろそろ俺等も行くで？準備はええか？」

コナン頷きそして・・・雷外達の所に加勢しに行った。

一方、ジン達は只その戦いの様子を見ていた。

広州の連中もジン達の「恐ろしさ」は噂で聞いていた為下手に手出しは出来なかった。

するとウォツカ「・・・兄貴。俺達此れからどうしやす?」

ジン再びタバコに火を灯しニヤリと笑い「まあ・・・慌てるなよ。しばらく様子見だ。」

もし、ワカバの連中がやばそうになったら・・・俺達も「加勢」だ。」

ウォツカ「了解！」

一方夏美は、愛蘭と未だに対立していた。

愛蘭「夏美様。シャアメイ戦いの最中で申し訳ありませんが・・・一つお伺いしても

宜しいですか？」

夏美「何だい？」

愛蘭「何故・・・貴女様が、嘗て橘大樹と楓の伝承した『拳法を』  
使えるのですか？」

夏美フツと笑いタバコに火を灯し「愛蘭。私しゃあの『苗字』忘れたのかい？」

愛蘭其れを聞いて思い出した。

「橘……。まさか？」

夏美タバコ吸いながら再度フツと笑い「ああ。そうさ。私しゃあの『苗字』は橘。

橘大樹と楓の娘。であり、有理の姉さ。」

と続け様に「私しゃあはね、『両親の使命』そして、『無念』を晴らす為に両親の『拳法』

を伝承しワカバの団員になったのさ!!」と続け様に「さて……  
「おしゃべり」も

此処までだ「蹴りをつけようじゃ」ないの!愛蘭。そして……。あ  
いつ(ミレイ)の

実の兄の「仇討」もかねてな……。」

其れを聞いて愛蘭只黙っていた。

そして……。

夏美<sup>シャアメイ</sup>様が、あの橘大樹と楓の娘……。

言われて見れば雰囲気似ているわね。

と心の中で呟きそしてフツと笑い、「その為に、貴女様は、ワカバの一員になられたのです」

ね。「と言い再びナイフを構え「貴女様の、お気持ち、が済むまで・私で良ければ」

何時までも、お相手致しますよ。」と言った。

其れを聞いて夏美携帯灰皿にタバコを揉み消してしまい再び戦闘態勢に入った。

第23章。ワカバ対広州第2戦（前編）完。

第23章。ワカバ対広州第2戦。（前編）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて次章は今章の後編について書く予定でいます。

次章もお付き合い下されば幸いです。

尚、私事で恐縮ですが、マミ様初めまして。

この度は応援メッセージ有難うございました。

とても励みになりました。

返信させて頂こうと思ったのですが・

上手く行かなかった為此方でお返しする事を

どうぞお許してください。

今後とも出来る限り時間がありましたら早めに

更新するように勤めます。



(今月いっぱい、そして、来月の中旬辺りまでは  
多分時間が取れるので更新出来ると思いますが、  
作者は大学で今年4年の為卒研等もありますので  
来月下旬辺りからは多分、更新率が低くなる恐れも  
ございます。その辺はご理解ご了承を頂きたいと  
思います。)

オマケ・・・18??

(数が分からなくなってきた笑……)

コナン「なあ・・・服部。」

服部「何や？工藤？」

コナン「・・・頼むからよ。ミレイ達以外でむやみに

俺の事「工藤」って呼ばねえでくれるか？」

服部苦笑いして「すまん！つい癖で・・・。」

コナン「ハァ」とため息をつき「頼むからいい加減

慣れてくれよ。」

服部「・・・善処するわ。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しゅう！」

**第24章。ワカバ対広州第2戦（後編）（前書き）**

お久しぶりです。

今章は、前章の続きです。

## 第24章。ワカバ対広州第2戦（後編）

あれから、着々と広州のメンバーをなぎ倒して行くワカバ勢。

その勢いも止まらなかった。

しかし・・・。

夏美はと言うと、愛蘭と戦っている最中に1人の男の「妨害」にあ  
う。

379

ドカツ！！

夏美壁に勢い良く壁にぶつかった。

雷龍その様子を見て「姉者!!!!!!」

夏美顔を若干しかめてそして笑い「だっ・大丈夫だっ!!!只、壁にぶつかっただけだ。」

雷龍「し・しかし。」

とかなり心配そうな顔をして夏美を見る。

夏美「大丈夫だ!」と続け様に「お前は、お前の妹とそして・・ワカバの相棒達と共に

‘己の今与えられた任務’を果たせっ!!!」

雷龍その事を聞き「・・・御衣に。姉者。」

そう言い自分の持ち場に再び着いた。

愛蘭若干不服そうに「ちょっと・・・邪魔しないでくれない？」  
龍湾ロンワン

彼の名は玲龍湾レイ・ロンワン。

愛憐と愛蘭の実の弟。

龍湾「申し訳ないです。愛蘭姉さん。しかし・・・。個人的には

合点が行かない部分、

もありまして。」と続け様に「何故？メイラン様を、裏切った奴の相手愛蘭姉さんが

しなくてはならんです？？」と更に続けて、「ワカバなんかに身を投じている

‘この女に’？」と不服そうな顔をして夏美を見て言った。

夏美その事を聞いて若干心が痛んだ。

何故？

私を裏切ったのは・・・メイランの方、

私じゃない!!

だけど・・・。

だけど・・・。

こんなに・・・。

いや・・・。

若干、心が痛むのは、



何故?????

すると、左肩に痛みが走った。

夏美「・・・ツ!!」

右手で左肩を抑える。

すると、ウォツカが来て「な・夏美さん?!だ、大丈夫ですかい?!」

夏美微笑んで「ああ。大丈夫。」

過去に・・・。

メイランに捨てられる時に付けられたあの銃口の傷が未だに、痛む  
、なんて・・・。

そんなの言えないわ。

すると、ジンも夏美の側に寄って来て、タバコをコンクリートの床  
に落とし踵で消し

龍湾を見て「・・・てめえ。余程、ばらされたい、らしいな。」

とブレッタを突き付けそして睨みながら言った。

その様子を見た夏美「駄目よっ！！ジンっ！！」

ジン、夏美を見て「こいつに、情けかけるつもりか、？」

夏美「いいえっ！！別に、広州の連中に情けかけるつもりなんか  
いわっ！！」

ジン再びタバコを取り出し火を灯しながら「だったら・・・何故だ？」

夏美「これは・・・私の！いえ！ワカバの戦い！！手出しは無用よ！と続け様に

「別に、貴方の‘手を煩わせる’までも無いわ。」と微笑みながら言った。

ジンフツと笑いベレッタを懐にしまい「・・・分かった。だが、無理は禁物だぜ」？

お前の死んだ両親も多分そんな事望んじやいねえよ。」

夏美フツと笑い返し「ええ。善処させてもらうわ。」と続け様に「ジン。」

ジン「何だ？」

夏美「出来れば……。この戦いが終わるまで此処に居て欲しいんだけど……」

「駄目かしら？」

ジン其れを聞いて再びフツと笑い「別に構わなねえぜ？」と続け様にウオツカを見て

「この後仕事ねえんだし。平気だろ？」

ウォツカ「へい。兄貴。」

と頷いた。

夏美「有難う。」

と続け様に龍湾を見て「私が・メイランを裏切った？馬鹿言うんじゃないよ!!」

龍湾「何？」

夏美更に続けて「その逆さ。私がメイランに裏切られたんだよ、！広州設立する」

時に私の「左肩に銃弾を浴びせてな、！！」

龍湾其れを聞いて「う・・嘘だっ！！あのメイラン様がそんな事するわけないっ！！」

夏美首を横に振り「本当さ。なら、「証拠」見せてやるよ！」

そう言い羽織っていた黒の上着を脱いだ。夏美の戦闘服（チャイナ（ノースリ））

状態になった。

龍湾、夏美の左肩を見て「んな？！」と驚いた。

其処には銃弾の傷がしっかりと残っていた。

ジンもウォッカも其れを見て驚いた。

夏美「・・・私は、この銃弾の傷と共に、今日、こんにちまで生きて来たんだ。」

龍湾「・・・そんな！俺達に、優しいメイラン様、がそんな事する訳が無いっ！！」

夏美其れを聞いて「其れは、あんた等に、限って、だよ。」と続け様に「無能」

だと思った時点で、今のメイラン、は、仲間を捨てる。そう言う女なのさ。」



龍湾「嘘だ！！嘘だっ！！メイラン様を、侮辱するな！！！」

夏美「私は、事実を、言っただけだ。」

龍湾「黙れっ！！」「平和ボケの、そして、正義ずらしたワカバの団員に成り下がった・・・。」

貴様に何がメイラン様の何が分かる？！」と続け様に「お前の両親がそのワカバの下らない

「正義」なんかの為に我ら広州に刃向かい！そして・・・死んで行っただんだ！」

とも付け加えた。

夏美その龍湾のその言葉を聞き「・・・ワカバの、下らない正義、だと？！」

と続け様に「お前にその言葉に似たような言葉を返させてもらうよ！お前等・・広州は「汚い

連中」だ。己の私利欲の為に・・仲間を捨て・・そして、邪魔者は排除。

私達「橘家の本家」の人間は元々「ワカバに使えるのが使命」！私は・・・父さん達の

「意思を」継ぎ！そして・・己の道として定めた！！なのに・・貴様は父さん達を「侮辱」

し、ワカバを・・。「そう言い再び戦闘態勢に入り「私達、ワカバの人間は」一人一人

「己の使命」に誇りを持っている！その「誇りを汚す者」は私が許さん！！」

そして「ワカバの文句は！！私に言えっ！！」と更に続けて「他の

広州の連中も許せんが・・

玲龍湾！！貴様だけは、断じて許さん！！この借りは倍にして返してやるよ！！」

そう言い龍湾に突進して行った。

龍湾「後悔させてやるよ！！橘夏美！！」

そう言い夏美に突進して行った。

愛蘭はその様子を只頭を抱えて呆れていた。

第24章。ワカバ対広州第2戦（後編）完。



## 第24章。ワカバ対広州第2戦（後編）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章ですが、ワカバ対広州ではなく、

龍湾と夏美の対立となります。

前にも述べさせてもらいましたが、ここしばらく？

ですがワカバと広州の戦い編が続く予定です。

ので、その辺はご了承頂きたいです。

それでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ・・・19？

雷外「・・・チィ！あの龍湾って男、余計な事、

してくれるぜー！」

雷龍「……雷外。姉者。大丈夫だろうか？」

雷外「……多分。大丈夫だろう。雷龍。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく。」

**第25章。 玲龍湾対夏美。 (前編) (前書き)**

おはようございます。

今章では龍湾と夏美の対戦となります。

と同時に夏美の実の妹が出てきます。

第25章。玲龍湾对夏美。（前編）

すると、1人の少女が倉庫内に入ってきた。

長髪の黒髪そして・・オレンジ色のチャイナ服、青のデニムに青の  
カンフー靴を履いていた

少女である。その少女は、夏美の姿を発見しそして心配そうに・・。

「・・・姉さん。」と呟いた。

そうこの少女の名は橘有理夏美たちばなゆづりの実の妹である。

彼女自身もワカバに属していた。

性格は常に姉思いで仲間思いで心優しい性格。そう、その性格は「  
き母楓の性格にも



‘似ていた’。

ジン、有理に気づき「・・・楓?」と呟いた。

そう有理の姿はまるで楓とほぼそっくりになっていた。

そして、広州の連中を大体片付け終わったワカバのメンバーそして  
オウガがジンの側に来て

オウガ「ジン。ありや・・・楓じゃない。夏美の妹の有理だ。」

ジン其れを聞いてタバコを吸いながら「ああ……。昔、夏美に良く甘えていたあの小さな

嬢ちゃんか。」

オウガ頷き「そうだ。」

ジンフツと笑い「それにしても……。楓に似てきた。一瞬あいつかと思っただぜ。」

オウガも其れを聞いて苦笑いし「ああ。俺も……。久しぶりに会ったらそう思ってビックリ

したぜ。」

続け様に有理の姿を見て「・・・有理。」

オウガの目に映ったのは必死で姉が無事に戻る事を祈っている有理の姿だった。

一方夏美は、龍湾と対立し続けていた。

夏美「ハアアアアアアアアアア！！火炎風拳火炎風爆龍気孔弾！！」

気を丹田に集中させて一気に技を放つ。

龍湾「甘いわっ！！」

水を出した。

夏美軽く舌打し「こいつ・・・水使い」か。」

龍湾フツと笑い「そうさ！俺は、水使い、！と言っよりも俺達玲家は代々水使い！」

先祖代々からこの「能力」を受け継いだのさ。」

と同時に「炎使いの拳法であるお前には、俺に勝てないよ。」。

一方、その様子を見ていたワカバのメンバーの1人

「おいおい！あ・・・あれじゃ・・・なっさん。不利じゃねえか??」

其れを聞いたもう1人のメンバー「大丈夫だっ！チェンワン。だ  
って・・・」

あの龍湾ねえって奴、夏姉ねえがもう1つの拳法受け継いでいる事を知らな  
いんだ。」

チェンワンと呼ばれた男思い出して「ああ・・・そうか!!」あれか  
!!」シュウワイ兄(に

い)!」

この男達はリヤン・シュウワイとリヤン・チェンワン。

この2人もワカバの団員である。

龍湾「我が水よ……。大波になり橘夏美を飲み込みそして壁にぶつける！！」

そう言い放ち己の手から放たれた水が大波になりそして夏美に向かって行った。

龍湾笑いながら「メイラン様を馬鹿にした罪その波で思い知るがいー！！」

雷外其れを見て「危ないっ！！姉御っ！！」

すると、夏美左腕を叩き「拳法変換術！！！！」

そして、炎の紋章から雷の紋章へと変化して行き「雷風拳！！雷風  
防御波！！」

龍湾「な・・・何っ？！ばっ・・・馬鹿な！！」

夏美の体は雷風の防御でその場をしのいだ。

だが、夏美はあまりにもその大波の威力がすごかった為持ちこたえられずに壁に激突

してしまう。

雷外「姉御っ！」

雷龍「姉者っ！！！」

有理その様子を見てすばやく夏美の所に駆け込んで「姉さんっ！！！」

そのぶつかった壁から夏美が出てきて「・・・だっ、大丈夫だ。有理。

」



と心配そうな顔をして自分を見ていた妹の頭を撫でた。

有理その様子を見て一先ず安心する。

そして、夏美「有理。まだ、終わっちゃ居ない、此処は危険だ。さ  
っきの場所に戻ってる。」

有理「・・・でも。」

夏美フツと笑い「大丈夫だ。有理。姉さんを信じる。必ず、戻  
るからさ。」

そして、服部、コナンも夏美の側に行き「夏美っ!!」

夏美「平さんにコナン。」

服部「自分大丈夫か？」

夏美頷き「ええ。大丈夫ですよ。平さん。ご心配なく」と微笑んだ。

コナン「本当か？夏美。」

夏美「・・・ああ。」と続け様に「コナン。頼みがある。」

此処にはジンとウォッカも居る為あえて夏美はコナンの正体を新  
だっ  
って知りつつも

あえてコナンと呼んでいる。

コナン「・・・ん?」

夏美有理を見て「平さんと共に悪いが・・・私とこいつの戦いが終わ  
るまで妹を頼む。」

「コナンニヤリと笑い」「おう。任せておけ！」

そしてコナン服部を見て「そういう事だ。服部。」

服部頷き「おう！任しておきや！」と続け様に「けど・・・無茶はあかんで??？」

夏美再度フツと笑い「善処しますよ。」

そう言い有理の頭を軽くポンと叩きその場を後に再び龍湾の所に行きニヤリと笑いながら

タバコに火を灯し「残念だったね。私しゃあの拳法は、炎だけでは無かったんだな。」

と続け様に「雷」の拳法使いでもあるんだよ。」

龍湾其れを聞いて軽く舌打をした。

第25章。玲龍湾対夏美。（前編）完。

第25章。玲龍湾対夏美。（前編）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の（後編）となります。

次章もどうぞよろしくお願い致します。

オマケ。

有理「・・・姉さん。本当に大丈夫かな？」

服部「大丈夫やって！！姉ちゃんを信じな。」

と微笑む。

有理「そうですね。平次兄さん。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願いします。」

第26章。玲龍湾対夏美。(後編)(前書き)

今章は前章の後編です。



第26章。玲龍湾对夏美。（後編。）

あれから、龍湾は夏美とぶつかり合っていた。

龍湾「我が水よ！！私の命に従い水の槍とかし、夏美を突き刺せ！！」

そう言い水は槍化とし夏美に襲い掛かる。

夏美交わし「雷風拳！！雷風連弾拳！！！！」

夏美から放った拳は雷を纏い龍湾を迎え撃つ。

その様子を見たオウガ「・・・まるで、大樹に、そっくり、だな。」

と呟いた。

すると服部「なあ・・・オウガハン。」

オウガ「ん？」

服部「何で・・・。夏美はご両親の拳法両方受け継いたんや？」

オウガ「ああ。あれはね・・・平次君。あいつの、あいつ自身の意思  
'でもあるんだ。

本来なら・・・妹にもって言う考えもあつたんだろうが・・・。その時  
は夏美しか

大樹達の側には居なかったし、夏美自身も・・・有理には受け継がせたくない

思っただろう。あまりにも、危険、と感じたからな。」

服部其れを聞いて黙り込んで夏美へと目をやった。

メイランも愛蘭と共に只見ていた。

と同時に愛蘭「このままだと・・・弟には悪いけど・・・夏美様には

シャアアメイ

勝てないわ。」と呟いた。

すると、今度は龍灣水を鎖に変化させ夏美に放った。

夏美其れも交わすがあえなく捕まりそのまま床に叩き落されてしま  
う。

夏美「キヤアア!!」

と同時に床にもろに討たれたのか背中に痛みが走る。

オウガその様子を見て「もう良いッ!!止めるッ!!夏美ッ!!」

夏美痛みをこらえて立ち上がり首を横に振り「兄様<sup>あに</sup>。此処で・・・。  
止めたら

私・・・父と母に顔向け出来ません。」と続け様に微笑んで「大丈夫です。そろそろ蹴りつけ

ますから。申し訳ありませんが其処今しばらく待っていてください。」

其れを聞いてオウガ「・・・だが。」

ジン、オウガの右肩をポンと軽く叩き「あいつの好きにさせてやれ。オウガ。」

オウガ「・・・ジン。」

そして、ジン夏美を見て、「くたばっちまったら、許さねえぜ?」

とニヤリ。

夏美フツと笑い「そう簡単に、くたばらないわ。安心してよ。」

と言い再び龍湾の所に向かい直り「先ほどは、よくもやってくれたわね。」

と続け様に「この借りは、倍にして返してあげるよ。」。

龍湾フンと笑い「もう一度、同じ目、に合わせてやるよ。」

そう言い再び水の鎖を放った。

夏美「雷風拳！雷風分身術！！」

すると、夏見の分身が現れた。

龍湾「な・・・何?!」

と同時に軽く舌打し、橘夏美の分身術はちよいと厄介だからな。さて・・・どうするか？

と心の中で呟いた。

と同時に心に「迷い」が現れたのか考え込み始めた。

そして、夏美、龍湾の隙を見つけて龍湾の上に飛んで「隙ありっ！  
！雷風拳！雷風空中

脚！」と空中で蹴りを放った其れが見事龍湾に届いた。

そして、龍湾気を失った。

そして、夏美床にストつと降り立った。

ワカバのメンバー其れを見て一斉に「ヤリィ〜！！」と喜んだ。



夏美フツと笑い「・・・ど、どうやら、蹴り付いた様、だ・・・。」

そう言い気を失った。

有理「ね、姉さんツッ!」

慌てて夏美に駆け寄る。

雷龍も側により「ご心配なく。姉者は、気を失われている、だけで  
す。おそろく、

広州のメンバーの他メンバーとも前に戦ったのでそれのお疲れが、  
気に出たと思われます。」

有理其れを聞いて「本当？雷龍？」

雷龍頷いた。

と同時にオウガ辺りを見渡し「おや・・いつの間にか。奴等も引き上げたみたいだな。」

と続け様に「よし！！夏美の戦いも終わった事だし！撤退だっ！！！」

と続け様に「雷龍。」

雷龍「ハッ！オウガ様！」

オウガ「夏美をこいつの愛車中に連れて行ってやれ。」

雷龍「畏まりました。オウガ様。」

そう言い夏美を連れて行こうとしたその時「オウガ。」

オウガ、ジンを見て「どうした？ジン。」

ジン「こいつには悪いが・・・そいつ俺に運ばせてもらえねえか？」

雷龍オウガを見て、オウガ「お前の好きにすれば良い。」

雷龍、ジンの所に来て「姉者をよろしくお願いいたします。」

と夏美をジンに引渡しそして・・・ジンはウォッカと共に夏美の愛車である青のベンツに

連れて行った。

とその後ワカバのメンバーはアジトへ。

平次とコナン達は阿笠博士の家に戻って行った。

此れで・・・先ず広州との戦は終わった。

に見えたが、此れから起こる事を彼女達は知らない。

第26章。玲龍湾対夏美。（後編。）完。

第26章。玲龍湾对夏美。（後編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は、夏美達が阿笠家に戻った所を

書く予定です。

次章もお付き合い下されば幸いです。

オマケ。

コナンフウとため息を付き「慌しかったな。」

服部「まあ・・・ええやんけ！とりあえず無事やった

んやから。」

コナン「まあ・・・そうだけども。」

と続け様に「次章もどうぞよろしくお願いします！」

**第27章。夏美、阿笠家で目覚める。(前書き)**

おはようございます。

今章では夏美達が阿笠家に戻って来ます。



第27章。夏美、阿笠家で目覚める。

あれから、龍湾との戦いを終えた後夏美は倉庫の中で気を失って阿笠家のソファアールに

寝そべっていた。

そして・・・。

夏美「・・・うん。」

夏美目が覚める。

すると、ライカ夏美の所に駆け寄り「気が付いたか？相棒。」

夏美、ライカを見て「・・・ラ、ライカ？」

ライカ頷き「ああ。私だよ。」

夏美、辺りを見渡し「此処は・・。」

コナン「博士ん家だ。」

夏美コナンから其れを聞いてソファーから起き上がり「そっ、か。  
あれから龍湾との

戦いの後私しゃあ気失っていたんだな。」

すると、哀麦茶を台所から持ってきて、「はい。夏美さん。」

夏美「ああ。悪いね。哀ちゃん。」と哀から麦茶を受け取りライカ達を見て

「あれ？皆は良いのかい？」

「コナン頷き」「俺達はさっき夏美と同じように麦茶をもらったからよ。」

夏美「そっか。」と言い麦茶を飲みながらタバコに火を灯し「んで誰が……………」

私をあれから此処に??？」

其れを聞いて服部「橘の姉ちゃんを愛車まで連れて行ったのは・・・  
お前の彼氏であるジンヤ。

んでもって・・・此処まで姉ちゃんを愛車を運転してきたのはあの雷  
龍って奴やな。」

夏美「・・・そう。」

と続け様に心の中で。

じゃ・・・今度再び再会した時にでも今回の事お礼言わなきゃいけないわね。

ジン。

と呟き更に続けて「それはそうと、平さん。あれからうちの連中どうしました？」

服部「あれから・・・ワカバの連中はアジトへ戻ったで？もちろん。オウガハンもな。」

後・・・お前の妹の有理もそして・・・雷龍と雷明って奴も戻ったで。」

コナン「んで。戻る前に雷龍が「目が覚めたら姉者によろしくと共にあまりご無理なさらぬ」

ようお伝えください。」と言っていたぜ。」

夏美「ハハハハッ。」と苦笑いし「あいつ何処まで、硬まじめ、なんだ。」

其れを聞いてライカタバコに火を灯し「それだけ・・・お前さんが、大切に、で

「心配、なんだろ。」

其れを聞いて夏美は只フツと笑った。

そして、ミレイ「んじゃ！夏さんも目覚めた事だし。ちょっと気晴らしに散歩行って

くるわ。」と言ひ玄関に向かった。

その時、哀「ミレイさん。くれぐれも、気をつけてね。多分、彼等まだ……」

下手すればこの町に、潜んでいる、みたいだから。」

ミレイ頷き「有難う。哀。」

と同時にコナン「何かあったら……すぐ連絡しろよ?」

ミレイ再び頷き「じゃね。」

そう言い阿笠家を出た。

すると、いつの間にか雪が降っていた。

ミレイ「・・・雪か。こうなるんだったら、傘持ってくれればよかったわね。」

そう言い歩き始めた。

そして、電柱の後ろから女の影が見えた。

「クス。‘赤龍’。見つけ。」

と続け様に「今度こそ・・・メイラン様の元に。」

とミレイの姿を見て言った。



一方、此処は再び阿笠家。

急に夏美、何かを感じ取ったのか、窓を見始めた。

第27章。夏美、阿笠家で目覚める。完。

**第27章。夏美、阿笠家で目覚める。（後書き）**

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は・・・ミレイを中心として書かせて頂きたいと思います。

次章も今章と同様にお付き合い下されば幸いです。

オマケ。

ライカ「んまあ・・・あれだ。相棒が無事で

何よりだよ。」

夏美「一瞬どうなるかと思ったけどな。」

雷外「でも、夏美の姉御無茶しすぎだよ。」

夏美笑いながら「そうか？」

雷外頭抱えて「そっだよ。」と苦笑い。

コナン横目で「ハハハッ。」

と続け様に「次章もどうぞよろしくお願いします!」

**第28章。ミレイに迫る広州のメンバー。(前書き)**

今章では、ミレイが中心となります。

## 第28章。ミレイに迫る広州のメンバー。

あれから、ミレイは夏美が目覚めて安堵したのか散歩をしに阿笠家を出た。

外は雪が降っていた。

ミレイ「・・・雪か。」と呟きそして・・・以前見た「夢を」思い出した。

ジン。

「平和ボケも終りだ。」もうじき「夢の偽りの世界が終わり、お前自身が再び

お前の本当の世界に戻る時が来た」。

さあ・・・「迎えに来たぜ？」ミレイ。

ミレイその事思い出したら固まった。

そして・・・。

心の中で、私は、「どちら側の人間、なんだろうね？

雪音姉さん。

そして、ミレイの頭の中で木霊する「闇の声」。

オマエハ「ヤミ」

オマエハ、シヨセンオモテデイキルコトハデキナイ。  
,

ヤミノシマツニン、セキロン。

ヤミノナカデイキ、ヤミトトモニアユム。

ソレガ、オマエノサダメ。

ソレガ、オマエノウンメイ。

ソレハ、カワラナイ。

コンゴトモソウ。

オモテデイキルヨリ。ヤミデイキタハウガオマエノタメ。

ドウセオマエハ、イズレカナラズジンノテニヨリヤミニツレモド  
サレル。

ミレイタバコに火を灯し「……闇の人間か。」とも呟いた。

ねえ……。



姉さん、私……。

これからどうしたら良いの???

教えてよ？

ねえ……。

お願いだから……。

答えが自分の中で、見つからないの'。

すると、1人の女が「貴女は所詮、闇の人間、表では、生きられな  
いわ。」

と笑いながら言った。

ミレイ「誰っ?!」

すると、電柱の所から1人の女が出て来て「久しぶりね。とも言っ  
べきかしら?」

赤龍事、龍崎ミレイ。「とクスリ。

ミレイその女を見て「あなたは、確か広州の幹部の1人。  
王明杏」オウ・メイアン

明杏「ご名答。」

ミレイタバコを吸いながら「何故・・・あなたが此処に？まさか？」

明杏再びクスと笑い「・・・そう。そのまさかよ。メイラン様のご命により貴女を

捕まえに来たの。」

其れを聞いてミレイ頭をかきながら呆れて「相変わらず、しつこい女ね。あんたん所の

ボスは。」

明杏「そう？でもね。貴女は我々広州にとって、必要な人材、ジンから逃れた今

横取りする絶好の機会だと思ってね。」

ミレイタバコの煙を出しながら「んで？もし・・・断ればどうするっ」とニヤリ。

明杏フウとため息を付き「手荒なまねは出来るだけ避けたいのよ。無謀な『戦いも』

好きじゃないしね。」

ミレイタバコを加え直してフツと笑い「そうかい？あんだ等広州は  
「暴れ好き」

と聞いていたがね。」

其れを聞いて明杏再びクスと笑い「それは、一部の連中、」  
「私」は基本的に、  
「ただ、」

「暴れ好きでは、」ないわ。」と続け様に「さあ・・・返事を聞かせて  
もらおうかしら??？」

ミレイ再びフツと笑い「断る、！もし、あんだ等の所に行くんだ  
ったら、もつしばらく

この表の世界で暮らすわ!」と更に続けて「もしかしたら気が変わ  
り・・・兄さん」の所

に「戻るかも」しれないからね。「そう言い」じゃね。私はさ、基  
本的にプライベートは

「邪魔されたくないのね。」

そう言い明杏から離れた。

すると、明杏「ミレイッ!! 貴女はきっと、我々に付かなかった事  
後悔すると思っわ!」

そうミレイに向かって叫びその場を後にした。

ミレイその事を聞き「……後悔か。むしろ、あんた等に付いたら私はもっと

後悔した'だろうさ。'そう眩き再び外を散歩していた。

そして、路地裏入ったその時

ミレイ何かを発見したのか「!!!」と驚いた。

第28章。ミレイに迫る広州のメンバー。完。





**第28章。ミレイに迫る広州のメンバー。（後書き）**

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章もミレイが中心となる予定です。

それでは、次章も今章と同様にお付き合い下されば

幸いです。

**第29章。ミレイと黒のポルシエ。(前書き)**

おはようございます。

今章も主にミレイ中心となります。

## 第29章。ミレイと黒のポルシェ。

あれから、広州の女幹部である王明杏と遭遇し何とか切り抜けたミレイ。

そして、その後とある路地裏に入った。

その時ミレイが驚き彼女が目にしたのが何と、黒のポルシェだった。

ミレイ「・・・く、黒のポルシェ。」

そう言い黒のポルシェの所に少しずつ歩いて行き車体番号を見た。

ミレイ其れを見て驚いた。

何と・・・案の定ミレイにとっては悪い事だった。

356A。

ジンの愛車だった。

ミレイ

まさか?!

ジ、ジン兄さんが「この近く」居るの?!

そして車内の中を覗いた。

ミレイヘアとため息付き「・・・良かった。誰も居ないわね。」

と呟きその場を素早く後にした。

そして、ジン、ウォッカと共に黒のポルシェに戻って来た。

ジンタバコを吸いながら「ん？」

と続け様に「車の周り雪がやけに荒れてるな。」

ウオツカ「きつと、物好きな奴が来て見てたんじゃないですかい？

兄貴の車珍しいから・・・。」

ジンニヤリと笑い「フン。ドイツのアマガエルも偉くなったもんだ。

「

そして、黒のポルシェにウオツカ共ども乗り込もうとしたその時

「ん？」

黒のポルシェの所に小さな赤い龍のイヤリングが落ちていて其れを  
ジン見つけて拾い

ジン

小さい赤い龍のイヤリング・・・？

ウォツカ「兄貴？どうしたんです？」

ジンそのイヤリングをコートの右ポケットにしまいニヤリと笑い「  
「落とし物さ」。」

そう言い黒のポルシェに今度こそ乗り込みその場を後にした。

ジン再びニヤリと笑い・・・。

まさかな。お前自ら態々、出向いてくれるとはな……。。

‘大歓迎するぜ’？

ミレイ。

一方、ミレイはあれから阿笠家に戻りお手洗いに行き洗面所で手を洗っていて

鏡を見た所「あら？」



左耳についていたイヤリングがない事に気づく。

「・・・どうしたんだろう。」

と続け様に「まさか?!あの時に?!」

ど・・・どっつしゅっつ?!

も・・・もし、あれがジン兄さんに拾われたら・・・。

完全に、自分の場所、教えているようなものじゃない!!!

と焦った。

一方、リビングでは、コナン達が屯って居てそして蘭と和葉も来ていた。

すると、哀「そう言えば・・・ミレイさん。出るのが遅いわね。」

コナン頷き「ああ。あれから結構時間たってるぜ??」

夏美「・・・ミレイ。」

まさか？！

もう、彼に???

すると、コナン話題を変えて蘭達に「所で、蘭姉ちゃん達はどうしたの？」

蘭「あ、実はね・・・コナン君。」

何かの話をし始める。

そしてコナン「え?!ワ・・・ワカバに入った?!」

蘭頷き「うん。」

和葉「せや。けど・・・高校生という事で準メンバーって形やけどな。」

コナン夏美の所に行き小声で「おい。どうなってるんだよ?何で蘭達が??」

夏美小声換えして「んな事言われても・・・私じゃあだって、相棒から聞いて分かったんだ

からな。」と苦笑い。

と続け様に「蘭さんの空手と和葉さんの合気道が兄様の目に留まっ  
たらしい……。」

コナン頭抱えてハアとため息付いた。

すると、和葉「コナン君？どないかしたんか？」

コナン苦笑いをしながら首を横に振り「ううん。何でもないよ。和  
葉姉ちゃん。」

只・・・考え事していただけ。」

和葉「ふ〜ん。」と続け様に夏美とライカを見て「ちゅう訳や。此  
れからよろしく頼むで？」

夏美ちゃんにライカちゃん。」

夏美「・・・了解致しました。和葉さん。」

ライカ「ええ。」とニコリ。

すると、夏美

けど・・・。

蘭さんとはかく、もし・・・和葉さんに何かあったら・・・

刑事部長に……。

と内心焦っていた。

と続け様に服部「ああ……。もう一つ言い忘れていたわ。俺もワカバの準メンバーに

なったから。夏美よろしゅうな。」と笑いながら言った。

夏美「へ?!平さんもですか?!」

服部「おう。」と続け様に「大丈夫!親父にも和葉のおっちゃんにも毛利のおっちゃんにも

話していたさかい。3人とも容認してくれたで。」

夏美「そ・・そうですか。」

と苦笑いした。

そして、ミレイお手洗いから浮かない顔をして出て来た。

第29章。ミレイと黒のポルシェ。完。





第29章。ミレイと黒のポルシェ。(後書き)

今章もお付き合ひ下さり有難うございました。

さて、次章はコナン達とミレイのやり取りが主になると思います。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ・・・。

哀「あれから・・・ミレイさん。様子おかしいわね。」

コナン「ああ。」

と同時にあいつ何かあったのか？

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願いします！」

第30章。ミレイと雷音。(前書き)

今章も主にミレイが中心となります。

### 第30章。ミレイと雷音。

あれから、ミレイはお手洗いから出て来た。

コナンミレイを見て「大丈夫か？」

ミレイ「ん？ああ。平気さ。」

と続け様に服部「なあ……。龍崎の姉ちゃん。」

ミレイ「何？」

服部「何で、ジンちゆう男から逃げ出したん？」

コナン其れを聞いて「お・・おい。服部。」と小声でなだめた。

ミレイフツと笑いコナンに向けてOK気にしないでと口パクをする。

そして、ミレイ「いいよ。服部君話すよ。実はね、私がまだ、闇から抜けていない」頃

とある日に出かけていたんだ。その時にとある倉庫に居てねその時にジン兄さん達の

取引を目撃してしまったんだ。」

服部「んで？その時の取引内容と相手は？？」

ミレイ「取引内容は残念ながら覚えていないんだけど・・・相手なら覚えてた。」

服部「さよか。で？その相手は??」

ミレイタバコ再び火を灯し「私の、姉貴分だった、宇津川雪音<sup>つぎかわゆきね</sup>。」

夏美「な・・・宇津川雪音だと?!」

ミレイ頷き「夏さん。知ってるの?」

夏美「しっ、知っているの何も・・・あの女は広州の末端だった女だよ。」

ミレイ其れを聞いて驚き「嘘ッ!!!!!!雪音姉さんが?!何で?!」

其れを聞いてライカ「あれ?ミレイお前さん知らないのか?」

ミレイ頷いた。

と続け様に「だって・・・雪音姉さん。そんな事一言も言っていない  
かったんだもの。」

夏美「いや・・・言いたくても、あいつの場合、言えなかったのさ  
」。



ミレイ「どうして？夏さん？」

夏美も再びタバコに火を灯し「あいつのこつた。心配掛けさせたくないと思ひ。

‘言えなかつたんだろう’。あいつ自身だつて好きで広州の末端になつたわけじゃないから

ね。」と続け様にミレイの所に行き小さな小包を出した。

ミレイ「此れは？」

夏美「お前さんの姉貴分からのプレゼントだ。お前さんが、成人した時に、渡すつもり

だつたんだろう。」そう言いミレイに小さな小包を渡した。

ミレイ夏美から小さい小包を受け取り中を見た。

ミレイ「こっ、これは・・・」

小さな青のダイヤモンドのネックレスが入っていた。

夏美タバコ吸いながら「雪音の奴から聞いたよ。それ・・・お前さんがまだ中学生の頃か？」

雪音と一緒に宝石店を見に行っていた時にお前さんが其れを食い入る様に見ていたってな。

その時に、約束したんだろ？お前さんが成人になった時にプレゼントするよ。

まあ、あいつ自身から手渡すと言う願いは叶わなかったけどね。」

ミレイ黙って夏美の話しを聞いていた。そして、手紙が入っている事に気づき

ミレイその手紙を開けた。

そして・・・その内容にミレイ思わず驚き「そ・・・そんな。」

手紙の内容。

親愛なる私の可愛い妹ミレイ。

大変に遅くなってごめんね。これは成人祝いのプレゼントです。

今は、広州の監視下にありながらこの手紙を書いています。

実はね、私は貴女には言えなかった事があったの。

これは、多分いずれ分かると思うけど・・・

私は、広州の末端です。

貴女に言えなかった訳それは・・・昔広州の依頼をされ尚且つ今でも  
広州に追われている

貴女に「嫌われなくなかった」事とそして、貴女と今後とも「姉妹  
分」であり続けて

居たかったって事。それだけだったの。

本当は、広州を抜け出したかった。だけど、私の恋人である日向真樹

と実の姉である宇津川真紀を人質に取られてしまっていた為に

広州に留まる事しか出来なかったの。

そして、あの時のジン達の取引現場に行くように命じられたの。メ  
イラン様の命令は

‘絶対’ 刃向かえばどうなるか分からない。

恋人と姉を救う為にも私はこの命令に従い続けるしかなかった。

相手がジンだという事は多分‘死’が待っている事。

其れはすでに覚悟は決めていた。

だけど・・・貴女に会えなくなるのはとても寂しい。

と同時にあの取引後・・・多分私はもう、この世には居ないでしょう。

だから、昔からお世話になっている友達の夏美に此れを託します。

最後に、ミレイ。とても楽しい時間を有難う。

姉さん、貴女と出会えてとても嬉しかったし、貴女と過ごした時間は私にとって

とても大事な宝物よ。此れからも体に気をつけて過ごしてね。

最後になるけど・・・。

元気で。

雪音。

その手紙を読み終えた頃にはミレイのタバコもかなり短くなりミレイ無言のまま

携帯灰皿にタバコを揉み消しそして……いつの間にか‘涙’が出ていた。

哀「……ミレイさん。」

そして、ミレイがくつと両膝を突き「……雪音姉さん。姉さん。姉さああああんー!」

と続け様に「どうしてだ?!何で?!あのとても優しかった雪音姉さんが‘死ななきゃ’

ならんツ?!何でだああああ!……!……!」と叫んだ。

夏美「後これは、言いにくいんだが雪音の奴がジンに殺された後・  
すでに、もう

雪音の姉と恋人は広州の奴等に運が悪い事に、始末されてしまっ  
ていた、んだ。」

ミレイ「な……！其れ本当？！夏さん。」

夏美頷き「ああ。実は、私しゃあも気になったってうちの情報部に  
調べるよう依頼したん

だ。」と続け様に「そうしたら・・末端の場合広州の連中は、捨て  
駒、と言う考えが

あるからな。その、捨て駒、を利用し終わった時に、人質、ももう  
、用済み、



って訳なんだよ。」

其れを聞いて蘭「・・・酷い。」

和葉も黙って驚いていた。

其れはコナン達も同様だった。

そして、ライカ「広州の連中は・・・そう言う『連中』なんですよ。」

と続け様に「広州では『捨て駒』にされなくなかったら・・・幹部に上るしか

方法はないんですよ。まあ、エリート組みの話だけに限定されるけどね・・・。」

ミレイその手紙を握り締めて「・・・広州め！！絶対に許さない！！  
！私の手で・・・。」

姉さんの仇を！！！！！！」

と怒りの顔になっていた。

其れを見て夏美「・・・ミレイ。お前さんまさか？」

と呟いた。

第30章。ミレイと雪音。完。



第30章。ミレイと雪音。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はミレイとジンの兄貴様が再会する

所を書かせて頂く予定となっています。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ

哀「・・・ミレイさん。大丈夫？」

ミレイ「うん。何とかね。有難う哀。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

第31章。ミレイ自宅へ戻る。(前書き)

連続ですみません。

今章もミレイ中心です(笑……)

と同時に赤井さんと軽く遭遇?します。

### 第31章。ミレイ自宅へ戻る。

あれから、夏美から姉貴分の手紙を受け取ったミレイ。そして・・密かに姉貴分と実の兄の

仇討を決意する。

ミレイ時計を見て夕方の5時過ぎだと確認し「・・んじゃ。そろそろお暇するか。

明日大学だしね。」

哀「一人で平気???ミレイさん?」

ミレイ頷き「まあ・・何とか大丈夫だよ。哀。」と続け様に「あんたも、'気をつけな'??」

兄さん未だにあんたの事も探しているみたいだから。」

哀「ええ。ミレイさんも気をつけて。」

ミレイフツと笑い「ああ。」と続け様に「じゃ・・私は此れでお暇  
させてもらつよ。」

博士。長い間悪かったね。」

阿笠「何。かまわんよ。」

コナン「何かあったらメールするんだぜ? いいな?」

「ミレイ」OK!

そう言い夏美達に軽く挨拶をし阿笠家を出て自宅へと向かった。

と同時に夏美「所で、平さん方？大阪にお戻りにならなくていいんですか??」

服部「うちの高校、しばらく先生方が長期出張で今月いっぱい休みなんねん。」

だから、しばらく此処に厄介になるちゅう訳や。」

夏美「・・・成る程。で??ご両親はこの事ご存知で?」



服部「んああ。夏美ん所行くつちゆうつたら親父もおかんも許可してくれただ。」

夏美「そ、そうですか。」

と続け様に和葉「なあ。夏美ちゃん。」

夏美「はい。何でしょう？和葉さん。」

和葉「ひよっとして、アジトに戻るんか？」

夏美頷き「ええ。アジト戻ってそして自宅に戻れたら戻ろうと思うんですが、

どうしましたか？」

和葉「いや・・オウガ様にならくなご挨拶もまだ出来てへんからご挨拶しようと思ってな。」

夏美「そうですか。なら・・此れから行きます？アジトにはライカが事前に連絡いれた

みたいですし・・。」

和葉「うん。宜しゅう頼むわ。」と続け様に「平次。あんたも行くんやで？」

服部「分かってるがな。」と続け様に「夏美。自宅に戻る予定ってさっき言ったやろ?」

夏美「は、はい。」

服部「何なら・・・急で悪いんやけど俺達しばらくの間泊めてくれんかな?」

夏美「べ・・・別にかまいませんけど?」

服部「おおきにー!じゃ・・・日が暮れんうちにさっさと行こうか。」

和葉「そやな。」と続け様に「蘭ちゃんも行くやろ?」

蘭「うん。」と続け様にコナンに「ごめんね。コナン君私此れからワカバのアジトに行つて来

るね。」

コナン「うん。分かった。気をつけてね。蘭姉ちゃん。」

蘭「うん。」と続け様に「あ、今日お父さん麻雀仲間と小旅行に行つてるから冷蔵庫に

一応たらこスパゲッティ作つといたから其れ食べてね。」

コナン「はい。」

と続け様に夏美コナンの所により小声で「という事で、悪いな。新。

「

コナン小声換えして「何、構わなねえよ。」と続け様に「くれぐれも蘭達の事頼むぜ?」

夏美頷き「また、近い内にメール入れる。」

コナン頷いた。

そして、ライカ「おゝい！相棒！そろそろ戻ろう!」

夏美「ああ。今行くよ！相棒!」

と続け様にコナンに「じゃな。」

「ナン」おづ。」

そして哀に軽く挨拶をしそして博士に一礼しライカ達と共に阿笠家を出た。

もちろん、服部達も軽く博士達に挨拶を済ませた。

一方、ミレイは自宅に向けて歩いていった。

すると、「あら？」

今度は黒の長い車を目撃する。

あれはもしかして、黒のシボレー。

その持ち主は多分昔ジン兄さんに聞いた事がある

赤井秀一の車。

と言うことは・・・多分彼も来ているのね。

そう心の中で呟き関わらない方が良いと感じたのかその場を素早く後にする。

一方、赤井は車内の中で運転席の窓を開けミレイを確認していた。

赤井「・・・龍崎ミレイか。」と呟いた。

そして、ミレイ自宅があるマンションに着き9階までエレベーターで行き着き自宅のドアに

鍵を差込開けた。

と同時に洗面所に行き手洗い等を済ませソファアに座り再びタバコに火を灯し

「今週は、色々とあり過ぎたわね。」と呟いた。

そして、ソファアから立ち上がり窓を見て「まだ、雪、降っているのね。」

「雪は・・・嫌な場面も思い出させてしまう。」とも呟きソファアの近くにあるテーブル

の上にある灰皿にタバコを消し「さて、明日の大学の支度でもするかな。」



そう言い自分の部屋に戻った。

その様子を1人のブロンド髪の女が見ていた。

そして女クスと笑い「ミレイ。自宅に戻ってきたみたいよ？ジン。」

と電話で報告していた。

ジン「そうか。ご苦労だったな。ベルモット。」

と続け様に「あいつ何してる？」

ベルモット「明日の大学の支度しているみたい。何せ・・・彼女一応大学生だから。」

と続け様に「どうするの?」

ジンニヤリと笑い「まだ、しばらくの間、様子見だ。」

ベルモット「了解。」

そう言い携帯を切った。

と同時に「さて、貴女は一体この、追いかけて、に耐えられるか  
しら?」

楽しみね?ミレイ。

一方、ミレイは何か「不穏な気配」を感じたのか。

大学の支度を終えた後急いでリビングに戻り窓を見た。

ミレイ「んな?！」

あ・・・あのブロンド髪?！」

ま・・・まさか?！」

ズッシン、ズルモット姉さん?！」

と驚いていた。

と同時に。

不味いわね。ベルモット姉さんまで動いていたなんて・・・。

どうやら、あまり、良くない、展開が待ち受けているようね。

そして「あああ！もう！明日1限から3限までだっつうのに！こんな事考えていたら

切が無い！！シャワー浴びてタバコ吸って寝ようッ！！」

そう言いシャワー室に入りシャワーを浴びタバコを吸って灰皿に夕

バコを消し

寝室に入りベッドの中入って寝た。

そして、再びミレイに、「悪夢」が忍び寄る。

第31章。ミレイ自宅へ戻る。完。

第31章。ミレイ自宅へ戻る。(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は、多分ワカバを書く予定でいます。

次章も今章同様にお付き合い下されば幸いです。

オマケ。

ミレイ「・・・なんかやな予感するな。」

N「だ・・・大丈夫ですって！ミレイさん。」

ミレイ「だ、だってさ・・・あのベルモット姉さんも

動き始めたんだよ？」

N「・・・そっ、そうですね。汗」

と続け様に「じ・次章もどうぞ宜しくお願い致します

す!」(一礼)

ベルモットその様子をクスと笑い見ていた。

**第32章。ワカバのアジト。(前書き)**

おはようございます。

今章では主にワカバが中心となります。



### 第32章。ワカバのアジト。

此処は、米花町にある。ワカバのアジト。

蘭達をワカバの準メンバーとして受け入れてそして連れて来た夏美とライカは

オウガの部屋に蘭達を連れて行った。

オウガ、蘭達を見て「この度は態々ご協力感謝する。そして、君達をワカバの一員として

受け入れる事が出来てとても嬉しく思う。まあ、俺はボスだが呼び方は自由でかまわんよ。」

と微笑んだ。

すると、蘭一礼し「此方こそ今後とも宜しくお願いします。オウガ様。」

そして和葉と平次も一礼する。

オウガ再び微笑みながら「いや、此方こそ宜しく頼むよ。」と続  
様に

「君達の場合、まだ高校生と言う事もあり、学業優先でかまわんか  
ら。」

仕事も出来る範囲で構わないよ。」と更に続けて「で？早速配属な  
んだが、蘭さんは

夏美達同様此方のアジトに所属してもらおう。」

平次「んで？俺等は？」

オウガ「君達は、大阪にもうちの支部があるから其処に配属してもらう。」

頻繁に此方に来てもらうわけにも行かんからな。交通費等馬鹿に出らんから。」

と苦笑い。

平次「了解した。でも、此処にも一応『配属』とさせてくれへんかな？」

俺、あのメガネのボウズにもたまに会うし・・・。」

オウガ頷き「ああ。分かった。だが、基本的に君達は大阪支部配属という事で

宜しく頼むよ。」

平次達頷いた。

そして、オウガ夏美達を見て「まあ・・そういう事だ。宜しく頼む。夏美、ライカ。」

夏美頷き「了解いたしました。兄様。」

ライカも同様に頷いた。

と続け様に「よし！解散！また何かあったら連絡くれ。」

と同時に蘭達を見て「今日は、お疲れの所態々挨拶しに来てくれて有難う。」

夏美の家がこの近くだと思っから今日の所は夏美に休ませてもらってくれ。」

と続け様に夏美を再び見て「そう言う事だ。すまん。夏美。」

夏美頷き「構いませんよ。兄様。」と続け様に「平さんにも既に頼まれていましたから。」

オウガ「そうか。」

そして、夏美ライカを見て「相棒も来るか？」

ライカ「んああ。そうさせてもらつよ。」

そして、蘭達を連れてオウガに一礼しアジトから夏美の自宅へと向かった。

第32章。ワカバのアジト。完。

### 第32章。ワカバのアジト。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は再びミレイを中心に書かせて頂く予定

です。多分、再び「夢の話」になると思います。

次章も今章と同様にお付き合い下されば幸いです。

オマケ。

雷外「ワカバもにぎやかになったね。」

ライフエイ「そだね。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくな！」

第33章。ミレイの、闇の夢再び。(前書き)

今章は、再びミレイに、闇の夢が迫って来ます。



### 第33章。ミレイの「闇の夢再び」。

一方、ミレイは自宅に戻りあれからベットで寝ていた。

そして、再び「夢を見た」。

外は、また雪。

たまたま大学の友達と共に帰宅途中だった。

そして、対抗歩道からジンが歩いて来た。

ミレイその様子を気づかない振りをしてしながら急いで友達と共にその場を後にしよう

とするが、既に友達には居なくミレイが只一人だった。

そして、いつの間にか路地裏に追い込まれていた。

ミレイは只その場から逃げようとした。

が、「やっと、会えたな」。ミレイ。「

ジンの声がしてその場から連れ去られた。

そして、ミレイベットから勢い良く起き上がった。

ミレイ頭カリつとかいて「なんつう夢だ。」そして「ここんとこ最近そんな『夢』

ばかり。」

そして、時計を見たまだ、夜中の4時だった。

「ミレイヘア」とため息付き「あんな『夢見たら、再び眠れやしない。』」

しかし、このまま起きているのもあれかと思ひ。

ミレイ再びベットの中に入った。

すると、その時何者が侵入しそつとばれない様に、小型カメラ付き盗聴器、を

仕掛けその場を後にした。

ミレイその事に一切気づいていなかった。

その仕掛けた相手が・・・

自分の兄貴分だとも知らずに。

第33章。ミレイの、闇の夢再び。完。

第33章。ミレイの「闇の夢再び」。(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はミレイの大学生活について再び

書く予定で居ます。

其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

ミレイ「何で・・・こんなんばっか??？」

N「いやはや・・・あの方はミレイさんを

追い詰めるのが好きならしいですな。」

コナン「其れを書いているのはあんただろ？」

N

ギクツ！

と続け様に「じ・次章もどうぞ宜しくお願いいたし

ます!!！」

とその場を後にする。

コナン

逃げたな笑。

第34章。ミレイの日常。(前書き)

今章もミレイ中心とさせていただきます。

### 第34章。ミレイの日常。

そして、朝が来てミレイは目が覚めた。

すると、自分の部屋の物の位置が若干違う事に気づく。

ミレイ辺りを見渡し、まっ、まさかね。

そう言い洗面所に行き洗顔等を済ませそしてリビングに戻り朝食の準備を済ませる。

すると、携帯が鳴った。

ディスプレイを見ると沙江島真理恵となっていた。



ミレイ「はい。龍崎。」

真理恵「あ、ミレイさん？おはよう。私です。」

ミレイ「ああ。沙江島か？おはよう。どうした？」

真理恵「実はね、今日の1限の書道先生が急遽出張が出たらしくて休講になったの。」

ミレイ「あ・・・そうなんだ。んで？今日この後の授業一緒だったよね？」

真理恵頷き「ええ。そうよ。後の授業は通常通り。」

ミレイ「了解した。」

と続け様に真理恵「あ・・・そう言えば今日うちの学科に編入生が来るらしいわ。」

ミレイ「ふえ？編入生？？」

真理恵再度頷き「ええ。なんにせよ。日本の文化等に興味あるかと言う事で。」

ミレイ「じゃ・・・外国人なのか？」

真理恵「ええ。アメリカ人らしいわ。名前は・・・。確か。クリス・ヴィンヤードって。」

ミレイその名を聞いて驚き

ク・・・クリス・ヴィンヤードだど?????!

一瞬その名を聞いてブロンド髪の女を思い出した。

真理恵「ミレイさん？ミレイさん？」

ミレイ我に戻り「ああ。わ、悪い。」

真理恵「大丈夫？そのクリスさんに覚えがあるの??？」

ミレイ「いや……。特に。」と続け様に「じゃ……。2限の時に。」

真理恵「ええ。では。」

そう言い電源を切った。

そして、朝食を済ませた。

その後何時もの様にタバコに火を灯し、「……クリスマス・ヴィンヤード。」

まさか。

あの女か？！

ミレイが言うあの女とはベルモットの事である。

ミレイ「・・・迂闊に『下手な事』出来ないわね。」とも呟いた。

すると、小型の黒い物体を見つける。

「な・・・！！！！」

「これは・・・まさか？！」

とっ 盗聴器?!

しかも、黒と言つことは・・・。

ジン兄さんが此処に?!

そして、小型の黒の盗聴器を見て更に頭を抱えて「し、しかもご丁寧に小型カメラも

ついているし・・・。」

さては、もう・・・。

先程の沙江島との会話も・・

そして私が起きた時の行動も・・。

‘見られていたって’訳ね。

だから・・・。

あの女ヒトをもしかして・・・。

大学へと‘編入させた’。

私を、‘追い詰め’そして‘連れ戻す為に’。

すると、ミレイフツと笑い「・・考えすぎか。」

だつて、もし、其れが、本当だとしたら、私の周りに、不穏な気配  
がたつて来る

はずだもの。

そう呟き灰皿にタバコを揉み消した。

すると、一匹の黒猫がいつの間にか入って来た。

ミレイ驚き「く・・・黒猫？」

と続け様に「何時の間に入ってきたんだろう？」



そして、その黒猫はミレイに近づき懐いた。

ミレイ恐る恐るその黒猫の頭を撫でた。

その時黒猫はミレイの顔を確認した後その場を出ていた。

黒猫、そして以前に見た黒のカラス。

黒は、不吉、を思わせる。

そう思いながら、ミレイ時計を見て9時20分過ぎだと言っ事を確認し

「あ・・・いけない！もうそろそろ出なきゃ！2限に間に合わん。」

そう言い大学の鞆を持ちリビング等確認し戸締りを閉め大学に向かった。

その様子を黒のポルシェと黒のシボレーが別々に分かれて見ていた。

ミレイはその事を気づかずに居た。

第34章。ミレイの日常。完。

### 第34章。ミレイの日常。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

ベルモットの本名は本来ならシャロン・ヴィンヤード

だそうですが・・・。

此処ではあえてクリスとさせて頂きました。

生徒に扮する為にね。（笑；；；）

さて、次章は、米花女子大学のメンバーを久々に

出したいと思います。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ  
幸いです。

オマケ。

コナン「おいおい。ミレイの奴大丈夫か？」

哀「あの様子だと大丈夫じゃなさそうね。」

夏美「・・・確かに。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく!!!」

**第35章。米花女子大学。（前書き）**

今章では、久々に米花女子大学編です。

ベルモットが編入生としてミレイの国文科に

進入しています。

### 第35章。米花女子大学。

あれからミレイは家を出て大学に何時の通り向かった。

2限が始まるのが10時40分で、大学に着いたのが・・・10時30分頃。

ミレイ「2限の先生来るの遅いから・・・喫煙所でタバコでも吸うか。」

そう呟き喫煙所がある1号館へと向かった。

そして、喫煙所に着き先程コンビニで買ったペットボトルの紅茶を取り出しタバコに火を灯

す。すると、1人のブロンド髪の女が入って来た。

ミレイ「ん?」

ブロンド髪の女……。

この女何処かヒトで……。

すると、そのブロンド髪の女がミレイの目線に気づきミレイを見てクスと笑う。

ミレイその顔を見て驚いた。

‘私を知っている?????’

と同時にミレイにとって耐えられない‘不穏な気配’が襲った。

ミレイ吸いかけていたタバコを急いで消し紅茶を飲みその場をすばやく後にし

2限の教室へと向かった。

その喫煙所に取り残されたブロンド髪の女は再びクスと笑い

「相変わらず、勘、が良い事。」と呟いた。

そして・・・。

此れからがもっと楽しくなりそうよ？

ねえ・・・？



ミレイ？

一方、此処は1号館の2階にある123号室。

此処で「日本語聴取法」の授業がある。

ミレイはその教室に居た。

すると、真理恵がカノンと共にミレイの所にやって来て

真理恵「ミレイさん。大丈夫？？」

ミレイ「あ・・・ああ。大丈夫だよ。」と何時も通り明るく振舞う。

その様子を見てカノンも「本当に大丈夫なの？？」

ミレイ頷いた。

カノン「なら・良いけど。」と続け様に「ねえ・所でさ。編入生が来るって事聞いた？」

ミレイ「ああ。沙江島から聞いたよ。」と続け様に「な・なあ。その編入生の髪の色」

ブロンドじゃなかったか??」

カノン「ご名答。私今日1限からだったんだけどその時にその編入生と一緒にだったんだ。」

と続けて「んでもって・私に質問してきたよ?」

真理恵「何の質問?カノンさん?」

カノン「確か・・・龍崎ミレイさんが居る大学ってこの大学の国文学科で、あってる？」

「  
ってね。」

真理恵「それで？何て答えたの？」

カノン「あっていますよ。って答えたよ。」と続け様に「彼女と同じ授業ある？」

とも聞かれてね。そうしたら2限と3限が一緒ですよ。と答えたんだ。そうしたら、

あの編入生嬉しそうにしていたよ。」と更に続けて「でも、どうして？ミレイを知っているん

ですか？つて聞いてみたら・・・こつ答えたんだ。」

真理恵「何て答えたの??」

カノン「確か・・・英語で・・・。」

「I'm sorry! I can't tell you.  
A Secret makes a woman woman.  
n...」

547

「ごめんなさい。教えられないわ。女は秘密を着飾って美しくなる  
ものよ。」

ミレイその言葉を聞いて思わず固まり冷や汗をかいてしまう。

ま・・・間違いない!!

こっ・・・この「口癖」は、あ、あの女だッ!!!!

あの女しか「使わない」!!

すると、真理恵「ミレイさん？」

ミレイ再び真理恵の声で我に戻り「あ・・・あ。悪い。」と続け様に  
「沙江島。」

真理恵「何？」

ミレイ「その編入生の名・・・クリス・ヴィンヤードって私とあんた

が電話で話している

時に言ったな？」

真理恵頷き「ええ。そうよ。」

ミレイ「悪い事は言わない。その編入生とは、あまり関わらない方が  
良い。」

その事を聞いて真理恵「どうして？」

ミレイ「どうしてもだ。」

真理恵「・・・分かったわ。努力する。」

そして、ミレイカノンも見て「前川。あんたもだ。」

カノン頷き「OK。」

そして、真理恵時計を見て「ねえ。桶川<sup>おけがわ</sup>先生遅くない??」

カノン腕時計を見て「本当だ。普段なら10時45分位に来るはずなのに・・・」

今はもう10時50分だよ。5分位経っているわ。」

すると、ブロンド髪の女が教室に入って来た。

そして、ミレイの後ろの席に座った。

ミレイ思わず顔が引きつった。

と同時に学生支援の職員が入って来て「皆さん。唐突で申し訳ありませんが・・・」

今日桶川先生体調を崩されて病院に行かれた為急遽休講と言つ事となります。」

生徒全員「え〜!!!」

そして、カノン「あら・・・じゃ、今日の3限も授業ないわね。うち等・・・」

3限もあの先生の授業だから。」

真理恵「そっね。」



すると、ミレイ席を立ち「んじゃ・私じゃあは、いつもん所、寄  
ったら帰るわ。」

カノン「え？帰っちゃうの？？あんた授業は？？」

ミレイ「3限で終わり。本当は、1限から3限までだったんだけど・  
。1限は沙江島の

連絡で休講って知ったから2限、3限って言う訳。けど・・・2限、  
3限が休講になった

ら大学意味ないっしょ？？」

カノン「そ・・・そりゃあそうだけどさ・・・せっかく来たんだし一  
緒に帰ろうと思った

んだけど・・・。」と残念そうに言った。

ミレイ「ああ・・・そっか。今日あんた4限までだったんだっけ？」

カノン頷いた。

ミレイ苦笑いをし「悪いね・・・今日は、どうもね。」

カノン「分かった。じゃ・・・また明日ね。」

ミレイ教科書を鞆にしまい「じゃ・・・ね。」

そう言い教室を出ていつも所に寄ってタバコに火を灯して、携帯を取り出し電話をかけた。

第35章。米花女子大学。完。

第35章。米花女子大学。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はミレイが大学の喫煙所で誰かに電話をかける所を書く予定で居ます。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ミレイ「……………何かこれ見ていると私ピンチ？」

「……………ですね。」

と続け様にミレイ「ベルモット姉さんが出てくるなんて聞いていないよ……！」

N「こ……これはあくまでも組織をベースに……。

書いていますからその辺はご勘弁を……。汗」

ミレイ「次章もどろろ宜しく。」

**第36章。ミレイの電話の相手と再び阿笠家。(前書き)**

今章ではミレイとコナンが携帯で話をしています。

### 第36章。ミレイの電話の相手と再び阿笠家。

あれからミレイは教室を抜け、大学の喫煙所に行きタバコに火を灯し急いで携帯に電話をかけた。

た。

すると男の声で「はい。江戸川ですけど・・・。」

その相手はコナンだった。

今日コナンの小学校では先生達が出張の為臨時休講になっていた。

ミレイ「あ・・・コナンか？。私だ。」

コナン「おう。ミレイかどうした？何かあったか？」

ミレイ辺りを見渡し警戒しながら「実はな……。ジン兄さんの仲間が私しゃあの

大学に編入生として乗り込んできたんだ。」

コナン其れを聞いて驚きながら「な……。何?!ま……。マジかよ?!」と続け様に

「其れ本当か?!」

ミレイ頷き「ああ。本当だよ。」

コナン「んで?学科は???」

ミレイタバコを吸いながら「案の定……。私しゃあと同じ、国文科



「 だったんだ。」

コナン「それを聞きつつ」「んで？やつ等の仲間のコードネームは？」

ミレイ「クリス・ヴィンヤード。そして・・・あの口癖を友達に言ったんだ。」

コナン「・・・おいおい。クリス・ヴィンヤードとその口癖って・・・まさか?!」

ミレイ「ああ。『 A S e c r e t m a k e s a w o m e n w o m e n 』ってな。」

と更に続けて「女は秘密を着飾って美しくなるもの。ってこの口癖使う人は大体あんたも」

検討付いているだろうか?」

コナン「・・・ベルモットか。」

ミレイ頷き「名前答えて。どうやら・・・此処まで、嗅ぎ付けられたらしい。」

ジン兄さん達がこの町に、来ている事は勘付いては居ただけど・

まさか・・・あの女<sup>トク</sup>まで来てしまっているとはね・・・。」と続け様に

「ある意味やばい事になって来たね。」と苦笑い。

コナン「おいおい。笑っている場合かよ。」

と続け様に「オメー。此れから会えねえか？」

ミレイ「此れから？良いよ。今日大学の授業全部休講だし。」

コナン「よしー！じゃ・・・後で、何時もの所で。」

ミレイ「了解。」と続け様に「んじゃ後で。」

そう言い携帯を切った。

一方、ベルモットはと言うと米花女子大学の路地裏に止めてある黒のポルシェの中に居て

ジン達と合流していた。

その会話は、ベルモットとジン達にも筒抜けだった。

ベルモットクスと笑い「聞いた？ ジン？」

ジン「ああ。ちゃんと聞こえていたぜ」？多分・ミレイが現れる場所といや・・・。」

ベルモット「多分・米花町4丁目か5丁目にある阿笠家。其処にミレイが現れると思う」

わ。」

ジンタバコに火を灯しながら「フッ。そうか。」

此れで・・・ようやく、お前と本格的に再会できそうですぜ」。

・・・楽しみだな。

なあ・・・？

ミレイ？

と続け様にウオツカに「だぜ。」と更に続けて「ミレイの、もう一つの穴倉」に向かえ。」

ウオツカ「へい。」と返事をし車を出した。

すると、案の定ミレイも大学から出て近道をしようと路地裏に入っ  
たその時

「！！！！」

黒のポルシェが目の前を通り過ぎた。

「ミレイ苦笑いをし」「こりゃ・・ちゃんとした道で行った方が良いな。」

そう言い路地の戻り阿笠家に向かった。

第36章。ミレイの電話の相手と再び阿笠家。完。



第36章。ミレイの電話の相手と再び阿笠家。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて次章は、ミレイが阿笠家に付いた所から書く予定  
でいます。

次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ・・・。

コナン「おいおい。ミレイの居場所がこのままだと

・・・。  
「

哀「ええ、ばれるでしょうね。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくね。」



第37章。ミレイ再び阿笠家に表われる。(前書き)

今章は、ミレイとコナン達のやり取りが主になります。

### 第37章。ミレイ再び阿笠家に表われる。

あれから、大学の喫煙所でコナンとの電話を終えたミレイ。

その後大学から出て阿笠家に向かい着く。

その中にコナンと哀が居た。

阿笠博士は東都デパートに買い物があつた為不在だった。

そしてミレイ事の経緯をコナン達に話す。

コナン「・・・成る程な。ベルモットが、編入生として・・・お前の学科に。」

ミレイタバコに火を灯し「ああ。」

哀「い・・何時分かったの??ベルモットが・・ミレイさんの大学に居たという事?」

ミレイ「今朝の沙江島からの連絡だよ。それで・・知ったんだ。まあ、最初は

気にも留めても居なかったが・・。大学に着き沙江島と前川と話している内に確信したん

だ。」

哀「ど・・どうやって?確信したの?」

ミレイタバコを吸いながら「実は、前川案の定1限の授業の時ベルモット姉さんと一緒

だったらしい。その時にベルモット姉さんが私しゃあの事を必要以

上に聞いていたらしい。」

と続け様に「前川の奴が、どうして？」見たいな事聞いたらしいんだ。そしたら・・・

こう返って来た。I'm sorry! I can't tell you...。A Secret makes a woman women...。

ってな。この口癖を使う人はあの女メドしかいないさ。」と更に続けて

「恐らく、標的ターゲットはこの私じゃあ。と。「哀をチラッと見た。

哀只無言になった。

と更にコナンを見て小声で「しっかり彼女守ってやんなよ。」

コナン頷いた。

と同時に哀がようやく口開き「ねえ。さっきから『ノイズ』聞こえない??」

ミレイ「・・・ノイズ」?

まさか?!

そう言い急いで大学の鞆の中を探った。

「ミレイ」！……」

と同時に」「どっちら…… やられた、みたいだ。」

そう言い黒の小型盗聴器を取り出した。

哀「そ……その『黒の小型盗聴器』まさか?!」

コナン

「ミレイ、頷き冷や汗をかき」ああ。そのまさかだろっつね。」

「奴等か?!」

ミレイ苦笑いをし「しかも・・・丁寧に『小型カメラ付き』。」

コナンも確認した「マジかよ！でも、どうして・・・オメー？」

ミレイ再度苦笑いをしタバコを加え直し「私しゃあの自宅にも『同じタイプ』の

盗聴器が仕掛けられていたんだよ。」

コナン「んな？！」

哀只黙っていた。

ミレイ「……ごめん。ジン兄さん。」と小声で謝りその盗聴器を潰した。

と同時に心の中で焦って……。

ひよっとしたら……近い内に私しやぁに、会いに来るかもしれないね。

と呟いた。

第37章。ミレイ再び阿笠家に表われる。完。



第37章。ミレイ再び阿笠家に表われる。(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は・・・多分ジンの兄貴様方を中心として

書かせて頂く予定です。

次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ミレイ「・・・・・・・・・・。汗」

夏美「ミレイ。」

と続け様にタバコに火を灯し「次章もどうぞ宜しく！」

**第38章。再びミレイと夏美との会話。（前書き）**

おはようございます。

今章では、ミレイと夏美の会話が主になります。

### 第38章。再びミレイと夏美との会話。

あれから、ミレイは阿笠家でコナン達に自分が潜伏しているのがこの町だと言う事を

完全にジン達に気づかされてしまう。

そして、その事を聞き驚いたコナン達。

そして、ミレイは再び携帯を取り出し電話をかける。

夏美「はい！橘っ！」

ミレイ「夏さん？私・・・」

夏美「おう！ミレイか？どうした？」

ミレイ「どうやら・・・私の『居場所』完全に『嗅ぎ付けられたらしい』。」

其れを聞いて夏美「んな？！マジで？！」

ミレイ頷いた。

夏美「大丈夫だよ。ジンにもしばらくの間ミレイをほっておいてやってほしい。って

前に会った時に言ったんだもの。」

ミレイ「でもさ・・・其れは広州の連中が私と遭遇するまでの事ですよ？」

夏美「ん・・・ああ。」

ミレイ「あの男キトがずっと、私の事ほっておいてくれると思っ？」

夏美其れを聞いて黙り込んだ。

と続けて「それに・・・。」

夏美「・・・それにどうした??？」

ミレイ焦りながら、「あの女<sup>ヒト</sup>が動き始めた。」

夏美其れを聞いて「おいおい。あの女<sup>ヒト</sup>、ってまさか・・・？」

ミレイ頷き「ああ。そのまさかさ。」

夏美「・・・ベルモットか。」

ミレイ「ご名答！しかも・・・私じゃあの大学の編入生として国文科に入ってきたよ。」

クリス・ヴィンヤードとしてね。」

夏美ため息付き「ベルモットも動き始めた」と言う事は……。もう、彼もお前さんを

「ほっておく」訳にも……。いかんか。」

ミレイ「……そういう事。多分兄さんの事だから近い内に私しやあに会いに来るだろう。」

夏美「……弱ったな。今まだ、お前さんとジンを再会させる訳にも行かない。」

其れを聞いてミレイタバコを取り出し再度火を灯し「何か、不味い事、でも？」

夏美「ああ。メイランの奴がまた手下にお前さんの『拘束命令』を

出したんだ。

しかも今週中にね。」

其れを聞いてミレイタバコを吸いながら「また？しつこい連中だ。」

と呆れ笑い。

夏美「・・・奴等は、そう言う連中だ。」と続け様に「そう言えば・・・  
奴等と言ったら

今週の土曜か・・・何かのパーティーでとある客2名を、暗殺、する計画を立てているらしい。」



ミレイ「パーティー？」と続け様に「今週の土曜日には??？」

夏美頷き「ああ。内容は今の所不透明だが、其処で・・・広州の連中が客に扮し侵入し

、先程似た様な事言ったと思うが2人の客を暗殺する予定だ。」

ミレイ「え？マジ??？」

夏美もタバコに火を灯し頷きながら「ああ。多分・・・その標的は広州の

連中に取りつて、邪魔な存在、と言う事だと言えるよそして、広州の連中はお前さんも

その計画に加えようと企んでいるんだろう。」と続け様に「お前さんも、薄々、勘付いて、」

居るだろうが・・・奴等はお前さんが、赤龍、だって事知っている。

これを使わない手が無いだろうとも考えたんだろう。まあ・・・これはあくまでも

私しゃあの個人的な考えだが・・・まあ・・・なんにせよ、気をつけたほうが身の為だ。」

ミレイ頷き「有難う。夏さん。」と続け様に「んで？場所は？」

夏美「今の所、杯戸シティホテル、だそうだ。」

ミレイ「そう。」「と続け様に「ねえ。夏さん。」「

夏美「はいよ。」「

ミレイ「もし、その事が詳しく分かったら・・・教えてくれる??」「

夏美「べ・・・別に構わんけど。」「と続け様に「お・・・お前さんまさか???」「

ミレイ「大丈夫よ。そんな『変な行動』しないしね。」「と笑いながら言った。

夏美「・・・だと良いけどさ。」「と更に続けて「良いかい?自宅には

戻らない事をお勧めするよ

何時・・・ジン達とそれに広州の連中が来るとも限らんしね。」

ミレイ「・・・了解。」と続け様に「・・・長時間ごめんね。夏さん。」

夏美フツと笑い「・・・何気にするな。んじゃ・・・何か分かったら連絡する。」

ミレイ頷き「有難う。お願い。」と続け様に「それじゃ。」

そして携帯を切った。

一方夏美は、ワカバの喫煙所でミレイの事を心配していた。

夏美タバコ吸いながら「・・・ミレイ。お前さん、まさか・・・。」

と小声で呟いた。

第38章。再びミレイと夏美との会話。完。

第38章。再びミレイと夏美との会話。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

と同時に・・・皆様にお詫び・・・。

前に黒の組織らへん？を出す予定等の予告を出しておきながら・・・

電話と言つ事で急遽ミレイと夏美との会話に変更させて頂きました。

訂正を及びお詫びいたします。申し訳ありませんでした。

さて、次章は広州の幹部と夏美が接触する所を

書かせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

ミレイ「・・・杯戸シティホテルか。」

コナン「おい。まさかお前・・・。」

ミレイフツと笑い「次章もどうぞ宜しくね。」

第39章。夏美、広州の幹部と接触。そして……銃弾に襲われる。(前

今章では、タバコを買いに行った夏美が偶然にも

広州の幹部と接触しそして……。

銃弾に襲われてしまいます。



第39章。夏美、広州の幹部と接触。そして……銃弾に襲われる。

ミレイとの会話を終えた夏美は喫煙所から出てメンバーに「タバコ  
買ってくるな。」

と言い愛車の青のベンツでタバコを買いに出かけた。

そして、タバコを買いに米花町のとあるタバコ屋でタバコを買いそ  
して、駐車場に止めてあつ

た。愛車の所に向かう途中広州の幹部と偶然にも接触した。

夏美「……王明杏。」  
オウ・メイアン

明杏アメイクスと笑い「あら・・此れは、奇遇、とも言つべきかしら？  
夏美。」  
シヤア

夏美只黙りながらタバコに火を灯した。

明杏「どうやら・・・会いたくなかった、そう言う顔ね。」

そして、夏美明杏を睨み付けながら「・・・何用だ？」

明杏再びクスと笑い「そんな・・・睨まないで。私は、只、彼女の事について

聞きたいだけよ？」

明杏が言う彼女とはミレイの事。

夏美「・・・奴の事聞いてどうするつもりだ？」

明杏「・・・愚問だわ。勿論。メイラン様の所に連れて行くのよ。」

夏美タバコ吸いながら「奴はお前等広州には渡さん！絶対にな！！」

明杏悲しそうに「・・・そう。『残念だわ』。夏美貴女なら、メイラ  
ン様の

妹分である貴女なら・・・分かってくれる、と思ったのに・・・。」

そう言い右手を上げた。

次の瞬間！

銃声が響き渡った。

夏美タバコを思わず口から落としてしまった。

そして、夏美の腹部から大量の血が。。

夏美「・・・ッ！」

そして後ろのビルの方を見てライフルを構えた女が居た。

夏美軽く舌打し「・・・愛<sup>アイリン</sup>憐か。」

そう、コナンに1度やられたが復活して戻ってきた。

そして、夏美腹部を手で押さえながらタバコを踵で揉み消し吸殻を拾い愛車まで

歩き始めた。

と同時に明杏を見てフツと笑い「・・・ひ、1つ言っておく。お前さん達『命』の灯火が

縮んだよ。」

明杏クスと笑い「どうして?」

夏美自分の愛車から黒の盗聴器を取り出しニヤと笑い「こ…此れが何か分かるよね？」

明杏其れを見て驚き「んな？そつ…其れは、盗聴器?!しかも…黒…。」

と、言う事は?!まさか?!」

夏美「そう。此れは多分私の、大事な彼、が仕掛けたもの。分かるわよね？」

と更に続けて「因みにこれ…発信機も付いているから、下手すりゃ…。」

こっちに来るだろう…さ。」

其れを聞いて明杏顔色悪くし「あ…貴女、もしかしてジンの恋人?!」

夏美再度ニヤリと笑い「・・・」名答。」

そして独特のエンジン音が聞こえて来た。

明杏軽く舌打し無線で「愛燐！！不味いわ！あのエンジン音は奴等よ！引き揚げるわよ！」

愛燐「了解！」

そう言い明杏と愛燐は引き揚げた。

同時に明杏夏美を見て「夏美貴女シヤアマメイがいけないのよ？メイラン様の所に

「戻らず、ワカバ、なんかに居続けるんだもの。」と再度クスツと笑いその場を素早く

後にした。そして、夏美明杏にはれない様に明杏の靴裏に小型付き盗聴器と発信機が入った

ガムをくっ付けた。

と同時にワカバに居るライカに連絡して「・・・わ、私だ。今、広州の明杏と愛燐に遭遇。」

小型盗聴器付き発信機の入ったガムを明杏の靴裏に密かに付けた。

手が空いている者だったら誰でも良い悪いが・・・奴等を、追うよう、伝えてくれ。」

ライカ「了解した。って・・・相棒？どうした？息切れしているみたいだが・・・。」



と心配する。」

夏美「フツと笑い「な・・何。大丈夫だ。しっ、心配無用さ。相棒。」

ライカ「本当か？」

夏美「あ・・ああ。本当さ。」と続け様に「じゃ、そう言う事で頼む。」

ライカ「了解した。今・・丁度手が空いているのは雷外と雷龍そして雷明。」

大阪組「だが、誰に行かせる？」

夏美「・・大阪組は行かせるのがちょっと不味いだろう。李組で頼む。」

（因みに、雷外と雷龍と雷明は同じ苗字そして・・・似たような名前ですが・・・）

身内同士ではありません。雷龍と雷明は兄妹です。）

ライカ「了解した。」

夏美「じゃ・・・後で。」

そう言い携帯を切った。

すると、黒のポルシェが現れてジーンが助手席から急いで降りてきて

「夏美ッ！！」

そう言い急いで夏美の所に向かった。

第39章。夏美、広州の幹部と接触。そして……銃弾に襲われる。完。

第39章。夏美、広州の幹部と接触。そして……銃弾に襲われる。(後

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は、夏美とジンの兄貴様のやり取りを

主に書く予定で居ます。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

有理「……姉さん。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願ひします。」

**第40章。ジンと夏美。そして李組（前書き）**

おはようございます。

今章ではジンの兄貴様と夏美のやり取りが主になります。

#### 第40章。ジンと夏美。そして李組

あれから夏美は、タバコを買いにワカバのアジトを出て偶然にも広州の幹部の1人である

王明杏と遭遇し、そして・・・ミレイの事を聞き出そうとしたが夏美が答えなかった為

愛蘭の姉である広州のスナイパーである愛燐の銃弾を腹部に受けてしまう。

そして・・・ジン達が近づいている事に気づきその場からすばやく逃げる。

とすれ違いにジンの愛車である黒のポルシェ356Aが走って来て止まりジンが助手席から

勢い良く出て夏美の側に寄って来た。

ジン「夏美ッ！」

そして夏美を自分の腕の中に抱きしめ「・・・誰にやられた?!」

夏美腹部の傷を癒しながら「・・・広州の愛憐だよ。タバコを買いに行った時に偶然に

奴等と遭遇したのよ。」

と続け様に白のベンツが通りかかり夏美達の前で止まった。

そして「姉者!!」

雷龍が後部座席から出て来て「大丈夫ですか?!」

夏美フツと笑い「悪いね。心配かけて・・・まあ、何時ものアレ、やったから何とか」

大丈夫だが・・・。」と続け様に「ライカから聞いているな？」

雷龍頷き「はい。」と続け様に「これから雷外と雷明と共に奴等を追います。」

夏美も其れを聞いて頷き「・・・頼む。」

雷龍「ハッ！」そして、白ベンツに戻り「姉者！<sup>オウガ</sup>兄上様からのご伝言です。」

「しばらくの間夏美はアジトで待機せよ。との事です。」そして、ジンを見て

「ジン様。姉者の事宜しくお願いいたします。」



夏美再度フツと笑い「・・・了解した。」

其れを聞いたジンは頷いた。

そして、雷龍を乗せた白ベンツはそのまま明杏達の追跡に向かった。

と同時にジン「ウオツカ!」

ウオツカ「ヘイ。兄貴。」

ジン「お前も、広州の王明杏そして玲愛蘭の姉愛燐の奴の追跡をし  
ろっ!!」

と更に続けて夏美を見て「俺はこいつの愛車でこいつをワカバに送

る。」

ウォッカ「了解しやした！」

そして、ジンタバコに火を灯し「良いか？くれぐれも、逃がすんじやねえぜ？」

そして、見つけ次第俺に報告しろっ！そうしたら、俺がその後どうするか・・・

オウガの奴と相談して決めてやる。」

ウォッカ頷き黒のポルシェに乗り込みその場を後に先程の白ベンツを追った。

その後ジンは夏美を青のベンツの後部座席に乗せてから運転席に乗

り込んだ。

昔、ジンは一度夏美の車を運転していた事があり大体の事は把握していた。

ジン夏美を見て「出すぜ？」

夏美頷き「ええ。お願い。」

そう言いその駐車場を出てワカバのアジトに向かった。

そして・・・。

ジン。

王明杏、玲愛燐。

てめえら・・・俺の女にこんなことしやがって・・・今度会った時には

‘ 只じゃおかねえ ’ からな。覚悟しておけ！

そして、夏美は・・・。

後部座席に寝そべって明杏の去り際に残した言葉を思い出した。

夏美・・・貴女がいけないのよ？メイラン様の所に戻らずにワカバに居続けるから・・・。

夏美軽く舌打し小声で「私は、私の‘己の道’を突進んでいるだけ

だ。何が悪い。」

そして・・・。

第一、あの女は私を・・・

あの時・・・。

左肩に銃弾を浴びせ捨てたんだぞ？

なのに・・・。

何故？

今………。

クソッ！虫唾が走るぜ！！

と信号が赤になったと同時にジン夏美に「どうした？」

夏美フツと苦笑いをし「いいえ。只、くだらない、事。思い出して  
しまっただけよ。」

ジン「…そうか。」

と続け様に「ねえ、ジン。」

ジン「何だ？」

夏美「ジンをチラッと見て」「また、お願い聞いてくれる？」

ジン「前にも似たような事言ったが、お前の願いだったら、何でも聞いてやるぜ？」

とニヤリ。

夏美「有難う。」と続け様に「ねえ……。ワカバに着いたらさ。久しぶりに……」

私の側に居てくれない？」

ジンフツと笑い「ああ。構わねえぜ。」

夏美其れを聞いて再び「有難う。」

そしてジン再びフツと笑い信号が青になったと同時に同じ色である  
夏美の愛車のベンツを

走り出した。

第40章。ジンと夏美。そして李組。完。





第40章。ジンと夏美。そして李組（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は……。李組が広州の2人を追跡している所を書かせて頂く予定となっております。

ですので、次章は再び（前編と後編）に分かれて書かせて頂こうと思います。

それでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

雷外「李組……ってなっているけどよくよく考えて

見れば雷龍しか出て無いじゃんッ!」

雷明「まあまあ。次章は多分私等も出てくると

思いますよ。雷外さん。」

雷外「そっかな。この作者は、気まぐれ、だからな

。。。。」

雷龍「まあ、そつなる事を願うしかないだろう。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願い致します。」

**第41章。漆黒の闇、そしてワカバの李組。広州の王明杏と玲愛燐を追跡。**（前

今章では、ワカバの李組が……。ウォツカ達と共に

広州の明杏と愛燐を追跡しています。

此方は前編と後編に分けさせて頂きます。

第41章。漆黒の闇、そしてワカバの李組。広州の王明杏と玲愛燐を追跡。

(前

アレから夏美に、広州の女幹部である王明杏、玲愛燐を追跡するよ  
うに

言われたワカバの李組。

只今・・・雷外の愛車である白のベンツで追跡中。

勿論。後ろにはジンの命メイを受けたウォツカ達も黒のポルシェ356  
Aで追跡中。

雷外「・・・夏美の姉御。大丈夫かな？」

と心配する。

すると、雷龍「雷外。姉者の事が心配なのは俺達兄妹も同じだ。だ  
が・・・今は、

姉者のご命を遂行するまでだ。」

雷外、雷龍をチラッと見て「……………そうだな。」

そう言い白のベンツを走らせている。

そして、信号が赤になり白ベンツが止まった。

すると、雷明「ねえ！お2人共前々っ！！！」

雷明の指差すほうに何と明杏の愛車である赤のクラウンが止まっていた。

其れを見て雷外ニヤリと笑い「アレは・・赤のクラウン221Dだな。間違いねえ」

「奴の愛車だ。」と続け様に雷龍「あの様子だと、雷外。明杏の奴が後部座席に座っている」

「みたいだ。」

雷外頷きながら「ああ。となると運転しているのは、多分・・・・・」

622

雷龍も頷き返し「ああ。愛燐の奴で間違いないだろう。」

と続け様に雷龍黒の盗聴器を取り出し「聞こえました？ウオツカ様」

ウオツカ「ああ！ばつちり聞こえているぜ！雷外その赤のクラウン221Dがその王明杏の」

愛車なんだな？」

雷龍頷き「はい。」と続け様に「俺達はこのまま奴の愛車を追跡します！」

ウオツカ「了解した！んじゃ、俺達も引き続きお前達の車の後ろに付いて奴の愛車を

追跡し続けるぜ。」

雷龍「はい。お手数おかけいたしますが、どうぞ宜しくお願いいたします。」

そして通信を終える。

ベルモットタバコに火を灯し「で？その赤のクラウン221Dがそ  
うなのね？」



ウォッカ「へい。雷龍達はこれからも追跡し続けるとの事です。」

ベルモット「そう。」と続け様に「ウォッカ。くれぐれもあの車見失わないで頂戴。」

ウォッカニヤリと笑い「了解しやした！」

そう言い白ベンツの後を追いつつ赤のクラウンを追跡した。

第41章。漆黒の間、そしてワカバ李組。広州の幹部王明杏と玲愛  
燐を追跡。(前編)完。

第41章。漆黒の闇、そしてワカバの李組。広州の王明杏と玲愛燐を追跡。(前

今章もお付き合い下さり有難うございました。

さて、次章は今章の後編をお送り致したいと

思います。其れでは、次章も今章と同様に

お楽しみ頂ければ幸いです。

ほぼ毎回恒例のオマケ・・・。

明杏「まあたく！ワカバもしつこいわね。」

愛燐「・・・まったくね。」

コナン

あなた等の方がよっぽど、しつこい、と思うけどな

・・・(笑……)

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願いします!」

第42章。漆黒の闇、そしてワカバの李組。広州の王明杏と玲愛燐を追跡。

(後

今章では、前章の後編を書かせて頂きました。

第42章。漆黒の闇、そしてワカバの李組。広州の王明杏と玲愛燐を追跡。（後

アレから広州の幹部の明杏と愛燐を追跡しているワカバの李組。そして・・ウオツカ達。

だが、明杏は「気づいていた」。

明杏チラツと後ろを見てフツと笑い「・・アレは、白のベンツ321Cね。」

愛燐運転しながら「白のベンツ321Cって事は・・明杏姉さん。」

明杏タバコを取り出し火を灯しながら「ええ。きつと・・雷外の愛車だと思うわ。」

愛燐「あれ？ライフエイの弟の方？」と続け様に「前の米花港で私が狙撃しようとして

狙っていた『ターゲット標的』？」

明杏「そうよ。だけど・・・どうして私達を？まさか？」

明杏タバコを口に加えながら自分の靴の裏を見た。

明杏「！！！！」

こ・・・これは、まさか『盗聴器と発信器』？

でも・・・黒じゃないって事は・・・まさか？

シャアアメイ  
夏美が？！

と続け様に愛燐「明杏姉さんっ！」

明杏靴の裏に付いているガム付きの盗聴器と発信器を剥し「何？」

愛燐「雷外の愛車の後ろに黒の車も付いてきているよー！」

明杏「・・・黒の車？」

そう言いタバコを再度口に加え直しながら後ろを見て顔色を変えた。

あ……アレは黒の組織のウォッカとベルモット?!と言つ事は

あの車は、恐らくジンの愛車である黒のポルシェ356A!!

面倒な事になつたわ!!

と続け様に愛燐に「愛燐ツ!スピード上げて頂戴ツ!雷外の愛車の後ろに居る車は

黒のポルシェ356Aよ!!」

其れを聞いた愛燐「な?!りょ……了解ツ!」そう言いスピードを上げた。



其れを見た雷外軽く舌打をし「奴等め俺達が追跡しているのに気が付いたか！」

雷龍「いいや・・奴等は元々俺達が追跡していたのを気づいていたさ。雷外。」

と更に続けて「恐らく・・奴等がスピード上げた理由は俺達の後ろに居る

黒のポルシエ356Aに気が付いたのだろう。」

雷明其れを聞いて「そうか。だから・・スピードを。」

雷龍頷き「その通りだ。雷明。」と続け様に「雷外。多分、明杏の奴は姉者がお付けに

なられた盗聴器と発信器の存在に気づいた頃だろう。もし・・奴が潰してしまったら

追跡不可能になってしまう。何としても・・。」

雷外ニヤリと笑い「見失わないように頼む、そう言いたいんだろ  
う？相棒？」

雷龍再度頷いた。

雷外再びニヤリと笑い「了解！」

そう言いスピードを再び上げたと同時に黒のポルシェもスピードを再び上げた。

そして、雷外

せっかく、夏美の姉御が怪我をしてまで付けてくれたんだ。

そつみすみす逃がしやしねえぜ！！

そう呟いた。

第42章。漆黒の間、そしてワカバの李組。広州の王明杏と玲愛燐を追跡。（後編。）完。

第42章。漆黒の闇、そしてワカバの李組。広州の王明杏と玲愛燐を追跡。(後

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は、ワカバについて書かせて頂く予定と

なっております。

其れでは、次章も今章と同様にお付き合い下されば幸

いです。

オマケ。

雷外「奴等め！逃がしはしないよ！！」

雷明「そうね……。もし、逃がしたら……。」

雷外「……多分、姉御は兎も角……。」

ジンの兄をなぐり殺せねえと思っせ。」

雷明「・・・成る程ね。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお付き合いの程

お願い致します。」

**第43章。夏美からのメイランへの想いとワカバへの報告。（前書き）**

今章では、夏美自身のメイランへの想いが主になって

おります。

### 第43章。夏美からのメイランへの想いとワカバへの報告。

一方、夏美はジンに自分の愛車である青のベンツでワカバのアジトまで送ってもらい

自分の部屋のベッドの上で待機していながら、1枚の写真を見ていた。

それは、普段ごく一部の仲間にしは見せない切なげな表情だった。

夏美「……メイラン、姉さん。」と写真を見ながら呟いていた。

その写真は嘗てメイランが広州を設立する前に、某中華街に行った時に取った写真だった。

2人で仲良く肩を抱き合いながら微笑む2人。

あの頃は、とても楽しかったな。でも……どうして…？

「こっぴなってしまったの」??

教えてよ??メイラン姉さん。

夏美も嘗てメイランの事をミレイが雪音を想うと同様に心底敬愛し  
本当の「姉」として

見ていた。

だが……。



ある日を栄えに、それが崩れてしまった。

しかし、どうしてそうなったのかは・・・夏美自身にも正直分からない。

そして・・・自分を捨てて、父母を仲間を広州に殺されていくうちに・・・

夏美自身の中にも自然とメイランへの、憎しみ、が物凄く芽生えていった。

と同時に夏美自身もそれが影響で1度、闇に堕ちて、しまった時があった。

だが……1人の少女のおかげでその「闇から抜け出す事」が出来たが……。

案の定その少女も広州によって始末されてしまった。

理由は、広州にとって「危ない存在」だったからだ。

広州は、組織と似たようなもので自分達に「悪影響」を及ぼすものはすぐに「消し去る」。

そう言う奴等なのだ。

すると、夏美タバコに火を灯し頭をかきながら軽く舌打し「……く

だらねえな。」

と続け様に「どうして・・・こんなくだらない」事を思い出してしまつんだろつな。」

と己をあざ笑つた。

一方、ジンはオウガの部屋に行き先程の事を報告していた。

オウガ「成る程な。今の所夏美は問題ないか・・・。」

ジントバコに火を灯し「ああ。」と続け様に「広州の王明杏と玲愛  
燐の追跡はお前の所の

李組の他にもウオツカ達にも追跡させてある。」と更に続けて「もし、奴等突き止めたら

お前の所の李組かウオツカ達から連絡が入ってくるだろうよ。」

オウガ「そうか。」と続け様に「じゃ・・今はまだあいつ等の連絡待ちだな。」

ジン頷いた。

と同時に「じゃ・・とりあえず報告は以上だ。」そう言いオウガの部屋を出ようとした。

その時オウガ「ジン。」

ジンもう1回オウガに振り向き「何だ？」

オウガ「くれぐれも、夏美を頼む」。

それを聞いてジンニヤリと笑い「言われるまでもねえ。」そう言い軽く挨拶をし

オウガの部屋を出て夏美の部屋に向かった。

そして、オウガ別室に隠れていた服部達を呼んで「もう出てきて良  
いぞ。」

そう言い服部達が出て来た。

服部「ふ〜。しかし、まさかジンが来るとは思いも見なかったで。」

それを聞いてコナンも冷や汗かきながら「ああ。本当だな。」

と苦笑い。

すると、オウガ「コナン君。」

コナンオウガを見て「はい。」

オウガ苦笑いをし「くれぐれも、気をつける、多分ジンの奴、薄々勘付いているかも、」

しれねえぞ。」

コナン「……俺の事、についてですか？」

オウガ頷いた。

それを聞いたコナンは若干焦りだした。

それは服部も同じだった。

第43章。夏美からのメイランへの想いとワカバへの報告。完。



**第43章。夏美からのメイランへの想いとワカバへの報告。（後書き）**

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、此処でお詫びを前章ではジンの兄貴様と夏美のやり取りを書かせて頂くような事を予告してありまし

たが・・・報告話が先にネタとして上がってしまい

変更させて頂きました。尚、この予告はあくまでも

予定ですので不意にまた変わるかもしれない

その辺はその辺でご了承頂きたいと思います。

尚、次章では、その今章に書かせて頂く予定だった

ジンの兄貴様と夏美のやり取りを書かせて頂きたい

と思います。其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ

頂ければ幸いです。

オマケ。

コナン「この作者って本当に気まぐれすぎるよな。」

服部「ほんまやで。工藤。」

ジン「ん？お前今そのガキの事、工藤、と呼ばなかつ

たか？」

服部

ゲッ！！ジッ・・・ジンやないか？！

「い・・・いやあ。こいつがあまりにも工藤に似ている

からついな・・・あ、でもこのボウズはほんまに・・・

工藤とちやうで？遠い遠い親戚の奴や。」

ジンニヤリ」ほう・・・。」

コナン

や・・・やべえぞ！！ジンの奴・・・。。。

と続け様に子供らしい笑顔で「じ・・・次章も

どうぞ宜しくお願いします！」

N

コナン君っ！頑張れっ！（笑；）

**第44章。ジンと夏美久々の2人っきりの時間。（前書き）**

今章は、ジンの兄貴様と夏美のやり取りが主になります。

#### 第44章。ジンと夏美久々の2人っきりの時間。

アレから、ジンはオウガに夏美の事そして・・・広州の幹部の王明杏、玲愛燐の追跡の事について

てオウガに報告していた後に夏美の部屋に向かっていた。

そして、夏美の部屋に到着しドアをノックする。

夏美「はい。」

ジン「俺だ。入るぜ？」

そう言いジンは夏美の部屋入り夏美が居る寝室へと歩いていった。

其処にはベットに座っていた夏美の姿があった。

ジン、夏美に近づき「寝てなくて平気なのか？」

夏美頷き「・・・さつき車の中で横になっていたからね。寝られなくてさ。」

と苦笑いし、近くにあったテーブルの上にある灰皿にタバコを揉み消した。

ジンタバコの煙を出しながら「左肩の傷と太ももの傷・・・大丈夫か？」

夏美「ええ。アレしたから、平気。」と同時に「左肩は、ほぼ何時もの事だから、慣れてい

る。」

ジン「・・・そうか。」と続け様に「ん？」ベットの上にあった夏美とメイランの写真が

ある事に気づき拾った。

ジン「この写真は？」

それをジンから聞いた夏美はバチが悪そうな顔をして「ああ。それね・・・。」

「昔の」私じゃあと、「昔の」メイランだよ。とある日に中華街に行  
った時の写真だよ。」

と続け様にフツと笑い「もう・・・捨てた」か「どっか行っちゃ  
った」と思ったんだけど

ね。」

ジン「随分楽しそうだな。お前・・・メイランの奴を物凄く憎  
んでいたんじゃないかねえのか」

？」

夏美それを聞いて少し黙っていた。



ジンその様子を見てタバコを灰皿の上に揉み消しながら・・・

「・・・悪い事聞いちゃったか？」

夏美首を横に振り「別に・・・あの時は、メイランの事正直、憎んでいなかった」。

「あの時の私は本当に・・・メイランの事を・・・。ミレイが雪音を心底敬愛し

そして・・・『本当の姉』として慕っていたのよ。」と続け様にジ  
ンに近づきながら

「でも・・・何らかの理由で、その歯車が崩れたのね。『メイラン

は・・・広州を設立した。

私を捨ててまで。仕舞には、父さんと母さんまで・・・。」

と更に続けて「まあ・・・こんな事言うのもアレだけどワカバに留まった理由。」

あえて言うなら「復讐」かな。」と続け様に「こんな事本当は父さんと母さんも「望んじゃ」」

いないだろうけどね・・・性格からしてね。」

ジン「じゃ・・・何故？」

夏美「こつとも言えるわ。父さん、母さんが「遣り残した任務」と拳法の「宿命」

を受け継ぐ為とも。」

ジンフツと笑い夏美の右肩を持ち自分の所に抱き寄せ「成る程な。  
お前は、お前なりに

ワカバ（ここ）で、それなりに両親のぬくもり、や色んな事を感じ  
るようになったの

か。。。」

夏美「ええ。まあ。。。」

ジン更に続けて「だが・此れだけは、忘れるんじゃないぜ？」

夏美「何？」

夏美の髪を触りながらジンニヤリと笑い「お前の、居場所、は此処にもあるつつう事をな。」

夏美それを聞いて笑顔になり「・・ジン。」そう言いジンの腕の中に自分から入って行った。

ジンは夏美を抱きしめた。

それは久々に2人っきりの時間だった。

しかし、それは再び・・・夏美そして、ミレイに広州の魔の手が迫ってくる

前兆でもあったのだ。

第44章。ジンと夏美久々の2人っきりの時間。完。

第44章。ジンと夏美久々の2人っきりの時間。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は、再び広州の事について書かせて頂く  
予定です。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

ミレイ「・・・夏さん。」

ライカタバコに火を灯し只黙りそして・・・

「次章もどうぞ宜しくな。」

**第45章。 広州のある計画。 (前書き)**

今章は、主に広州が中心となります。



## 第45章。 広州のある計画。

此処は、杯戸町にある某ビル。此処は広州が所有していた。そのビルの中にアジトもある。

メイランの部屋では、とある「計画」について幹部達と共に話をしていた。

メイラン「今週の土曜に、杯戸シティホテルでね沙江島財閥が主催するパーティーが

あるのは皆知っていると思うんだけど・・・其処に我等「広州」の邪魔をする輩が居るの

その輩もそのパーティーに出席するみたいだから其処で「始末」するわ。」

すると、愛蘭が「失礼ですが・・・メイラン様そのパーティーの内容とそして・・・

その輩の名を覚えていただけませんか？」

其れを聞いたメイラン「ごめんなさいね。愛蘭。まだ、詳しい事は話していなかったようね。

そのパーティの内容は、沙江島財閥の娘である佳織カオリの武道制覇の祝いもかねた

パーティだそうよ。」

愛蘭「え？沙江島財閥の娘って・・・真理恵だったんじゃ？」

メイラン「ああ。その子はねその佳織の妹。その子には姉が居たのよ。」

愛蘭「成る程。」と同時に「それで？その我等の今回の『標的』ターゲットは？」

メイラン「酒川真紀さかがわまきの乃とそして・・・前川カノンの姉である・・・」

花梨かりん「この2人よ。」

そして、ワカバの李組とウオツカ達の追跡をなんらく巻いた（思い込む）明杏と愛燐がいつの

間にか戻って来て・・・。

明杏フツと笑い「成る程・・・この2人は以前我等の『ある取引を邪魔した』女達で・・・」

「一応警察やワカバにも、顔が、利く。そう言った意味で我等の、脅威、になる・・・。」

「そう言う事ですか？メイラン様？」

メイランクスと笑い、「ご名答、よ。明杏。」と続け様に「だけどね・・・この花梨は

「一応、警視庁の狙撃部隊に配属されていたみたいだから、ちょっと厄介者、よ。」

と続け様に「明杏。」

明杏「はい。」

メイラン「赤龍は？アレからどうなっているの？」

明杏「いえ……。それが、どうやら、行方をくらましているそう  
で……………」

其れを聞いたメイラン「そう。」と続け様に「それで？私の‘妹’  
は？」

明杏「…未だに‘ワカバ’側に付いています。どうやら…あの  
‘様子’だと

我々に‘付くつもり’など…なさそうです。」

メイランフウとため息を付き「あの子もあの子で‘頑固ね’。」

と続け様に「まあ・・・そのうちあの子から再び、私に会いに来てくれるでしょう。」

と更に続けて「では、皆・・・今週の土曜13日にね。」

一同「ハッ！メイラン様ッ！」

メイラン「ご苦労様。では・・・一先ず解散。」

そして、それぞれ自分の部屋に戻って行こうとした時に「ああ・・・言い忘れていたわ。」

愛憐「」

愛憐「はい。」

メイラン「<sup>ターゲット</sup>標的」は夜7時頃顔出す予定よ。そして・・・しばらくして

多分映像公開があると思うからその時に明かりは一時消灯すると思うからその時に

「宜しくね」。

愛燐一礼をし「畏まりました、我が主。」

そう言い自分の部屋に戻って行った。

一方、広州のアジト周辺では、先程明杏達を追跡していたワカバの李組とウォツカ達が

密かに待機していてその計画を「盗聴し、何と「録音」していた。

雷外ニヤリと笑い「残念だったな、広州の面子ども・お前等の会話は悪いが

「ちゃあんと、録音させてもらったぜ。」

其れを聞いて雷明「奴等が、気が抜けた、証拠ですね。雷外さん。」

雷外頷き「ああ。そうだな。雷明。」と続け様に後部座席に顔を向け「どうするよ？」

雷龍。

雷龍腕を組みながら「そうだな。一先ず、兄上様オウガにご報告だな。」



と続け様にウオツカから「で？此れからどうするよ？これ以上、長居は無用、だぜ？」

雷龍「そうですね。まあ・・・一先ず、任務完了、という事でワカバに戻りますか。」

と続け様に「ウオツカ様方はいかがなさいます？」

ウオツカ「兄貴をお迎えと報告しなきゃいけないからな・・・俺達もまた着いていかせて

もらっぜ。」

雷龍「分かりました。」と続け様に「それでは・・・また後程。」

ウオツカ「おう。」

そして、雷外に「ばれないように・・・出してくれ、出来るか？」

雷外「了解。」

そう言い無音運転でその場をすばやく後にしワカバに戻った。

第45章。 広州のある計画。 完。

#### 第45章。 広州のある計画。 (後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は、ワカバについて書かせて頂く予定で  
す。それでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

雷外「広州の面子気が緩んだな。」ニヤリ。

雷龍フツと笑い「その様だ。上手く行けば・

この計画つぶせるかもな。」と続け様に

「次章もどうぞ宜しくお願い致します。」

**第46章。ワカバのアジト再びと報告。 (前書き)**

今章は、ワカバです。

何時もより若干？長めなきが致しますが・・・

最後までお付き合い下されば幸いです。

## 第46章。ワカバのアジト再びと報告。

アレから、広州の追跡を終えた。李組とウォッカ達はワカバのアジトに戻り、先程録音してい

た。広州のメイラン達の会話をオウガに聞かせて報告をしていた。

オウガ、その録音したテープを最後まで聞き止めて「・・・成る程な。その、沙江島財閥の

パーティーで奴等その客2名を、暗殺、すると言つ訳か。」

雷外「はい。ボス。」

すると、ジンもオウガの部屋に再び入ってきた。

ウォッカジンに気づき「兄貴。お疲れ様です。」と一礼。

ジン「おう。この度はご苦勞だったな。ウォッカ、それにベルモット。」

ベルモットクスと笑い「ありがとう。でも私は、大して何もやっていないわ。ジン。」

ジンタバコに火を灯し「そうか。」と続け様に「で？奴等は？」

ウォッカニヤリと笑い「勿論。ちゃんと最後まで雷外達と追跡しやしたぜ。」

と続けて「そして、奴等のアジトまでいきやした。」

ベルモット「そうしたら、奴等、面白い事、言っていたわよ。」

ジンタバコ吸いながら「面白い事、だと？」

ベルモット「ええ。」と続け様に雷外を見て「雷外。ジンにも先程オウガに聞かせた

‘ 奴等の会話 ’ の録音テープ聞かせてあげてくれる？」

雷外頷き「分かりました。」と続け様に「ジンの兄さん。申し訳ありませんが前の方へ。」

ジン「ああ。」そして、テープがあるオウガのデスクの所に行き「再生してくれ。」

雷外領きテープを再生する。

そして、広州のメイラン達の会話が流れた。

其れを聞いてジンニヤリと笑い「成る程な。だから、こいつ等ミレイを。」

雷外テープを止めて巻き戻しながら「はい。」と続け様にオウガを見て

「ボス。どうします?。」



オウガ腕を組みながら「そうだな。今週の土曜日にそのパーティに客として此方からも」

何名か行かせるか。」と続け様に「あの、パーティは基本的に、出入り自由、だと」

聞いたからな。」

すると、雷明「ミレイ様もそのパーティに行かれるのでしょうか？」

オウガ「多分。行くと思うな。沙江島財閥の次女とミレイは大学の友達だからな。」

其れを聞いてジン再びニヤリと笑い「ほう。だったら・・・そのパーティに行けばあいつに、会

える、しれねえって訳か。」

オウガフツと笑い「・・・かもな。」

すると、ノック音がしてオウガ「入れ。」

「失礼します。」

すると、夏美が入って来た。

オウガ夏美を見て「夏美。動いても大丈夫なのか？」

夏美頷き「ええ。もう、平気です。ご心配をお掛けしました。兄様<sup>あに</sup>。

」

とオウガに一礼する。

オウガ「いや……。兎に角、お前が、無事で何より、だ。」

と続け様に「夏美。お前に1つ聞きたい。」

夏美「・・・何でしょう?。」

オウガ「お前、もしかして・・・今週の土曜のパーティに客として進入しよう」と

考えていなかったか？」

其れを聞いて夏美黙った。

オウガ再びフツと笑い「黙っていると言う事は、凶星、だな。」と  
続け様に「・・・だが、

お前には悪いが今回は、駄目だ。」と更に続けて「お前は、奴等に狙撃、された

ばかり・・・今回は、大人しく、した方が良い。良いな？」

其れを聞いた夏美は若干納得していない顔で「・・・分かりました。」

と続け様に「失礼しました。」

そう言い自分の部屋へと戻って行った。

雷外その様子を見て頭をかき心の中で・・・。

ありゃあ、夏美の姉御・・・納得してねえ、な。

と呟いた。

ジンその夏美の様子を見てタバコをオウガのデスクにある灰皿に消しそして再び新しいタバコ

に火を灯し「あの様子だと、あいつ、納得してねえ、みてえだな。」

オウガため息を付き「仕方あるまい？今回は、あいつへの『狙撃』があつたからな・・・。

無理に行かせる訳にも行かんだろう。」そう言い夏美の様子がアレから気になったのか・・・

モニターで夏美の部屋の様子を見た。

ワカバでは、団員の様子を常に見れるようになってる。

体調等を確認する為だ。

雷外を始め、ウォツカ達がオウガのデスクにあるモニターに集まる。

そして、夏美の部屋が映し出された。

夏美は携帯で話をしていた。

雷龍「この様子だと。姉者誰かとお話されているようですね。」

オウガ「ああ。」

すると、夏美の声も入って来て「ああ。悪いが・・・今週の土曜のパ  
ーティ行けそうにないんだ

」。

すると女の声で「え？どうしてよ？夏？」

その声は沙江島真理恵の姉佳織からだった。

夏美苦笑いをし「いやね……。どうも「予想外」の事が起きちゃってさ……。」

佳織「予想外」？って……あんた？まさか……その対立している  
広州って組織の

メンバーとやりあったとか？？」

夏美驚いた顔で「何で分かったの？？」



佳織ため息を付きゝそんな位。言わなくても、大体分かるわよ。あ  
んと付き合いは

‘本家の頃、からだからね。’

夏美其れを聞いて苦笑いをしゝハハ。大体そんな所。’

佳織ゝそんなで・・あんたん所のボスにどうせ、大人しくしてろ、と  
言われたんでしょ？’

夏美ゝ・・ご名答。’

佳織ゝんで？怪我は？’

夏美ゝ左肩、左太ももかな？撃たれたよ。’

佳織驚いて「うっ・・撃たれたですって？あんだ、大丈夫なの？！」

夏美フツと笑いながらタバコに火を灯し「ああ。何時もの『アレ』  
やったから。」

何とか大丈夫さ。ヾ

佳織「そう。なら良いけど・・。ヾと続け様に「でも、本音で言う  
とあなたには

「来て貰いたかったな。」ヾ

夏美タバコ吸いながら苦笑いをし「仕方あんめ？兄様のご命令は基  
本的には『絶対』

大人しくしてろって言われたら大人しくしているしかないんだからさ。」

佳織其れを聞いて「でも・・あなたの『性格上』大人しくしている様には思えない

んだけど??」と笑いながら言った。

夏美「・・・おいおい汗」

と心の中で

チエ。当たってやがんの・・。

と呟いた。

すると佳織茶化しながら、でも、残念だな。あんたの好物の  
「フカヒレ」せつかく用意し

たのにな。。。  
」

夏美「んなあ?!」  
」

ま・・・マジかよ。

くそ!!

愛憐の奴め・・・余計な事を!!

と心の中で悔しがっていた。

佳織まるで何かを思いついたのかへねえ・・・あんたさ妹いたわよね  
？  
〜

夏美我に戻りへん？ああ。いるよ。有理。  
〜

と続け様にへって？お前さんまさか？  
〜

佳織へうん。そのまさか。有理ちゃん招きたいんだけど・・・うちの  
妹も何故か分からない

けど・・・会いたがっているし・・・。ね？お願いよ？夏。  
〜

夏美「悪いが・・・1人では行かせんぞ？」

佳織「もつゝ相変わらず、過保護、なんだから。」

と笑った。

夏美「ほつとけ！」と続け様に「有理の予定もあるからな・・・もし、何も無かったら

多分行かせる。」

佳織「え〜。多分？？」

夏美再びタバコを口に加え直して「しゃ〜ねえべ？私しやあが行けないんだから・・・

念の為誰かと一緒に行かせないと・・・心配なんだから。」

其れを聞いた花梨「ねえ・・・夏。」

夏美「はいよ。」

佳織「ひよつとして・・・うちのパーティーあんたん所の対立している  
広州の組織のメンバーが」

客にまぎれる可能性があるって事??だから、有理ちゃんを1人で  
行かせないって・・・。」

夏美其れを聞いて一瞬驚いたがすぐに何事も無かったかの様な顔を  
してフツと笑い

「大丈夫さ。お前さんは、気にしなくて良いよ。」

佳織「本当に？」

夏美「ああ。〜と続け様に、他には、誰が来る予定??」

佳織「ん？他に??妹の大学の友達が何人か来る予定だけど。。」

695

夏美「名前分かるか??」

佳織独自の仮の客リストを上げ「んとね。。前川カノンちゃん。龍崎ミレイちゃん。」

後は。。。これは学科違いだけど、田川美紀ちゃん。この3人かしら。。」



夏美

み・・・ミレイの奴も行くのか??

ミレイまで行くと・・・『奴等』に見つかる可能性大と・・・

下手すれば・・・ジン達とも・・・。

すると、佳織「夏??どうしたの??」

夏美再び我に戻り「ああ。すまん。で?学科違いの子も来るって言うていたが・・・

その子は何学科？？  
}

佳織「それが・・・私にも分からないのよ。只・・・真理恵の小さい頃のお友達って

事で。  
}

夏美「・・・成る程な。  
}

佳織「じゃ・・・夏。そう言う事で有理ちゃんに聞いておいてね。  
}

夏美「ん？ああ。一応言っておく。  
}

佳織「じゃ・・・私取り合えずこれから今週の土曜のパーティの杯戸シテイホテルに

下見行つて来るから。ヾ

夏美「了解。じゃ・・・また。ヾ

佳織「うん。またね。ヾ

そう言い携帯を切つてタバコを灰皿に消しベットに横たわった。

と同時にドアについでるカメラを見て音がした為苦笑いをし「あれ  
じゃ・・・

兄様に見られているな。」と言った。

と同時に。

ん???

待てよ???

今・・・ジン兄様の部屋にいるのよね？

下手すれば・・・今の私と佳織の会話が筒抜けに???

そうだったら・・・

ある意味・・・やばいわね。

と呟いていた。

第46章。ワカバのアジト再びと報告。完。

**第46章。ワカバのアジト再びと報告。（後書き）**

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章も、ワカバについて書かせて頂く予定です。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

夏美「・・・はあ。何かある意味やばい？事に  
なってきたな。」

と続け様に微笑んで「次章もどうぞ宜しく！」

**第47章。ワカバでの夏美と有理の会話。（前書き）**

今章では、橘姉妹の会話が主になります。

今章も何時もより長めだと思えますのでその辺も

ご了承頂きたいと思えます。

## 第47章。ワカバでの夏美と有理の会話。

アレから、佳織との会話を終えた夏美は橘家本家から有理を自分の部屋に呼び出し、杯戸シテ

イホテルで13日土曜に行われる沙江島財閥のパーティの事を話した。

有理「へえ〜。佳織さんがね。」

夏美再びタバコに火を灯し「ああ。そうだ。あいつの妹がお前に会いたいんだとさ。」

有理「そっか。でも、真理恵さんには前に何かしらお世話になったから・・・

もし、会える機会があれば会いたかった所。」



夏美タバコ吸いながら「そうか。」と続け様に「でも、1人では行かせられんぞ?」

其れを聞いた有理笑いながら「・・・姉さんならそう言つと思つた。」

と続け様に「何なら、姉さんと一緒って言つのは???」

夏美苦笑いをして「それがさ・・・悪いけど、出来んのさ。」

有理「え?どうして??」

夏美「兄様に今回は、大人しくしている、って言われたから・・・。」

有理「お兄様に??なら、しょうがないね。」と続け様に「じゃ・  
・誰と行けば良いの

???.」

夏美腕を組みながら困った顔で「そうだな。誰が良いか・・。」

すると、夏美の部屋のノック音がした。

夏美「はい。」

すると男の声で「夏美?俺だ。ライフエイだ。入って良いか??」

夏美「ああ。ライフエイか。良いよ。」

そして、ライフエイが入って来た。

と続け様にライフエイ「夏美、13日の土曜。俺で良ければ有理に付き添って行ってやるうか

？俺、その日多分オフだったと思うからさ。」

夏美「あ……。本当に？じゃ、お願いしようかな。」

と続け様に有理を見て「有理。ライフエイが付いてくれるみたいだ  
けど・・・」

良いかな？」

有理頷き「うん。良いよ。」と続け様にライフエイを見て「じゃ・・・  
ライフエイ兄さん。」

お願いしてもらっても良いかな??？」

ライフエイ「ああ。構わないさ。」と続け様に「その前に一応念の  
為、スケジュール確認」

してくるな。」そう言い一先ず自分の部屋に戻った。

有理「じゃ・・私、ライフエイ兄さん所行ってくる。」

夏美頷き「ああ。気をつけてな。」

そう言い有理は夏美の部屋を後にし、ライフエイの部屋に向かった。

そして、夏美携帯を取り出し電話をかけた。

第47章。ワカバでの夏美と有理の会話。完。

第47章。ワカバでの夏美と有理の会話。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

次章は、夏美とその電話相手について書かせて頂く

予定です。では、次章も今章同様にお楽しみ

頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「……………早く出てよ。笑……………」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく!」

## 第48章。夏美の電話の相手。（前書き）

おはようございます。

今章では、夏美とコナンのやり取りが主になります。

後、ジャンル違いで大変に申し訳ありませんが・・・

ライチュウも出させていただいております。

（作者が好きなもので苦笑……と同時にこのライチュ

ウは人間の言葉を話します。）もし、このキャラの

出演が嫌いな方がいらっしやいましたら恐れ入ります

が、この章（多分他にも出てくる可能性も？）は・・・

御覧にならない方が宜しいか

と・・・。

尚・・・事前に申して置きますが、此れは

コナンの小説です。基本的にジャンル違いのキャラ

は此れだけとなります。



#### 第48章。夏美の電話の相手。

アレから有理を見送った夏美は携帯で誰かに電話をかけていた。

「もしもし。江戸川ですけど……。」「相手はコナンだった。

夏美タバコ吸いながら「ああ。コナンか？私じゃあだよ。夏美。」

コナン「あ・・・夏美姉ちゃん？どうしたの??？」

とコナンはワカバに居る事を何となく悟ってそして、恐らくジン達も居るだろう

と思いつつも何事も無き様に子供らしく振舞う。

夏美心の中で笑いながら……。

こいつ本当に、アレだな……子供のフリ上手いな。と呟いた。

と同時に「なあ……。唐突で悪いんだが……。お前さん、今何処に居る???」

コナン「え？今？」「何時も屯たむろしている場所だよ。」

其れを聞いて夏美「そうか。」と更に続けて「唐突で悪いんだが、今からちよいと

「会えねえか？」

コナン「今からっ？？良いよ。どうしたの？」

夏美「ああ。ちよいとな。」と続け様に「此処では悪いが・・・話  
せない」んだ。

今から、そっちに向かうよ。」

コナン其れを聞いて心の中で・・・。

その様子だと多分、奴等、居るな。と悟った。

そして、「うん。良いよ。じゃ・・・後で、来てくれる、??」

夏美「OK。今行くよ。」と続け様に「じゃ・・・また後で。」

そう言い電源を切ってそして、「ライチュウ。」

すると、一匹の茶色いねずみが現れて「はい。夏美様。」

夏美「ちよいと悪いが、此れから人に会ってに会ってくるから、留  
守番、頼むよ。」

もし、ライフエイと有理が此処に戻ったら、人に会いに行った」と  
伝えてくれ。」

ライチユウ「分かりました。夏美様。」と言った後ふと我に戻り慌  
てて

「っちよ、な・・・夏美様?!良いんですか??広州の奴に撃たれ  
たそうじゃないですか

?!それでもって、お兄様オウガに大人しくするように言われたのでしょ  
う?!!」

夏美笑いながらタバコを灰皿の上で消し「大丈夫だろう?少し出て  
?それに其れは、あのパー

テイ'に限つての事だろうし・・・それに、ちよいと此れ、大事な話'だからね。此処では

「話せないんだ。」

ライチュウ其れを聞いてキョトンとした顔で「どうしてです???」

すると、夏美しゃがんで小声で「今、彼が'居るからさ。下手に話せない'んだよ。」

と苦笑い。

ライチュウもまるで納得したかの様に「ああ。成る程。」と小声で返した。

そして、夏美立ち上がり出かける支度して事前にテーブルの上に用意してあった

愛車の鍵を持ち「んじゃま！そう言う事で！宜しく！」

ライチュウ「はい！了解です！」

そう言い夏美を見送った。

と同時にライチュウ心の中で

夏美様が、広州と再び遭遇しませんように……。

と祈っていた。

と同時に夏美の部屋の窓を見て「あ……。」

黒のシボレーが止まっている事に気づく。

ライチュウ窓から降りて引き笑いしながら



「あれ・・・多分、あの男<sup>かた</sup>の愛車だな。」

と続け様に「どうして・・・此処に居るのよ。」

と呆れ笑いしていた。

と同時にきつと・・・お兄様<sup>オウガ</sup>方も御覧になられているはず・・・。

此れが分かったら戻り次第、多分・・・夏美様、どやされる、んだろ  
うなあ・・・。

そして、ため息を付いた。

第48章。夏美の電話の相手。完。

#### 第48章。夏美の電話の相手。（後書き）

今章もお付き合ひ下さり有難うございます。

さて、次章は、夏美が再び、あの場所’に行く事と

また、再びワカバ編について書かせて頂きたい

と思います。

オマケ・・・。

ライチユウハアとため息付き「まったく・・・

私のご主人様は色々と無茶ばかりされるんだか

ら・・・。」と続け様に「あ・・・皆様。突然の

登場で大変に失礼致します。私、ジャンル違いですが

夏美様にお見えさせて頂いております。ライチユウと

申します。何で？人間の言葉話せるのかって??

そ・其れは、自分にも分からないのです（笑……）」

と続け様に「其れでは次章もどうぞ宜しく

お願い致します。」

**第49章。夏美、阿笠家再びワカバ。（前書き）**

今章では、夏美が再び阿笠家に登場してきます。

主にコナン達とのやり取りになります。

何時もより若干長丁場になりそうですが

お付き合い頂ければ幸いです。

後・・・ワカバも再び出てきますが、何かある意味？

大変な事？になっています（笑；）

## 第49章。夏美、阿笠家再びワカバ。

アレから、ワカバでのコナンとの会話を終えた夏美は愛車である青のベンツに乗り

米花町にある阿笠家に再び向かいそして、着き入っていった。

すると、哀が入ってきて「こんにちわ。夏美さん。」

夏美、哀を見て軽く挨拶をし「や！哀ちゃん。」と続け様に「あり？コナンは？」

哀リビングにあるソファーを見て「あっちに座ってるわ。」

夏美「ああ。有難う。」と続け様に「そう言えば博士は??」

哀「博士なら。今頃多分買い物に東都デパートに行っている頃でしょうね。」

夏美「そうか。」とコナンに近寄り「よう!」

コナン「おう!来たか!待ってたぜ?。」

と続け様に「アレから、何かあったのか?」

夏美「ああ。取り合えず、広州には何らかの動きがあった見たいだ。」

そう言いコナンの目の前に座る。

そして、哀台所から麦茶を3つ用意し「はい。江戸川君。夏美さん。」

コナン「サンキュー！。灰原。」

夏美「有難う。」そう言い哀から麦茶を受け取り飲み始めた。

すると、コナン「んで????」広州の動き、を何で俺等に??」



コナンは疑問を持つ。

夏美「ミレイの奴が相変わらず、奴等に狙われているからだ。お前さん達も私等に

関わった以上、ほっておく訳にもいかないだろう?」

コナン我に戻り「ああ。そうか。」と続け様に「しかも・・・ジンの奴もあいつを連れ戻そうと

必死みてえだしな。」

哀も麦茶飲みながら「・・・成る程? 広州を一先ず阻止した後・・・  
彼等」と言う訳ね。」

夏美「ああ。」と続け様に「ちよいと失礼。」そう言いつつものにタバコに火を灯し

ながら、「これは、私が偶然にも広州の仲間遭遇しそして、私が盗聴器と発信器をその

仲間の1人にばれない様につけそしてうちん所の連中に追跡させたんだが・・・。

この後「面白い事」が分かったみたいだ。」

哀「面白い事」？」

夏美タバコを吸いながら「ああ。『広州の奴等』は今週の13日の土曜に杯戸シティホテルの

沙江島財閥が主催するパーティーに客として紛れパーティー客2名を暗

殺する予定だ。」

コナン「其れを聞いて「何ッ?!其れ本当か?!」

夏美「頷き」ああ。」

哀「で?その情報何処で?」

夏美「うちの弟分がその会話を録音していたんだよ。其れを私しや  
あも兄様の部屋のドア越し

から聞いていたのさ。」

コナン「んで?」  
ターゲット「標的」は?」

夏美携帯灰皿を用意しながら灰を落とし「多分、女2人だったじゃないか？」

1人は、酒川真紀乃で・・・もう1人は、前川花梨だったか。」

哀「ねえ・・・その酒川真紀乃って・・・あのテレビ女優？」

夏美タバコ再び口に加え直し「ああ。でもまあ・・・ごく一部の人しか知られていない

見たいだからそんなに有名ではないらしいが・・・因みに、前川花梨はミレイの奴の

大学の友達である前川カノンの実の姉。」

コナン「あの・・沙江島財閥と同様に有名な前川財閥の娘だろ？」

夏美頷き「ご名答。」

哀「でも・・何故彼女等が広州の‘標的’にされなければならないのかしら??」

夏美「さあ・・その辺は、私しゃあも詳しくは知らんが、この2人を‘標的’にした

って事は・・広州の連中にとって‘邪魔な存在’と言う事は確かだよ。」

と続け様に「後、このパーティは参加自由ならしい。そんで・・此れ主催する沙江島財閥の

長女である佳織と話しをしてね。ミレイも一応呼んだらいい。」

コナン哀其れを聞いて驚いた。

そして、コナン「じゃ……もしかして?」

夏美「ああ。下手すれば……広州の面子おろか……ジンとも  
再会してしまうかも

しれねえって事だよ。」

其れを聞いた哀は只黙っていた。

そして、外ではいつの間にかワカバに止めてあったはずの黒のシボレーが止まっっていて

その黒のシボレーの持ち主である。赤井がいつの間にか盗聴器を仕掛けていたのか・

イヤホンで夏美達の会話を聞いていた。

一方、此処は再びワカバ。

アレから、夏美を見送ったライチュウはオウガに呼ばれてオウガの部屋に居た。

そしたら、案の定、ジン達も居た。

オウガライチユウの話聞いて「成る程な。」と続け様に「でも、何で此処に呼ばないん

だ？」

ライチユウ「い・・いや。その・・夏美様の事だから多分、気晴らしでしょう。」

ごまかしながら笑顔で言った。

オウガ「そうか。」と続け様に「まあ・・あいつの事だ多分そうだろうな。」

と返した。



すると、ライチュウ「で・・・では、お、お兄様私は此れで。」

そう言いオウガに一礼し夏美の部屋に戻ろうとしたその時ジンに

「おい。」

ライチュウ、ジンに声を掛けられて急に背筋が伸び恐る恐る後ろを振り向き

ニコリと笑いながら「はい。何でございましょう？ジン様。」

すると、ジン、ライチュウの前に来てしゃがんでニヤリと笑い「本当に、それだけか？」

ライチュウ心の中で・・・。

ヤ・・・ヤバイよ？ジン様「疑っているよ」。

でも・・・何とか「押し通さなきゃ」。

ライチュウ「も・・・勿論ですよ。ジン様。」

と続け様に「わ・・・私の主人は本当に「気まぐれの方」でして・・・」

ジン「ほう。そうか。ほぼあいつあの小さな探偵のガキとつるんで

いるそうだが・・・？」

ライチユウ「まあ・・・色々とありまして・・・。」

と続け様に「ちょ・・・ちょっと、私も、野暮用、を思い出したので  
これにて

失礼！！」そう言い今度こそオウガの部屋を後にしようとしたその  
時ジンにヒョイと持ち上げ

られタバコに火を灯しながら再びニヤリと笑い「お〜と！逃がさね  
えぜ？

多分その様子だと、あの小さな探偵のガキには必ず、裏がありそう  
だからな、あ。

そいつを吐いてもらうつまで悪いが・・・此処に居てもらうつぜ？ライチ  
ユウ。」

ライチユウ其れを聞いて引きつり笑いをし心の中で・・・。

な・・・夏美様あは・・・早く帰ってきてくださいよお！

私1人ではこの方を騙し通すには無理があつた様ですく！。

と叫んでいた。

第49章。夏美、阿笠家再びワカバ。完。



**第49章。夏美、阿笠家再びワカバ。（後書き）**

今章もお付き合ひ下さり有難うございます。

さて、次章は、取り合えず夏美がワカバに戻り、

そして・・・土曜のパーティの事について書かせていた

だきたいと思います。次章とその次の章では恐らく

また長丁場になると思われまますので・・・

前編と後編に分けさせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

夏美「・・・ライチュウの奴大丈夫かな？」

と続け様に「次章もどろぞ宜しく！」

第50章。夏美、ワカバに戻る。そして……沙江島財閥のパーティ前日（前

今章は、再びワカバそして杯戸シティホテルで行われ

る沙江島財閥のパーティの前日として書かせていただ

きました。此方は前編、後編と分けさせて頂きます。

この章は主にワカバ中心となっております。



第50章。夏美、ワカバに戻る。そして……沙江島財閥のパーティ前日（前

此処は、再びワカバのオウガの部屋。

ライチュウは、ジンに捕まれ若干冷や汗をかいていた。

ウオツカ其れを見てニヤリと笑い「どうしたんです？ライさん？顔に冷や汗かいてますぜ？」

ライチュウ笑いながらウオツカに「い……いやあ……私は汗っかきなもので……」

と何とかしてはぐらかそうとする。

と同時に心の中で密かに主人である夏美の帰りを心待ちにしていた。

すると、ベルモットがクスと笑いジンに「ねえ・・・ジン。あまりその子、苛めないで、」

くれるかしら？ほら怯えてしまってるでしょ？」

ジンタバコ吸いながらニヤリと笑い「別に、苛めちゃいねえぜ？俺は只夏美の変わりに

こいつを可愛がってやっているだけだぜ？」そしてライチユウを見ながら

「なあ・・・？ライチユウ？」

ライチユウ「は・・・はい。」

と同時にジン「そろそろ・・・あのガキ」について吐いてくれねえか？」

ライチュウ「あ・・・あのガキ」って??？」

ジン再びニヤリと笑い「江戸川コナンについてだよ。」

ライチュウ其れを聞いて必死に隠そうと「な・・・何を言っているんです???ジン様。」

か、彼は「・・・」く「普通の小学生」ですよ?。」

ジン再びニヤリと笑い「ほづ。そうか。」

ライチユウ。

ヤツ・・・ヤバイよ!!

ジン様本当に疑っているよ？

ん・・・んんんん。

もう・・・押し切れない。

すると関西弁で「良いや。そいつの言ってる事は本当の事やで?」

すると、全員その男の所に目をやった。

オウガ「平次君。」

其処には服部がいた。

服部「すんまへんな。オウガハン。勝手に邪魔してしもつて。」

オウガ微笑んで「何。構わないさ。」

そして、服部、ジンに近づき「あのボウズはな・・・工藤の遠い遠い  
遠い親戚やねん。」

似てても当たり前やがな。」と続け様に「だから・・・そいつ離して  
やってくれへん？」

ジン最初に服部をじっと見ていたがフツと笑い「良いだろう。」と  
続け様に

「しかし、西の探偵。俺はまだ、あのガキの事を只の『小学生』と  
は完全に信じちゃいねえ

んだぜ？此れだけ言うておくぜ？」とタバコ吸いながら再びニヤリ  
と笑った。

服部、ジンからライチュウを受け取り「おおきに。」と続け様に「オウガハン。」

オウガ「何だ？」

服部「明日の土曜杯戸シティホテルで行われる沙江島財閥のパーティー俺も

行ってええかな？」

オウガ「ああ。構わんど。」と続け様に「頼むから、夏美は、大人しくさせておいてく

れ。」

服部其れを聞いて「まあ……一応釘さしておくわ。」と微笑んだ。

一方、偶然に其処に居たりヤン兄弟が「ねえ。シュウワイ兄さん。」

シュウワイ「何だ？シュウチエン。」

シュウチエン「なっさんの、性格からして、大人しくしていると思  
う??？」

其れを聞いてシュウワイ腕組みながら「うん。無理じゃねえ？なっねえ夏姉

は亡きお父さんに性格が似ているから・・広州の面子絡みになると・  
・・・。」

すると「大丈夫だよ。今回ばかりは、大人しくしているからよ。」



その声の主に皆一斉に振り向いた。

すると、ライチユウの顔が一斉に明るくなり「夏美様~~~~~」  
~~~~~  
「~~~~~！」

と服部から離れ勢い良く夏美の所に向かった。

すると、夏美ライチユウを抱え自分の右肩に乗せ右手で頭を軽くポンと叩き

「よう。相棒。」「ご苦労さん。」

ライチユウ「お帰りなさい。」

夏美「おう。只今。」

シュウチェン「な・・なっさん？何時帰ってたの？？」

夏美笑いながらシュウチェンを見て「っいさっきだ」。

シュウワイ「んで？コナン君と阿笠さん所で何話したんで？」

夏美フツと笑い「何・・単なる、普通の話だよ。シュウワイ。」

シウウワイ其れを聞いて笑いながら更に突っ込み「本当に？そんな  
けっすか？夏姉？」

夏美笑い換えして「何言っているんだ？本当にそんだけだよ？シ  
ウワイ。」

と続け様にライチユウを見て「さて、そろそろ部屋に戻るか？相棒  
？」

ライチユウ頷いた。

と同時に服部を見て「平さんもし宜しければ来ます？」

服部「ああ。お言葉に甘えさせてもろって行かせて貰おうか。」

と続け様にオウガ「夏美。」

夏美「はい。何でしょう？<sup>あに</sup>兄様？」

オウガ「お前を疑っている訳ではないんだが、お前・・・明日の土曜

、本当に大人しく、してくれるよな？」

夏美フツと笑い「そんな、大丈夫ですよ。ご心配なさらなくて  
も。」

と続け様に「それでは、我々は一先ず此れで。」

そう言いオウガに一礼しオウガの部屋を後にし自分の部屋に戻って行った。

一方廊下ではライカがタバコを吸いながら腕組をし夏美達をジッと見ていた。

と続け様に「相棒。まさか、お前さん……………」と呟いていた。

第50章。夏美、ワカバに戻る。そして……沙江島財閥のパーティー前日（前編。）完。

第50章。夏美、ワカバに戻る。そして……沙江島財閥のパーティ前日（前

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の後編について書かせて頂きたい

と思います。其れでは次章も今章同様お楽しみ

頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「え？ジンがコナンの正体に疑い持ち始めている？」

ライチユウ「は……はい。でも、平次様のおかげで

何とか切り抜けましたが……。汗」

夏美「……成る程ね。」

ライチユウ「で？夏美様、この後どうなるのでしょうか

「?？」

夏美タバコ火を灯し「まあ・作者さん次第だろう

ね。」と続け様に次章もどうぞ宜しく!

第51章。夏美、ワカバに戻る。そして……沙江島財閥のパーティ前日（後

今章は前章の後編となります。

主に……再びワカバでのお話です。

此方も長丁場となっております。



第51章。夏美、ワカバに戻る。そして……沙江島財閥のパーティ前日（後

アレから、オウガの部屋に戻った夏美達。

夏美はライチュウから報告を受けていた。

夏美「な・何?! ジンが、あいつの正体に、薄々勘付いているだ  
と?!」

其れ本当か?! ライチュウ?!」

ライチュウ頷き「は・はい。しかし、平次様が何とか、巻いてく  
ださったので、

特に……今の所、問題は無いかと。」

夏美タバコに火を灯し頭をかきながら顔しかめて「・・・不味いね」。

コナンが「新一」とばれたら・・・。

ジンの事だから、周りの人間を・・・。

と嫌な考えが夏美の頭を過ぎった。

すると、ライチユウ「い・・・いかがいたします???夏美様???」

と続け様に「あの方の事ですから、ばれるのも・・・時間の問題」かと。

(ライチユウの言うあの方はジンの事。)

夏美タバコ吸いながら「・・・確かにね。」と続け様に「でも、今は、明日のパーティ

の事について考えよう。広州の奴等は何らかしらの手を使って標的を始末するからね。」

其れを聞いて服部「夏美。」

夏美「はい。」

服部「お前は、本当に行かへんのか？」

夏美「ええ。」

服部「妹も行くんやろ??」

と続け様に「多分・・広州の奴の事やから・・お前の妹も狙ってく  
ると思うぞ?」

すると、夏美の部屋にライフエイが入って来た。

ライフエイ「夏美ッ!」

夏美ライフエイの所を振り向き「どうした?!」

ライフエイ「今さっき情報部に野暮用があつて戻つたんだが・・・。

明日のパーティーの広州の標的がもう1人増えた。」

夏美冷や汗かきながら「誰だ？」

ライフエイ言わずらさそうに「お前の『妹』だ。」

夏美其れを聞いて驚いた。

そして「ば・馬鹿なツ！何で?!妹が?!」

ライフエイ「恐らく、メイランはお前が自分の所に来ない限り、お前を苦しめる為」に

お前の「身内」をやりに行くだろうぜ。」

夏美「クソツ!!!」  
「そう言いタバコを乱暴に灰皿に押し当て揉み消し、」

「兄様の所に行って来る!ライフエイ、ライチュウは平さんと一緒に悪いが此処でまだ」

「待機してくれ!」。

ライフエイ「了解！」

そして、夏美オウガの部屋に再び行き入って行った。

オウガ「夏美。どうした？」

夏美「兄様ッ！お願いがございます！」

オウガ「何だ？」

夏美「明日の沙江島財閥のパーティ、やはり私も行かせてください

「!!」

其れを聞いてオウガやジンを除くワカバのメンバーが驚いた。

シユウチェン「お・・おいおい! なっさん! 前銃撃されたのに・・

無茶だ! その体で行くなんて!」

続けてシユウワイ「そ・・そうですよ! 何急に言い出すんです?!  
夏姉!

危ないッすよ!」

夏美「・・それでも、行かなきゃならないんだよ。そりゃ・・当  
初は兄様のご命通り

此処で大人しくしようと思ったさ。」



オウガ「一応、訳を聞こうか？お前自身が行くと言つと、何かあったんだろう？」

夏美落ち着きを取り戻し「はい。此れは・・・ライフエイからの今入った情報です。」

明日の沙江島財閥のパーティの、標的、がもう1人増えたんです。」

768

オウガ其れを聞いて驚き「何？本当か？」

夏美頷いた。

オウガ「それで・・・その、標的、は？」

夏美「・・・私の‘妹’です。」

オウガ其れを聞いて更に驚いた。

夏美「明日、実は妹もライフエイと同伴で行く予定となっております。

しかし、当初は行かせるのを止めようとしたのですが・・・。

佳織がどうしても私の妹と佳織の妹を会わせたいという希望もありまして・・・。」

オウガ「・・・断る訳にも行かなくなった・・・。そう言う訳か。」

夏美再度頷き「ええ。」と続け様に「ですから・・・お願いですッ！  
兄様ッ！

ご命令違反は重々承知！しかし、身内、が標的にされた以上・・・  
私も黙って見ている

訳にも行きませんッ！ご命令違反の罰は受けますッ！ですから・・・  
私にも行かせて下さ

い！！」と必死にオウガに頼み込んだ。

オウガ其れを聞いて「・・・夏美。」

と続け様にフツと笑い「俺の負けだ、お前なら・・・そう言つて  
思っていたよ、罰は与え

ないから安心しろ。」と続け様に「・・・だが。夏美此れだけは頼むから約束してくれ。」

夏美「己の責務を全うし無事にワカバに帰還せよ。」

オウガ其れを聞いて再び驚いた。

夏美フツと笑い「其れが・・・我々、ワカバの決まり、ですよね？兄様。」

オウガフツと笑い換えして「・・・そうだったな。」

そして、夏美改めて「この度はご許可頂き有難うございます！この

橘夏美！

明日の任務を全うし・・・此方に無事に帰還する事をお約束致します  
ッ！

我が主陳・オウガ様。」

オウガ頷いた。

夏美「・・・其れでは、私は此れで。」

とオウガに一礼し部屋を出ようとしたその時ジンに「夏美。」

夏美ジンに振り向きフツと笑い「大丈夫」。ちゃんと戻るから。」

そう言い今度こそオウガの部屋から自分の部屋に戻った。

オウガ背もたれに身を預けながら苦笑いをし「やってくれる」と思ったぜ。」

シュウチェン「・・・此れで、宜しかったんで、？ボス？」

オウガ「致し方あるまい。夏美自身・・・まだ、あの事、が忘れなかったのだろう。」

妹まで広州に、奪われてしまったら、あいつもあいつでやるせない  
気持ちに

「なるだろうし」。もっと「自分が許せなくなってしまったら」。」

すると、ジン「オウガ。」

オウガ「何だ？ジン？」

ジン「明日のパーティー俺も行って良いか？」

オウガ「・・・心配か？」

ジンフツと笑い「ああ。一応な。」

オウガフツと笑い返し「お前の好きにするが良いさ。」

ジン「有難うよ。」と続け様に「ウオツカ。明日のパーティー俺達も行くぞ。」

ウオツカ「了解！」

ベルモット「じゃ・・・明日、私も暇だから付いて行かせてもらおうわ。」



と続け様にジンを見て「良いかしら？ジン？」

ジンタバコに火を灯し「好きにするが良いさ。」

ベルモットもタバコに火を灯し「有難う。」

そして、オウガは団員の様子をモニターで見た後再び夏美の様子を見ていた。

夏美ひと・言う訳だ！明日、私も行く事になった！

其れを聞いてライチュウはな・夏美様？！だ・大丈夫なんです  
か？？

夏美再びタバコに火を灯しニヤリと笑い「ああ。大丈夫だ。それに・  
・この左肩の銃口は

‘過去の物’だから……。平気さ。」

ライチュウ「さ……。左様で。」

と続け様にライフエイを見て「そう言う事だ！ライフエイ！」

ライフエイ「了解した！」

夏美「悪いね……。別にお前さんを信用していない訳じゃないんだ。  
此れだけは

誤解しないでくれ。」

ライフエイ領き「大丈夫だ！俺気にしていない！」

服部フツと笑い「取り合えず、決まりやな」。

続け様に「あいつ等来るやろうか？」

夏美タバコ吸いながら「多分……。来るでしょう」。あいつ等の  
事ですから……。  
」

（あいつ等＝コナン、哀）

と続け様に服部へさよか……。んで？あの姉ちゃんは？？」

(あの姉ちゃん＝ミレイ)

夏美頷き「多分……来ると、思います。大学の友達が居るそうですから……。」

服部頷き「となると……下手すれば……さっきからオウガハンの部屋に居た」

オウガハンの「友人」も来る可能性ありやな。」

夏美再び頷き「自分も同感です！平さん！下手すれば、鉢合わせになるでしょう。」

服部「へせやな。」と続け様に「じゃ・俺一先ず自分の部屋に戻るわ。何かあったら・」

いつでも来いや！」

夏美「はい。お疲れ様でした！」

そう言い服部に一礼しそして服部はワカバに宛がわれた自分の部屋に戻っていった。

ライフエイ「じゃ・俺も取り合えず部屋戻るわ。有理もまだ居るし。」

夏美 頷き「じゃ・・有理に『説明』を頼む！」

ライフエイ「良いのか？」

夏美「仕方ないさ」。

ライフエイ「了解した！じゃな！」

夏美「ああ。また明日。」

ライフエイ自分の部屋に戻って行った。

そして、夏美ライチュウに「お前も行くなら・・・明日の支度しておきな。」

其れを聞いたライチュウ敬礼をし「了解しました!!!!」

そう言い準備を開始した。

そして、自分の部屋の窓を見て「・・・いよいよ、明日」か。」

と同時に携帯を取り出し佳織に連絡を入れた。

第51章。夏美、ワカバに戻る。そして……沙江島財閥のパ  
ティ前日（後編）完。



第51章。夏美、ワカバに戻る。そして……沙江島財閥のパーティ前日（後

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて次章は、沙江島財閥のパーティに付いて

書かせて頂く予定です。

これは……三部？辺り？？に分けさせてかかせて

頂く予定です。其れでは次章も今章同様に

お楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ……。

コナン「ねえ……作者さん。」

N「何？コナン君？」

コナン「この小説何章まで続く予定?？」

N「さあ。何章までだろうね。だけど・・・

多分後しばらく???したら終わるかもよ???

コナン「そうなの??？」

N「・・・多分。あ、予告はちゃんと出すからね・・・。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願い致します。」

第52章。沙江島財閥のパーティ当日。(前編)(前書き)

今章では、夏美達が沙江島財閥のパーティに行く日を  
書かせて頂きました。と言いましても前編と言つ事で  
触りみたいな形になりました。

此方は多分3部位??に分けさせて書かせて頂く予定  
です。此方も長丁場です。

第52章。沙江島財閥のパーティ当日。(前編)

そして、いよいよその日がやって来た。

今日は、12月13日(土)。

沙江島財閥の長女佳織の武道制覇記念のパーティである。

場所は、杯戸シティホテル。

時間は、夕方5時から夜の10時位となっている。

夏美はアレから佳織との会話を終えそして、ついでにコナン達にも連絡を入れた。

そうしたら、コナンも哀を連れてそのパーティに来るとの事。

夏美は、ジン達が来る可能性もある事を強く伝え、  
‘警戒’する事も伝えた。

そして、広州のメンバーも。

そうしたらコナンから「了解！」との返事が来た。

そして、コナンとの会話を終えた。

夏美再びタバコに火を灯し「・・・ミレイ大丈夫かな？」と呟いていた。

一方、此処は米花町のミレイの自宅があるマンション。

ミレイは事前に、真理恵から誘われていたので行く事を決めていた。

と同時にパーティが夕方5時からと言つ事もありまだ時間があった為

ベットの中でまだ寝ていた。

すると、再びまたミレイに、闇の夢、が出て来た。

辺りは再び雪・・・。

とある日の大学の下校途中で真理恵とカノンと一緒に帰って行った。

路地裏で黒猫が出て来てミレイを見ていた。

と同時に米花町の国道に黒のポルシェ356Aが止まっていった。

ミレイ達はその黒のポルシェ356Aを通り過ぎる。

そして、その運転席に座っているジンがミレイを再び見ている。

「平和ポケモ」終わりだ。さあ・・・夢から覚めて再会を祝おうじやないか。

俺達の『相応しい』闇の場所で……。」

ガチャリ。

ジンニヤリ「なあ……？ミレイ？」

ミレイ振り向き「……………！」

そしてガバツとベットから起き冷や汗かきながら頭をかきフツと笑い

「もう……。最近『こんな夢』ばかり。」



と同時にベッドの側に置いてあった写真盾を取りその中に入っている写真を見て

「……琢磨兄さん。」

りゅうま 龍崎琢磨ミレイの実の兄。

だが……ある日に玲愛蘭に殺された。

琢磨はまるで、ジン、と雰囲気そして顔が似ていた。

ミレイ「ねえ……。琢磨兄さん。やっぱり私と、聞、って切つても切れない関係」

なのかな？」と続け様に「私は、どちらの人間、??」

ねえ……。教えてよ？

兄さん。

と写真に写っている琢磨に問いかけた。

すると、ミレイ写真盾をベット側に置き再びフツと笑い、「答えた  
くても、答えられない」

・・・か。」

そう言いリビングに行きタバコに火を灯した。

そして、時計を見て「まだ・・・朝の11時か。」

と眩き窓を見た。

天気は「雪」だった。

ミレイタバコを吸いながら「・・・私が窓を見ると外は「雪」ばっか。

「何でだろっね」？

とも呟いた。

そしてミレイの携帯が鳴った。

ミレイ携帯を取り出しディスプレイを見た「・・・メール？」

そう言い携帯を開きメールを見た。

すると、ミレイの顔が一瞬青ざめた。

メールの内容。

久しぶりだな。ミレイ。

今日の杯戸シティホテルで行われるパーティの時に、お前を迎えに行く。

待っている。

ジン。

ミレイそのメールを見て再びフツと笑い「もう、追いかけてこ」

も終わりかな。」

と同時に「こんなにもか・・・夢が現実になるとはね。」

そう言い灰皿にタバコを置きリビングにあつた黒い箱を取り出した。

すると其処にはジンと同様の‘ベレッタ’が入っていた。

ミレイ「今日のパーティ多分広州のメンバーも来るから・・恐らく  
‘あの女’も。」

琢磨兄さん。今度こそあの女を撃ち兄さんの仇を!!」

そう言いはれないようにベレッタにサイレンサーを付け黒のハンカチに包んでテーブルの

上に置いた。

そして灰皿からタバコを再び持ち吸い始めた。

第52章。沙江島財閥のパーティ当日。(前編) 完。

第52章。沙江島財閥のパーティ当日。(前編)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の(中篇)と言う形で書かせて頂く予定です。次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ミレイ「・・・こんなにも早く。」

と続け様に微笑んで「次章もどうぞ宜しく!」



第53章。沙江島財閥のパーティ当日。(中編)(前書き)

前章の続きです。

今章も長丁場になりますのでご了承ください。

第53章。沙江島財閥のパーティ当日。（中編。）

アレからミレイはタバコを吸いながら窓を見続けていた。

すると、窓の下に黒のシボレーが目についた。

ミレイ「・・・黒のシボレーか。」

じゃ・・・あの車の主はあの時の「赤井秀一」。

そして、ドアが知らぬ間に開いた。

ミレイ「瞬ビクツとなり「誰ッ?!」

すると、短髪の黒髪のニット帽を被ったラフな格好をした男がコナ  
ンと共に入って来た。

男「・・・勝手に上がって申し訳ない。君は、闇の始末屋赤龍事<sup>セキロン</sup>

龍崎ミレイかな？」

ミレイタバコ吸いながら「そう。その通り。だとすると・・・お兄さ  
んは、シルバーブレット」

事・・・FBI捜査官の赤井秀一？」

赤井フツと笑い「ご名答。良く分かったな。」

ミレイ「あの男<sup>ヒト</sup>に前に聞いた事あってね。組織では、厄介者、だっ  
たそうだから。」

赤井再びフツと笑い「・・・そうか。」と続け様に「君が言うあの男<sup>ヒト</sup>って

「ジン」の事かな？」

ミレイ再びフツと笑い「・・・ご名答。」

と続け様にコナンを見て「あんたも居たんだけ？コナン？」

コナン頷き「ああ。赤井さんとは知り合いだね。」と続け様に「お前の事が気になってよ。」

ミレイ「・・・そうかい。」

と更に続けてコナン「お前、今日の沙江島財閥のパーティー行くんだろっ?」

ミレイ灰皿にタバコを揉み消して「ああ。大学の友達のお姉の武道制覇の祝いだからね。」

コナン「そうか。なら・・・気がつけるんだな。」

其れを聞いてミレイ再びタバコを取り出し火を灯し「兄さんが来るかもしれないって

事だろっ?コナン。」

コナン其れを聞いて驚き「何で分かった？」

ミレイタバコ吸いながら「・・・何となく。かな。」

そして、赤井「横入りで申し訳ないんだが・・・1つ此処で提案が。」

ミレイ「何？」

赤井「我々FBIの証人保護プログラムを受けて欲しいんだ。」

ミレイ其れを聞いて「其れは・・・自分の身が保障されて・・・」

その場合もう二度とと言って良いのかな？仲間や知り合いに会えないって事だよな？」

赤井頷いた。

コナン「俺も、赤井さんに、俺も同意見だ」。お前は広州とそして・  
・「組織の人間」

では無いがジンにも「狙われている」だから・・此れを受けるとお  
前の身は「安全」

と言う訳さ。」

ミレイタバコを口に加え直し「悪いけど・・。其れは「いらない」。  
確かに・・

其れを受ければ「安全」って言ったら「安全」かもしれない。只其  
れは多分・・

「私自身が私自身、で居られなくなる事。私は・・・其処まで、強くないよ。」

と同時に「私自身、基本的に「自由派」だし、元々は「闇の人間」。

「表は似合わないさ。」

赤井「じゃ・・・何故？「闇から抜け出した」？」

ミレイ再びフツと笑い「何故だろうね、？自分でも、良く分からないよ。」

と続け様にねえ・・・？雪音姉さん。琢磨兄さん。

本当は此れが「一番」なのかもしれないね。



コナン「ミレイ。まさか『お前』・・・闇に帰るつもり、なんじゃねえだろうな？」

ミレイ「さあ・・・どうだろうね？」

と同時に気が付けば昼が過ぎそして時計を見て「おや・・・もうこんな時間だ」。

赤井達も時計を見た。

時計は夕方4時前位になっていた。

ミレイ灰皿にタバコの火を消し「そろそろ杯戸シティホテルに行かないと。」

そう言い自分の部屋に行き漆黒のドレスに身を包みそして事前に支度しておいた

漆黒の鞆を持ち自分の部屋を出て「じゃ・・・そろそろ私行くから出してもらえるかな？」

(勿論その中には事前に用意したベレッタも入っている。)

赤井達その姿を見て驚いたが平然と装い頷き自宅を出た。

そして、赤井「じゃ・・・このボウヤも今日のパーティに行くみたいだから

俺が送って行こう。」

ミレイ「いや・・・私は、遠慮しておく。もし、‘兄さん’と会場前にでも鉢合わせに

なったら何て言われるか分からないし・・・それに、もう‘迎えは’来てくれているから。」

赤井フツと笑い「そうか。」と続け様に「じゃ・・・ボウヤは再び俺の車に。」

コナン頷いた。

そして、エレベーターで1階に降りて行った。

すると、青のベンツが止まっていた。

赤井「あれがそうなのか？」

ミレイ頷いた。

そして、青のズンズンゆっくるとミレイ達に近づいて来て止まり運転席の窓が開き

「ようっ！ミレイっ！」

ミレイ微笑んで「やっほ！夏さん！この度は態々有難う。」

夏美「何。構わんさ。」と続け様に「悪いね。後部座席が今うちの相棒達で埋まっているから

助手席に座ってくれないか？」

ミレイ頷きそして、赤井を見て「今日は、会えて良かったよ、赤井さん。」

赤井「ああ。俺もさ。またいつか君とは、会いたい、物だ。」

ミレイ再びタバコに火を灯しフツと笑い「機会があればね。」  
と続け様に

「じゃ・・・コナン。また、後で、な。」

コナンフツと笑い「了解した。」

そして、ミレイ助手席に乗り込んだ。

すると夏美もタバコに火を灯しコナンを見て「お前さんは？どつするんだい？」

コナン「赤井さんに杯戸シティホテルまで送ってもらえる事になってるんだ。」

夏美「そうか。了解した。」と続け様に赤井を見て「では、秀さん。宜しく願います。」

赤井「ああ。勿論。責任持って、送らせてもらおう。」

夏美頷きそして再度コナンを見て「じゃ・・また後で。」と続け様に「頼んだよ」？

「相棒」？」

コナンニヤリと笑い「了解した！「相棒」。」

そう言い夏美運転席の窓を閉め杯戸シティホテルへと愛車の青ベントスを走らせた。

そして、赤井「じゃ・・・俺達もそろそろ行くか？ボウヤ。」

コナン頷き赤井と共に彼の愛車である黒のシボレーに向かい乗り込み

杯戸シティホテルに向かった。

其れと同時に密かに路地裏に止まっていた黒のポルシェ356Aも  
赤井達に気づかれない

様に杯戸シティホテルへと向かった。

第53章。沙江島財閥のパーティ当日。（中編。）完。





第53章。沙江島財閥のパーティ当日。(中編)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は・・・後編パート1として・・・

この続きを書かせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

ミレイ「・・・どうやら、この物語も・・・?」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく!」

第54章。沙江島財閥のパーティ当日。(後編1。)(前書き)

今章は、前章の続きです。

此方も長丁場ですのでご了承ください。

第54章。沙江島財閥のパーティ当日。（後編1。）

アレから、コナン達と一先ず別れた夏美達は杯戸シティホテルに到着していた。

そして、夏美愛車の中で「良いかい？皆。雷外が前に広州の面子の話を録音した会話によると

・・夜の7時頃にその酒川真紀乃とそのミレイの大学での友達である前川財閥の長女である

前川花梨が現れる予定だ。それで・・多分何らかしらの映像上映があるみたいだから

その時にメイランの奴は恐らく愛燐の奴にその2人を暗殺させるつもりだ。」

すると、雷龍「で？その映像上映は何時頃になる予定です？姉者？」

夏美ミレイからパーティのパンフを借りて「そうだな。パンフによると・・・夜の8時位

って書いてあるな。「そう言いミレイに「有難う。」と言り返した。

雷龍「約・・・1時間後位ですか。」

雷明も腕を組み「ちょっと・・・時間が足りなさ過ぎですね。姉上様

」

夏美前に吸っていたタバコを灰皿の上で揉み消しまた新しいタバコを取り出し火をつけ

「・・・そうだな。むずい（難しい）な。だが、やるしかないだろう。」

するとミレイ「事前にね。妹の方の前川に一応説明しておいたよ。

夏さん。」

夏美「ほう。そうか？で？何て言っていた？」

ミレイタバコに火を灯し「一応『防弾ジョッキを付けておく』そして・・・」

ついでに体全体をカバーする特殊ドレスを身に着けるらしいわ。」

と続け様に「前川の所・・・防弾専門の店もやっているらしいから・・・」

夏美タバコを吸いながら「成る程ね。」

そして、夏美有理を見て「有理。」

有理「何？姉さん？」

夏美「姉さんも念の為に応援に付くから、お前はくれぐれもライ  
フェイ達から離れるん

じゃないよ？良いね？」

有理頷き「分かった。姉さんも十分気をつけて。」

そして、ライフェイ「有理には念の為に、防弾チョッキ、付けさせ  
てある。」

夏美タバコ吸いながら頷き「有難う。」と続け様に「くれぐれも・  
・有理を頼む。」

ライフエイ「了解した。」

すると、雷龍時計を見て「姉者。ソロソロ、お時間です。」

夏美タバコを灰皿に揉み消し「よし！乗り込むか！」

そしてその後ミレイも灰皿にタバコを揉み消し、青のベンツをホテルの駐車場に止め

会場へと向かった。

すると、杯戸シティホテルの路地裏に黒のポルシェ356Aが止まって行って



モニターでジン達が様子を見ていた。

ジン「よし。夏美達が動き始めた。俺達もソロソロ乗り込むぜ。」

ウオツカ「了解しやした。」すると「所で兄貴、ベルモットはどうしたんです?。」

ジン「ベルモットの奴は先に会場に乗り込んでいる。」

そう言い黒のポルシェ356Aから降り会場に向かった。

第54章。沙江島財閥パーティ当日。(後編1。)完。



第54章。沙江島財閥のパーティ当日。(後編1。)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章もこの続きを書かせて頂く予定です。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「・・・ついに乗り込む時が来たか。」

続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

第55章。沙江島財閥のパーティ当日。(後編2。)(前書き)

前章の続きです。

此方も長丁場です。

第55章。沙江島財閥のパーティ当日。（後編2。）

此処は、杯戸シティホテルの5階にある流水の間。

此処で沙江島財閥のパーティが開催される事となっている。

アレから夏美達は流水の間に入り沙江島財閥の会長達に挨拶を済ませ

一足早めに入ったコナン達と合流し当たりを警戒していた。

すると服部「・・・夏美。」

夏美「はい。平さん。」

服部「パーティ開始時刻は確か夕方5時やったな。」

夏美頷き「はい。夕方5時から夜の10時位となっています。」

服部「んで？広州のスナイパーである『あの女』が標的を仕留めるのは・・・

標的が現れる予定の夜7時の1時間後の夜8時頃。で・・・あつてるな？」

夏美再度頷き「恐らくその辺かと。」と続け様に「その1時間経つ前に我々は

その標的を『守らなければなりません』。」

服部「・・・時間が少ないな。」

夏美「・・・そうですね。」と続け様に「しかし、何とかしないと。」

すると、夏美の無線がなった。

夏美「はい。橘。」

雷外「あ・・姉御？俺。」

廊下の死角で待機していた雷外だった。

夏美「アレから何か、動きは？」

雷外「広州の面子が入ってきた。」

夏美「そうか。で？数は？」

雷外「今の所、3人位かな。」

夏美「その3人詳しく分かるか？雷外。」

雷外「ああ。玲兄弟だ。」

夏美「玲兄弟って言ったら、愛燐、愛蘭、龍湾か。」

雷外「ああ。」と続け様に「どうするよ？姉御？追跡する？」

夏美「・・・いや。其れは不味い。今は、取り合えず様子見だ。奴等は一応、エリ組、」



警戒心が他の連中より、高い、からな。」

雷外「了解した!」

夏美「じゃ・・・しばらく様子見た後こっちに（会場）入ってきてくれ。」

雷外「OK!」

そう言い無線を終えた。

すると、コナン「雷外からか?」

夏美頷き「ああ。広州の面子がどうやら、お出まし、のようだ。」

と更に続けて哀が「んで？誰なの??？」

夏美「玲兄弟だ。」

ミレイ其れを聞いて「と言う事は3人来ているの?!夏さん?!」

夏美頷き「ああ。愛燐、愛蘭、龍湾！」

ミレイ「……愛蘭。」

と憎悪をにじませた顔で実の兄の仇の名を呼んだ。

コナン達は其れを只見ているしかなかった。

すると、行き成り哀が怯え始めた。

コナンその様子を見て「灰原・・奴等か？」

哀頷いた。

其れを聞いたミレイも辺りを見渡しそして「……………」

左の壁側を見ると漆黒のスーツに身を包んだジンの姿があった。

ミレイ

・・・ジ、ジン兄さんっ！

一瞬焦った。

すると、ジンと一瞬目が合った。

ミレイ一瞬慌てたそぶりを見せたが落ち着きながら顔をそらす。

ジン其れを見てニヤリと笑い「やっと見つけたぜ」？ミレイ・・・  
そして「

と続け様にコナンの隣にいる哀を見て「シエリー。」

すると、夏美がジンに寄って来た。

ジン夏美を見て「よう。」

夏美フツと笑い「貴方も来ていたのね。ジン。」

ジン「ああ。どうもお前の事が、心配になってよ。」

其れを聞いた夏美クスと笑い「あら・・そんなに、私は頼りない？」

ジン夏美を自分の所に引き寄せ「いいや。そんな事ねえぜ？」

と続け様に「大切な恋人、を心配してはいけねえのか？」

夏美首を横に振り「いいえ。」と続け様に「有難う。」

と続け様にジン「お前に聞きたい事がある。」

夏美「何？」

ジンニヤリと笑い「あの江戸川コナンの隣にいる小娘あれ・・・シエリー、だろ？」

夏美其れを聞いて一瞬驚いたが冷静さを取り出し「・・・何故そう思うの?」

ジン「あまりにも、似すぎているんだよ」。それに・・・一瞬俺の気配を感じたみてえだが

すぐに「怯え始めたぜ?」と更に続けて「俺の気配を感じるんなぜ・・・」

「組織に関わった人間か」、「裏切り者しかいねえからな。」「と不敵な笑みを浮かべた。

夏美心の中でため息を付きながら

やっぱり、「彼」を欺く事は出来ないのね。

どうしても……。

しかし、夏美フツと笑い「さあ……分からないわ」。と続け様に

「もし、‘知っていた’としても幾ら恋人の頼みとは言え、答えられないわ」。

と更に続けて「私はあくまでも‘ワカバの人間’だから。」そう付け加えた。

ジン其れを聞いて再びフツと笑い「まあ……良しさ。いずれ分かる事だからな。」

夏美「じゃ……一先ずワカバの相棒（仲間）の所に戻るわ。」



ジン夏美の肩から手を離し「ああ。」

と続け様に「また、俺の下」に戻ってきてくれるんだろう?。」

夏美「・・・そうね。ワカバの仕事が一段落して兄様に、お暇頂戴、した時にね。」

そして、ジンに軽く挨拶してワカバの仲間の下に一先ず戻った。

第55章。沙江島財閥のパーティ当日。(後編2。)完。



第55章。沙江島財閥のパーティ当日。(後編2。)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章も今章の続きを書かせて頂く予定です。

此方は後しばらく？続く予定なのでご了承頂きたい  
と思います。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

コナン「おいおい！何のんきにジンの所に行ってるんだ

よ！夏美！」

夏美苦笑いをしながら「悪いね。コナン。つい

ね。。。」

哀呆れてそして「次章もどうぞ宜しく。」



第56章。沙江島財閥のパーティ当日。(後編3。)(前書き)

おはようございます。前章の続きです。

最後の辺りに広州の連中が少し話します。

第56章。沙江島財閥のパーティ当日。（後編3。）

アレからジンと一先ず別れた夏美は仲間の元に戻っていた。

そして……。

服部時計を見て「お・・そろそろ開始時刻やな。」

時計はもう5時を迎えていた。

其れと同時に夏美は仲間達に再び指示を出す。

そして、有理に三日月のペンダントを渡した。

すると、有理夏美に「これは?？」

夏美「母さんが死ぬ間に私に託した、母さんの『形見』みたいなものだ。」

お前に渡すよう母さんに『言われていたからな』。』と続け様に」  
・有理。」

と有理の右肩をそっと持ち「頼むから・・・無事で居てくれよ。」

有理頷き「・・・姉さんもね。」

夏美その言葉を聞きフツと笑った。

其れを見て哀はコナンの洋服の袖をキュツと持った。

コナン「・・・灰原。」

コナンは哀の気持ちに薄々だが勘付いていた。

すると、雷外とは別の所で張り込んでいた雷龍が夏美の側に来て「姉者。うちの

‘警備隊’が此方の‘警備隊’の方々と無事に合流したそうです。」

夏美頷き「そうか。」と続け様に「各部隊に広州の奴等にはれないよう。。。」

それぞれの事前に指示された配置に付くよう伝えておいてくれ。」

雷龍「ハッ！」そう言い警備隊の所に向かった。



そして、沙江島財閥の会長の挨拶と共にパーティが開始された。

ワカバのメンバーは警戒心を一層上げていた。

其れを遠めで見たジンそして合流したウォツカとベルモットが見ていた。

ウォツカ「夏美さん達やけに警戒していますね。」

ジントバコに火を灯し「そりゃあそうだろうよ。何時広州の愛燐の銃弾が何時来るか

分からねえんだ。まあ、狙撃時間は決まっているからそんなに心配はいらねえだろう

が……。あいつ妹も狙われているらしいからよ。」

ベルモット「あの子も、あの子で、大変ね。」

すると、ベルモット深紅のチャイナドレスに身を包んだ女性を発見する。

ジン「どうした？ベルモット？」

ベルモット「ほら見てよ。ジン、ウォッカ。あの女広州の明杏じゃない？」

ジン事前に隠し撮りしておいた明杏の写真を見てニヤリ「みてえだな。」

と続け様に「……まさか。こんな所で、再会出来る」とはな。と

ても嬉しいぜ？

王明杏。「

すると、夏美食事を取りに行くと同時に辺りを警戒していた。

そして、食事を取りに言った後無線で「雷外！」

雷外「はいよ！夏美の姉御？」

夏美頷き「ああ。私だ。」と続け様に「そっちはどうなっている？」

雷外辺りを見渡し「今の所、問題ない。」と続け様に「そっちは？」

夏美「明杏の奴も出て来た。」

其れを聞いて雷外「！！本当か？姉御？」

夏美頷き「ああ。」と続け様に「多分・・・明杏の奴も出て来たと言っ事は

メイランの奴もどっかにいるはずだ。くれぐれも警戒を怠らないでくれ。」

雷外「了解！」

夏美「じゃ・・・頼んだよ。」「弟よ。」「

そう言い無線を切った。

すると、ミレイ夏美の所に寄ってきて「夏さん。」「

夏美「明杏の奴が来ている事は知っているな？」

ミレイ頷きそして「後どれ位来る予定？」

夏美「そうだな。多分、2、3人、だろう。奴等も奴等で多分私等が此処に居る事位

薄々、勘付いているはず、私等が居て尚且つ、パーティ客も来ているこの会場に

前みたいにはぼ全員の面子で来る程奴等も、馬鹿じゃないよ。」

ミレイ「・・・そうね。」と続け様に「そう、願うしか、ないわね。」

夏美頷いた。

一方広州は・・・。

明杏は愛蘭から報告を受けていた。

明杏クスと笑い「そう。『奴等もね』。」

( 奴等 〃ワカバ )

愛蘭「ええ。どうやら・・・あの時の我々のこの計画の、会話が聞こえてしまつて

居たみたいね。」

明杏フツと笑い「・・・成る程。」

と同時に夏美とミレイの姿を発見する。

明杏「!!!」

あ……アレは、シヤアアメイセキロン夏美と赤龍

どうして?!

まさか……あの子等も私達の、計画を知って、

愛蘭も明杏が見ている方向に目を向けた。

シヤアアメイ  
夏美様。

それに……。



赤龍事、龍崎ミレイ。

ん？

龍崎・・・？

まさか？！

あの子？！

昔私が、始末した、龍崎琢磨の・・・。

‘身内’？！

すると、ミレイも自分達を見ている目線に気が付きその目線の方に目をやる。

すると「ミレイ」……！

あ……アレは！

玲愛蘭ッ！

そう言い前の方に出ようとしたその時

夏美によって止められた。

「ミレイ」……！夏さん……！

夏美「待てよ。此処はあまりにも、人が多すぎる。」。

と同時に「どうせ実の兄さんの仇討をしようと思ったんだろう?」

ミレイ「・・・な、何故?それを??」

夏美フツと笑い「お前さんのその様子を見れば大体は、予想付く。」

と同時に「今は、まだ、我慢しろ。」。

ミレイ「・・・了解。」

と続け様に夏美「さ・・・一先ず相棒達（仲間）の所に戻るよ。」

ミレイ頷き再びワカバの下に戻って行った。

そして・・・。

気が付けば7時になっていた。

そして・・・。

広州の標的である。

酒川真紀乃と前川花梨が会場内に入って来た。

第56章。沙江島財閥のパーティ。(後編3。)完。

第56章。沙江島財閥のパーティ当日。(後編3。)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章もパーティ話になると思います。

もうしばらく？掛かりそうなので・・

今章と同様にお付き合い下されば幸いです。

オマケ

夏美「・・・広州の面子も大体動き始めたか・・・。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく。」

第57章。沙江島財閥のパーティ当日での運命の時刻。(前編)(前書き)

今章でも沙江島財閥のパーティについてです。

いよいよ……あの時が’。

此方も長丁場となっております。

第57章。沙江島財閥のパーティ当日での運命の時刻。(前編。)

アレから、広州の暗殺計画を知り沙江島財閥のパーティ会場に侵入していた夏美達は

辺りを再び警戒していた。

すると、ミレイの側に真理恵が来て「いらっしやい。ミレイさん。」

ミレイ「ああ。沙江島か。この度は誘ってくれて有難う。」と微笑んだ。

真理恵「いいえ。」と続け様に「その漆黒のドレスとても似合っているわ。」

ミレイ「有難う。」と続け様に「沙江島もそのブルーのドレスとても似合っているよ。」

真理恵「有難う。実はこれお姉様から頂いたの。」



ミレイ「そうなんだ。」と続け様に「あれ？その肝心の主役の、お姉様、は？」

真理恵辺りを見渡し「あ・・橘さんと話をしているわ。」

ミレイ「そう。」

一方、佳織は夏美から事情を聞いていた。

佳織小声で「え？と言う事は此处であんたん所の対立している広州のメンバーが

‘暗殺’を？！」

夏美頷き小声で「ああ。だから・・・うち等の相棒（仲間達）も張り込ませてあるから

くれぐれも、気をつけて」。」「

佳織頷き小声で返し「でも、あんた・・・電話で話していた時にはそんな事言っていなかった

じゃないの。」「

・ 夏美「悪いね。あの時は私じゃあも、行けない」と踏んでいたから、それにせつかくのお前さんの武道連覇祝いのパーティを邪魔したくなかったからね。」「

と続け様に「でも、まあ……結局は『邪魔する事』になってしま  
ったけど……。」

と苦笑い。

佳織「ううん。構わないわ。」と続け様に「頼りにしているわよ？  
ワカバのリーダーさん？」

其れを聞いた夏美はフツと笑った。

と同時に「奴等が本格的に動き始めるのは……映像上映がされる  
午後8時頃だ。」

その時に酒川真紀乃と前川花梨を狙撃する。」

其れを聞いて佳織腕時計を見て「ウソツ！もう……。7時58分  
よー！」

夏美「それを聞いて「なっ！！！！後2分位しかないッ！」

と続け様に「雷明ッ！」

雷明「ハッ！此処にッ！姉上様！」

夏美「奴が『ターゲット標的』を狙撃する場所分かるか??」

雷明「恐らく・・・向かい側の旧館の屋上かと。」

夏美「今其処に・・・うちの連中誰か隠れて待機している??」

雷明「私の兄が一足勘付いてその屋上に・・・其れと今の所この廊下  
辺りには問題なかったそう

で・・・雷外さんも其処に。」

夏美頷き「すまんが。お前さんも行ってくれ。至急だ。」

雷明「ハッ！」そう言い瞬間術を使い屋上へと向かった。

コナン其れを見て「はやっ！」

すると、夏美佳織を見て「んで？その『標的』の2人は？」

佳織「お父さん達との挨拶を終え・・・今丁度あの右側の窓側に・・・」

夏美「な・・・！」

まつ・・・不味い！

あそこは旧館の屋上の近く！

そんな所に行ったら・・・

間違いなく、撃たれるッ！

と同時に今までミレイと話をしてきた真理恵が来て「お姉様！」

佳織「・・・どうしたの？」

真理恵「ミレイさんが居ないんですの！」

佳織「え？さっき・・・あんたあの子と話していたんじゃないの？」

真理恵頷き「ええ。話していましたわ。その後・・・橘さんの妹さんの有理さんと

話していてその後会場を見渡したら何処にも居ないんですの。」

夏美其れを聞いて・・。

あ！あいつッ！！！

ま・・・まさか？！！！

旧館の屋上に？！

1人で？！



そして佳織に「悪い！ちよいと抜けるッ！」

そう言い再びワカバの相棒達（仲間）の下に戻って行った。

「コナン」どうした？」

夏美「ミレイの奴が居ないッ！」

服部「な・・・何やて?!」

そして、雷外の代わりに廊下で見張りをしていた蘭達も入って来て。

服部「おう！どや・・・怪しい連中おらんかったか？」

蘭「今の所、何も・・・。」しかし、蘭は何かを思い出した。

「そう言えば、広州の玲3兄弟が会場から出て行ったわ。」

と続け様に和葉「何か・・・。」打ち合わせ」しているようやったわ。」

其れを聞いて服部「打ち合わせ」なんかやないッ！これは・・・  
「最終確認やッ」！

此処で行われる‘奴等の暗殺劇’のな……。」

其れを聞いて蘭と和葉が驚いた。

そして、蘭「じゃ……止めに行かないと!」

和葉「せや!このままやと……!」

夏美「大丈夫!雷外達がすでにその‘暗殺場’に向かっている。」

と続け様に「……何とか防いでくれるだろう。」

蘭辺りを見渡し「そう言えば・・・ミレイさんは？」

夏美「・・・多分。これはあくまでも私じゃあの『考え』に過ぎんだが・・・。

あいつは『暗殺場』に行つたんだ。」

蘭「え？と・・・言う事は？！」

和葉「ま・・・まさか、ミレイさん？！」

夏美頷き「ああ・・・。まさか、だろっさ。」

そう言い夏美も密かに忍ばせてあった銃の入ったポケットを見  
ていた。

そして・・・。

自分を嘗て、闇から救ってくれた少女、の言葉を思い出す。

「お願い！夏美さん！銃なんか二度と持たないで！銃は我々、警察  
側、から見れば

「護身用」になるけど・・・その他の人が持ったら・・・銃なんて所  
詮、人殺し」の

道具でしかないのよ！だから・・・。お願い！夏美さん！。

夏美小声で悲しそうに「・・・香奈枝かなえ」

木沢河香奈枝（きさかわかなえ。）

夏美の過去を知る人物の1人でもあった。

そして・‘闇の夏美’を知る人物でもある。

夏美はミレイと同様に嘗ては闇の始末屋‘炎龍’（エンロン）共呼ばれていた。

その名の理由は炎色をした龍の刺青が左腕に刻まれていたからだ。

しかし、香奈枝と出会い夏美は再び‘闇から表’に復帰する事が出来た。

夏美タバコに火を灯しながら……。

悪いな。

香奈枝。

「どうぞやら……お前さんの約束は、果たせない、かもしれない。かもしれない。」

「そして、哀辺りを見渡し「ねえ！彼！居なくなっているわよ！」」

(哀が言う、彼、ジンの事。)

コナン「!!何ッ?!」

服部「どつちやら・・・その、暗殺場、に行ったみたいやな。」

そして、夏美「平さん!」

服部「何や?」



夏美「此処で……しばらく待機をお願いしますッ！」

服部頷いた。

と続け様に「ライフエイ！」

ライフエイ「はいよ！」

夏美「私しゃあもちよいと離れる。その間に此処頼む！」

ライフエイ「了解！」

そして夏美「コナンそして……哀ちゃんも此処に！」

コナン達も頷いて夏美急いで旧館へと向かった。

第57章。沙江島財閥のパーティ当日での運命の時刻。  
完。 (前編。)

第57章。沙江島財閥のパーティ当日での運命の時刻。(前編)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はこの後編を書かせて頂く予定です。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ミレイ「・・・赤龍復活かしら。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく!」

**第58章。沙江島財閥のパーティ当日での運命の時刻。(後編)(前書き)**

今章は前章の後編です。

此方も長丁場になっております。

ご了承下さい。

第58章。沙江島財閥のパーティ当日での運命の時刻。(後編。)

そして、夜8時・・・。

パーティの司会者の声と共に映像上映(佳織の武道制覇への道のり)を上映する為

会場内が暗くなった。

一方、此处は杯戸シティホテルの旧館の屋上。

天気は雪。

そして愛燐がライフルで窓側に立っていた広州(自分所)の標的である

酒川真紀乃と前川花梨を狙っていた。

その後ろには明杏と愛燐の妹である愛蘭、そして、弟の龍湾が居た。

そして、明杏、愛蘭に時間を尋ねそして愛蘭に指示を出し・・・。

愛蘭「姉様。ソロソロ、時間です」。お願いします。」

愛燐「OK〜！」と続け様に笑みを浮かべて「酒川真紀乃そして・・・  
前川花梨。あんた達には

「悪いけど、此处で、消えてもらっわ」。

そう言いライフルの引き金を引こうとした次の瞬間・・・。

パシュッ！！！！！

と銃声の音がした。

そして、愛燐の左肩、妹の愛蘭の左肩から血が出た。

明杏「!!！」

龍湾「!!ね・・・姉様方ッ！」

と続け様に「だ・・・誰だッ?!」

そう言い後ろを振り向いた。

すると、会場に居る筈の漆黒のドレスに身を包んだミレイがジーンと同様のサイレンサー付き

のベレッタを持ちタバコに火を灯しながらフツと笑い「ようやく、会えたわね。」

玲3兄弟。そして・・・「久しぶり」。と言つべきかしら？王明杏。」

愛憐いつの間にかライフルから手を放たれて右手でミレイに撃たれた左肩を持ち

「あ・・・あなたは、セ・・・赤龍?!」



明杏笑いながら「まさか・・・貴女から態々出向いてくれるとはね。」

と続け様に「どうやら・・・その様子だと。私達の所には来てくれなさそう」ね。」

ミレイタバコ吸いながらニヤリと笑い「ごめんなさいね」。私は・・・

元々「最初っから」あんだ達の所には「来るつもり」等毛頭なかったから。」

と続け様に「・・・私を縛り付けて良いのは」ワカバ」と・・・

「・・・ジン兄さん」だけよ。」

そして、龍湾「何故ッ?! 姉様方を撃つた?!」

其れを聞いたミレイ「愚問だね。」と続け様に「でも、一応・  
・教えてあげる。」

と更に続けて「1つは、あんた達の計画を阻止する為。そして、  
2つ目は……。」

889

玲龍湾。あんたの2番目の姉、玲愛蘭を此処で、始末する事。」

愛憐と龍湾其れを聞いて驚きそして、龍湾が再び「何故だッ?! 何  
故……愛蘭姉様を?!」

ミレイタバコを加え直し、「理由は簡単、私の、実の兄である龍崎琢磨を

「殺した」から。その「仕返し」。「と不敵な笑みを浮かべて言った。

そのミレイの不敵な笑みを見た3人は一瞬「恐怖心」が体に走った。

今のミレイのその姿はまるでジンに「そっくりだった。」

そして、ミレイフツと笑い「おしゃべりはもう此処まで、あんな達にはこの会場から

ソロソロ「退場」してもらおうわ。」

其れを聞いた明杏クスと笑い「其れは、どうかしら、？」

そして後ろから足音が聞こえた。

ミレイ

ま・・・まさか?!

こいつ等の仲間がまだ・・・?!

明杏ドアに向かって「さあ・・・。其処に居るんでしょう? 私達の、

大切な同志達’？

居るんだったら、赤龍を始末して頂戴。」と笑いながら言った。

しかし・・・。

聞こえたのは予想外もしない声だった。

「残念だったね。明杏。此处に集まったお前達の‘相棒達’（仲間）はもう此方で

‘眠らせてもらったよ’。」

明杏「！！そ・・・その声はまさか夏美シャアアアメイ？！」

すると、ドアから夏美が出て来ていつもの様にタバコに火を灯しニヤリと笑い

「ご名答！」と続け様に夏美の後ろから今まで此処に待機していた。

雷外、そして、雷龍、雷明が居た。

龍灣其れを見て驚き「お……お前らは『ワカバツ』！」

夏美タバコを吸いながらフツと笑い「何で……此処に……？という顔しているな。

龍灣。」と続け様に「前に、今週中に私しゅあがタバコ買いに米花町に出かけていた時に

明杏達に遭遇し襲撃を受けた日にアレから・盗聴器と発信器を明杏の靴底に貼り付け

雷龍達に明杏達を追跡させていた訳。そうしたら・・・。」

雷外を見て「こいつが、運良く、お前達のこの、計画、話をしていたのを、録音、」

出来たッつうわけ通訳よ。」

そして、雷外ニヤリと笑い「残念だったな。」

と続け様に雷龍「今頃、貴方方の、標的、にしていたあのお2人は我々、ワカバ、が

、保護させて頂きましたよ。」

夏美「諦めるんだな。」

龍湾「クソッ！舐めやがって！」

そう言い再び夏美に突進してきた。

雷外「姉御ッ！」

雷龍「姉者ッ!!」



その時再び銃声が聞こえた。

龍湾にも左肩に銃弾が当たった。

夏美の右手には、隠し持っていた、サイレンサー付きの銃が握り締めていた。

と続け様に「本当は・・・使いたくなかったんだがな。」

と悲しそうに呟いた。

と同時に・・・香奈枝。悪いね。お前さんの「約束」やっぱり守れなかったよ。」

そして、夏美事前に着ていた赤のコートのポケットにハンカチで何十にもくるんだ

銃をしまって……。「じゃ……。ミレイ、任せたよ。」そう言いその場を去るつと

した。

すると、ミレイ「ねえ……？夏さん？」

夏美「ん？」

ミレイ「この4人……始末しなくて良いの？」

夏美フツと笑い「其処からは、私しゃあの仕事じゃねえ。」闇の始末屋赤龍と呼ばれた

「お前さんの仕事」だ。自由にしな。」と続け様に「やっぱり、私しゃあは、闇は似合わね

え」。表が一番、だな。」そつ言い雷龍達を連れて会場内に戻って行った。

第58章。沙江島財閥のパーティ当日での運命の時刻。（後編。）  
完。



第58章。沙江島財閥のパーティ当日での運命の時刻。(後編)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございました。

さて、次章はミレイがいよいよ、闇の始末屋、

として復活する所を書かせて頂く予定です。

と言いましても・・・舞台は変わりませんが(汗)

次章も今章と同様にお付き合い下されば幸いです。

オマケ。

ミレイ「……………」と続け様に

「次章もどつぞ宜しく。」

**第59章。闇の始末屋赤龍復活（前書き）**

今章はミレイが「闇の始末屋赤龍」として復活した所を書かせて頂きました。此方も長丁場です。

と同時に予めお断りいたしますが今章では

残酷なシーンも含んでおります。

その辺をご了承頂いた上で御覧下さいます様重ねて

お願い致します。

## 第59章。闇の始末屋赤龍復活

此処は、旧館の屋上。

アレから夏美達はその場から去り、そして、その場所には広州の4人にサイレンサー付きの

ベレッタを持ったミレイが居た。

そして、ミレイ事前に懐から取り出しておいた携帯灰皿にタバコを揉み消し、再びタバコを

取り出し火を灯しニヤリと笑い「じゃ……。夏さんも私の、好きにして良い、って

言ったから逆に……。残念だけど、あんた達、には消えてもらっわ。」

其れを聞いた龍湾は再び「な……。舐めやがって!!!!」そう言い今度はミレイに

突進して行った。

其れを見て愛蘭「お止めッ！！龍湾ッ！！」

ミレイ再びニヤリと笑い「御馬鹿な子。」と続け様に「バイバイ。」

そう言い引き金を引いた。

そして、その銃弾は龍湾の胸を貫きその場に倒れ込み龍湾は死んだ。

其れを見た愛憐「クソッ！良くも弟をッ！！」



そう言い懐からライフルとは別に銃を取り出しミレイに向けて発砲したが、

逆にミレイに返り討ちにされてしまいその場に龍湾と同様に「死んで行った。」

そしてミレイ明杏達を見て「さて・・残りは「あんた達だけ」。」

と続け様に「皮肉よね？あんた達を助けてくれる「同志」達は既に・・

夏さん達の所で「眠らせられた。」そして、あんた達の側に居た2人ももう、

「居ない」。」と更に続けて「もう「終わりよ。」」

そう言いベレッタの銃口を明杏達に向けた。

明杏慌てて「ね・・ねえ、赤龍！わ・・私達と、手を組まない？」

愛蘭「そ・・そうよ？て、手を組まない？」と続け様に「わ・・私達とて、手を組んだ

ら、こ・・怖いものなしよ？闇の世界を、制しましよ、ね？」と更に続けて

「だ・・だから、た、助けてね？」

ミレイタバコ吸いながらフツと笑い「残念だけど、一緒には、組めないわ。」

と続け様に「言ったでしょ？愛蘭、あんたは『私の実の兄の仇』。」  
と更に続けて

「私を縛り付けて良いのは、『ワカバ』と『ジン兄さん』だけ。  
……と。」

もう、良いでしょうか？『さようなら』。」「そう言いベレッタの引き  
金を引き

明杏達を『始末した』。

そしてミレイベレッタを素早く懐に仕舞い4人の遺体の『始末を』  
して証拠を素早く

『消した。』

そしてその場を後にしようとしたその時「良い仕事」したな。ミレイ。」

とミレイにとって聞き覚えのある懐かしい低い男の声でした。

第59章。闇の始末屋赤龍復活。完。

## 第59章。闇の始末屋赤龍復活。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はミレイがジンの兄貴様と再会する場面

を書かせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章と共にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

夏美タバコ吸いながら「ミレイの奴が・・

「闇の始末屋」として復活した・・か。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく!」

**第60章。ミレイと漆黒の闇との再会。（前書き）**

おはようございます。

今章ではミレイとジンの兄貴様がついに再会をします。

今章も前章、前々章と同様に長丁場ですので

ご了承下さい。

と同時にお詫びいたします。

当初は、園子も出る予定でしたが・

結局は出せないしまいました（汗）

園子のファンの方には申し訳ありません・・・。

（園子を何処で出して良いのかが・・・分からず、

また、園子についてのネタが・・・どうしても

思いつかなくて・・・汗。）

急遽‘用事’が出来てしまった・

と考えて頂ければ幸いです。

残りの連載でどちらかには出させて頂きたい  
と思います。

## 第60章。ミレイと漆黒の闇との再会。

アレから、ミレイは闇の始末屋赤龍として久々に、仕事、をし終わってその後その場を

素早く後にしようとしたその時後ろから、「良い仕事、したな。ミレイ。」

とミレイにとって懐かしい低い男の声がしてその声の主に振り向いて驚いて

「・・・ジ、ジン兄さん！」

其処にジンが居た。

ジンニヤリと笑い「、ようやく会えたな、、妹よ、」



ミレイ最初は只黙ってその場に固まっていた。

と同時にその場の雪を見て心の中で・・・。

ああ、やっぱり「外は雪」。

「夢と同じ天気」になってしまった・・・。

すると、ジンミレイに近づいて来た。

ミレイはジンが自分に近づいて来ても只その場から動こうとしなかった。

と言つより、動けなかった。

まるで・・・金縛りにあつたかのように・・・。

そして、いつの間にか吸っていたタバコが口から落ちていた。

そして雪でいつの間にか火が消えていた。

ジンそのミレイの様子を見てニヤリと笑い「どうした？ 逃げないのか？」

ミレイその声を聞き我に戻りフツと笑い「逃げられない」いえ・・・  
・逃がすつもり」

は無い。『そうでしょ？』

ジンタバコに火を灯し再びニヤリと笑い『分かってるじゃねえか。』

と続け様にミレイの頭を軽く撫でて『その通り』だ。』

ミレイ

ああ……。

もう、『闇』に戻らなければいけない見たいね。

ごめんね。

兄さん・・・。

そして、大学の皆。

せつかく・・・仲良く、してくれたのに・・・。

ごめんね。

やっぱり・・・。

私は……。

すると、ジン自分の腕の中にミレイを抱き寄せ耳元で、「こっち側に戻って来い。」

「ミレイ。」

ミレイにとってその声は何故分らないが……。

「とても心地良かった。」

と続け様に、「表は所詮……お前を闇の追っ手から怯えさせるだけ。何だぜ？」

と更に続けて「お前には、闇が一番良く似合う。」

「ミレイ」……「かもね。」

と小さく呟いた。

ジンその声を聞き逃さなかった。

ジンは再びニヤリと笑い無言のままミレイの頭を再び撫でた。

そして……。

ミレイを連れてその場を後にした。

一方、広州は玲々兄弟と明杏の「訃報」の報告を受けていた。

そして、ミレイを諦め・・・。

どこかに行方を「眩ませて」しまった。

と共に、杯戸シティホテルに居た残りの広州のメンバーも居なくなっていた。

そして・・・。

何時の間にか夜の10時になって沙江島財閥のパーティーは終わって行った。

広州の‘狙撃’から2人の‘標的’を何とか守り抜いたワカバはアジトに報告を終え

そして、その‘標的’になった2人とその身内に事情を話し、ワカバで‘保護’する事に

なった。

その後もその他のパーティ客達もそれぞれの自分の家に戻って行った。

一方、ミレイはジンは路地裏でウォッカ達と合流し黒のポルシェ356Aに乗り

ミレイの自宅へと向かった。



そして……。

ミレイ自身が「表から」再び「闇へと」戻りつつあった。

第60章。ミレイと漆黒の闇との再会。完。

第60章。ミレイと漆黒の闇との再会。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて・・・この小説もいよいよラストスパートに

近づいてきました。

次章は、ミレイの闇への帰還前について書かせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸い

です。

オマケ。

ミレイ「 ついに見つかったか。 」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

第61章。ミレイ闇へ帰還前。（前書き）

今章は、ミレイを中心として書かせて頂きました。

最後辺りには赤井さんや夏美が電話でやり取りしています。

此方も長丁場です。

ご了承下さい。

## 第61章。ミレイ闇へ帰還前。

アレから、広州の‘暗殺計画’を無事にワカバと同じ様に阻止した  
ミレイはジンの愛車である

黒のポルシェ356Aに乗り米花町の自宅へと戻って行った。

此処はミレイの自宅の中。

ミレイは着替えて荷物の整理をしていた。

そして、ベット側にあった写真盾を取り兄の写真を見た。

ミレイ「・・・琢磨兄さん。物凄く遅くなっただけど兄さんの‘仇討’  
したよ。」

と続け様に「だから・・・安心して眠ってね。」

所詮仇討しても・・・死んだ人間は、もう二度と、戻って来れない。  
、 そんな事

、 分かっていたはずなのに。 だけど・・・闇に生きる人間は  
、 そんな事は

、 関係なかった。  
、

そして、ジンがリビングに入って来た。

ミレイジンの気配をしリビングに向かった。

そして・・・。

ジン「荷物の整理か？」

ミレイ頷いた。

ジンニヤリと笑い「その様子だともう、腹は決まった、様だな。」

と続け様に「だが、せっかくだから大学には行かないとな。」

ミレイ「え？良いの？」

ジン頷いた「だが、多分転学になるだろうな。」と続け様に「多分、今のお前の大学の

友達<sup>たち</sup>はお前が、危なねえ仕事<sup>」</sup>している事を薄々<sup>」</sup>勘付いている、らしい

からよ。」

ミレイ「・・・そっか。」そう言いジンの腕の中に飛び込んだ。

ジンそれを見てフツと笑い「どうした？」

ミレイ「ううん。只・・・こうしたかった」だけ。」

と続け様に「駄目？」

ジン再びフツと笑い「構わなねえぜ」。

そう言いジンミレイを抱きしめた。

一方、此处はミレイの自宅前からちよつと離れた所。

其処には黒のシボレーが止っていた。



赤井が電話をしていた。

「え？ミレイが？其れ・・・本当ですか？秀さん？」

その相手は夏美だった。

赤井タバコに火を灯しながら「ああ。『間違いない』。あの沙江島財閥のパーティーが

あった時に暗殺計画に加わった広州の4人のメンバーを龍崎ミレイが始末してその場を

後にしようとしたその時に偶然にもジンと再会し、ジンが龍崎ミレイに『揺さぶり』を

掛けた見たいだ。」

夏美「……成る程。」

赤井「で？これからどうする？」「止めるか？」

夏美「其れは……ミレイ自身が決める事」でしょう。我々がこれ以上「関与」したら

ミレイ自身も「嫌がるでしょう。」

其れを聞いて赤井「お前は、それで……良いのか？」

夏美「ツと笑い」「ミレイはずっとずっと、闇で生きてきた、彼女の居場所はもう」

どつやら「闇しかなさそうですから」。

赤井「・・・そうか。」

と続け様に夏美「でも、私は、表、で生き続けますよ。私を闇から救ってくれた香奈枝の為に」

も。」

赤井其れを聞いて「ほう・・・じゃ、ジン共、別れる、んだな？」

夏美「そ・・・其れ、別、ですよ！、別、！」

と慌てて言い返して「あ・・秀さん。ソロソロこれから出かける予定なので。」

赤井「ああ。長時間悪かったな。夏美。」

夏美「いいえ。」と続け様に「それでは・・。」

そう言い携帯を切った。

そして、夏美はオウガ達に、ミレイの闇帰還の事を伝えた。

と同時に前みたいにタバコを買いにそして・・・有理の誕生日祝いのプレゼントを

買いに愛車の青ベンツを走らせ米花町にある米花デパートに向かった。

しかし・・・。

これが、夏美の「最後の姿」となる事を誰も予想出来なかった。

第61章。ミレイ闇への帰還前。完。



第61章。ミレイ闇へ帰還前。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はミレイが最終米花女子大学の生活前  
を書かせて頂くと共に・・・夏美の身に再び

‘何かが起こります’。其れは取り合えずお楽しみと  
言う事で。

それでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

ミレイ「・・・どうやら。此処で終わりだね。」

真理恵「・・・ミレイさん？」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願い致します。」

第62章。ミレイ最後の大学生活前そして・・・夏美・・・の死。(前編)(前書

今章も長丁場でそして残酷なシーンが入っております

その辺もご注意しながら御覧下さい。



第62章。ミレイ最後の大学生活前そして・・・夏美・・・の死。（前編。）

アレからミレイは自分の自宅でジンとそして後から合流したウォツカ達と過ごしていた。

一方、アレから赤井との電話を終えた夏美は愛車の青ベンツを走らせて米花デパートに

行ってタバコとその後有理の誕生日のプレゼントを買った。

936

三日月のイヤリングだった。

夏美喫煙所で「やっぱ・・・ネックレス」と「おソロ」の方が良いよな。」

と同時に「仕事も終わったし、ようやくあいつを、構ってやれる」。

「  
そう・・両親が広州に、散らされて、以来夏美は、ワカバ、の仕事  
でろくに妹に

構う事が出来なかった。

夏美「・・・此れでひと段落だが・・・」

有理と過ごせる時間が作れるし・・・。

ジンの下にも戻る事が出来る。

そう思い喫煙所の灰皿にタバコを消し有理への誕生日プレゼントを  
持ち喫煙所を出て駐車場に

向かった。

そして駐車場に付き愛車でアジトに向けて走り出した。

すると夏美タバコに火を灯し「ん？」

あ・・・アレは?!

黒のクラウン!

と言う事は・・・チェンラン?!

そう、この車は黒のクラウン234C。

夏美の両親を死に追いやった。

広州の討伐隊の体調であるチェンランの愛車だった。

夏美は急いでその後を追った。

チェンランサイドミラーを見てニヤリと笑い「夏美シヤアアメイか。」

そう言い米花港へと向かった。

夏美「あつちには米花港。」

と同時に何故・・・奴は？

そう疑問に思いながら両親の無念を晴らす為に追い続けた。

逃がすかよ！

と続け様にごめん・・・皆。ちよいと帰り遅くなるわ。

そうワカバの仲間に謝っていた。

そして、米花港に着き1つの倉庫を見たその倉庫前にはチェンランの愛車の黒クラウンが

止っていた。

夏美「・・・此処か。」

そう言い青ベンツを止め降りその倉庫の中に入って行った。

次の瞬間・・・！

ドシュッ！！

槍が夏美を貫いた。

夏美の胸から血飛沫が舞った。

夏美タバコを床に落としてまってそしてその槍を見て軽く舌打した後フツと笑い

「死の槍、か。」

すると、チエンランが現れた。

夏美「・・・ひ、久しぶりだね。チエンラン。な、何故？お前が・・・？」

チエンランフツと笑い「あの時の我等の計画の『邪魔と』そして・  
メイラン様の

ご命でね。」と続け様に「私の所』に完全に従わず戻らなかった  
ら・・・。

『殺せ』との事を言われたのよ。」

夏美「・・・そ、そうかい。」

チエンランクスと笑い「貴女がいけないのよ。メイラン様の下に戻  
らない『貴女』が。」

ワカバの所にいる限り両親と同じ『運命を辿るのよ。』」

そう言い後ろを向いて「さようなら。』」とその場を後にした。



そして、倉庫内には夏美只1人取り残されていた。

夏美壁側に身を下ろすと再びタバコに火を灯し、懐から携帯を取り出し、メールをうち

始めた。

一方、此処はワカバのアジト。

オウガの部屋にはぼメンバーが集まっていった。

その中に勿論服部とコナン。

そして、ミレイの自宅から出て来たジン達も居た。

すると、ライカが夏美の「気」が不安定そして・・・消えかかっている事を感じた。

オウガの側に居た1人の女性かがライカに声をかける。

「ライカ？どうしたの？」

ライカ「・・・相棒（夏美）の気が「不安定」になり「消えかかっているよ。」

姉様。」

ライカに声をかけた女性の名はレイカ・ネアン。ライカの実の姉であり、ワカバの副首領であ

り、オウガの恋人。

レイカ其れを聞いて驚いて「な・何ですって?!それ・本当なの?!ライカ?」

ライカ頷き「けど・探しに行こうにも夏美の場所が・。」

シュウワイ「そう言えば・夏姉。タバコと有理ちゃんの誕生日のプレゼント買いに

米花町にある米花デパートに行くって言っていました。」

ライカ「そうか。だが・・相棒のこった。用事が終わったら喫煙所でタバコ吸い終わった」

後すぐにデパートから出てくるだろうよ。」

すると、ジン「オウガ。あいつに発信器付けてねえのか？」

オウガ頷き「ああ。あいつは基本的にプライベートは邪魔されるのが嫌いな奴でな。」

ジンタバコに火を灯し「クソッ！」

すると、コナン小声で「おい。服部。」

服部小声換えして「何や？工藤？」

コナン小声で「突然で悪いがバイクあるか？」

服部小声で返して「ああ。あるで？」と続け様に「まさか・・・？工藤？お前、あいつの場所

分かったんか？」

コナン頷き小声換えして「ああ。あいつには悪いんだが、ちょっと嫌な予感が」してよ。

あいつの愛車である青ベンツに発信器を忍ばせてもらったんだ。」

服部其れを聞いて小声で換えして「そ・其れは朗報や！それで場所は？」

コナン小声で誰にも見えないように追跡メガネのアンテナを伸ばし  
「米花港。」

服部小声換えして「おっしゃ！」

そつ言い服部「オウガハン！ちよいと出てきますわ！」

オウガ「何処へ行くんだい？平次君？」

コナンニヤリと笑い「分かったんだよ。オウガ様。夏美姉ちゃんの居場所が！」

オウガ「何?! 其れ本当か? コナン君?!」

コナン頷き「米花港。此処に今夏美姉ちゃんがいる。」

ライカ「其れは朗報だ!」と続け様に焦りをも見せ「は、早く行かないと・・・相棒が・・・。」

するとライカの携帯が鳴った。

ライカデニムの左ポケットから携帯を取り出し「夏美?」

そしてメールを見て「!!!」

ライカ。

今まで有難うな。

お前さんが幼馴染そして相棒で本当に良かったよ。

夏美。

ライカ「夏美?!」

するとジンがライカの側により「どうした?」

ライカ「ジンの兄貴様。相棒から・・・。」



ジン「見せてくれ！」　そう言いライカから携帯を借りて「！！！」

と続け様に「・・・」　「今まで有難うな。」　「お前さんが幼馴染でそして相棒で良かった」

よ。」　「だど？」と続け様に「縁起でもねえ事言いやがって！」と続け様に「ウオツカ！」

ウオツカ「ヘイ！兄貴ッ！」

ジン「車の鍵寄越せ！」と続け様に「おい！江戸川コナン！」

コナン「な・・・何？」

ジンコナンを見て「夏美の場所米花港だったよな？」

コナン頷いた。

ジン「俺も行く！東西探偵組は俺の車に乗れ。」

と続け様に「ウォッカとベルモットはミレイの側に居てやれ！」

ウォッカ「了解しやした！兄貴ッ！お気をつけて！」

ベルモットも頷いた。

そして、ジン服部達を連れて黒のポルシェ356Aの所に向かおうとした

と同時にライカ「ジンの兄貴様ッ！お待ち下さい！」

ジンライカの声を聞き止って「お前も・・・来るか？」

ライカ頷いた。

ジンフツと笑い「だったら、急げ！」

ライカ頷き「有難うございます。」

そう言いオウガ達に一礼をして部屋を出てジン達と共に黒のポルシ  
E356Aに

乗り込み米花港へと向かった。

ライカ「・・・頼むッ！相棒ッ！ぶ・・・無事で持ってきてくれよう！！！」

と叫んだ。

第62章。ミレイ最後の大学生活前そして・・・夏美・・・の死。（前編）完。



第62章。ミレイ最後の大学生活前そして・・・夏美・・・の死。(前編)(後書

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はこの後編を書かせて頂く予定です。

今章も次章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

有理「・・・姉さん？」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく。」

第63章。ミレイ最後の大学生活前そして・・・夏美の・・・死。(後編)(前書

此方も急ではありませんが・・・個人的に修正しないといけないと感じた部分があった為

一先ず此方も訂正させて頂きました。申し訳ありません。

しかし、内容はさほど変わっていないと思います。

今章も前章の続きです。

今章も前章に引き続き残酷シーンありの長丁場です。

御覧頂く際にはどうぞお気をつけて・・・。

第63章。ミレイ最後の大学生活前そして・・・夏美の・・・死。（後編。）

此処は、米花港のある倉庫。夏美はチェンランを追っている内に、死の槍。を喰らって

ほぼ‘瀕死’の状態に近かった。

夏美は自分に突き刺さっていた死の槍を手で抜き取った。

と同時に痛みが走る。そして・・・。

夏美タバコ吸いながらフツと笑い「・・・此れで良い。誰にも見ないように。そして・・・

そっと・・・。「そう言い今度はデニムの左ポケットから写真を取り出した。

その写真にはとある日に夏美の地元にある若葉町のある丘だった。



其処に写っているのは父大樹。そして、母楓、夏美、有理の写真。

夏美「……………ごめんね。父さん。母さん。ど、ど、ど、ど……約束は……………」

‘果せそうに無い。’

有理。

どうか、許して欲しい’。

こんな、身勝手な姉を、’

そして、誕生日祝ってやれなくてごめんな。

私のたった一人の愛しい妹よ。

そして「ごめんね。ジン。」

「どちら私じゃあは貴方より、先にくたばっちゃう見たい」。

そして・・・平蔵さん。平さん。

せっかく助けて頂いたこの「命」無駄にしてすみませんでした・・・。

コナン。

いや・・・今はこう呼ばせてくれ。新。

色々と世話かけてすまんかった。

お前さんと一緒にいると物凄くワカバの皆同様楽しかったよ。

早く蘭さん所に戻れると良いな。

でも、ジンをあまり追い詰めないでよ。

兄様。そして、姉様<sup>レイカ</sup>。

色々のご迷惑、ご心配ばかりお掛けして申し訳ありませんでした。

ワカバの相棒達（仲間）今まで有難うよ。

すると、独特のエンジン音がした。

夏美「・・・！！ま、まさか？！！」

この独特のエンジン音・・・。

黒のポルシェ356A？！

ライカ「相棒ッ！！！！」

夏美「!!！」

ラ・ライカ?!

コナン「ライカ姉ちゃん!夏美姉ちゃんがいる倉庫は此処だよ!だから、夏美姉ちゃんの

愛車である青のベンツが止っているもん!」

とコナン1つの倉庫を指をさす。

そして、ジン「夏美ッ!」

叫びながらその倉庫に入って行った。

それにつきライカと服部達も入って行った。

コナン

クソッ！！死なせるかよッ！あいつには・・・あいつには妹がいるんだぞッ！！

灰原みてえに・・・悲しい思いさせっかよッ！！

頼むッ！！夏美ッ！！

逝くなッ！！

そして、一足早く倉庫に入ったジンが見た光景とは胸から血が大量に出ていたタバコを吸った

夏美の姿だった。

ジン「な・・夏美ッ！！しっかりしろッ！」

そう言い夏美を自分の所に抱き寄せた。

夏美「ははっ。ざ・・様内ね。こ、こんな『姿』を『恋人』に見られてしまうなんて。」

とタバコを吸った状態で言った。

するとライカ「相棒ッ！」

そしてライカもその夏美のその姿を見て驚いた。

ライカ「あ、相棒？」

夏美ニヤリと笑い「よ・・・よお！相棒！」

いつもの様に明るく振舞う。

と続け様に「ど、どうしてこの場所が分かった？」



ライカもタバコにいつもの様に火を灯しコナンを見て「コナン君の発信器だよ。」

そしてコナン夏美の所に行き「・・・悪いな。お前が『プライベートの時間邪魔されたく

ねえつてのは分かっていたんだけどよ。何か『何となく嫌な予感がしてよ。』」

知らぬ間に何時もの新一口調で話していた。

ジン其れを聞いて少しばかりあるが驚いた。

夏美「や、やっぱ相変わらずお前さん凄いな。其れも『探偵の性』って奴かい?」

コナンフツと笑った「ああ。まあ・・・そんな所だ。』」

と続け様に服部も来て「・・・夏美。」

夏美「い・・・いやぁ申し訳ないです。平さん。こ・・・こんな無様な格好を・・・。」

とフツと笑いながら言った。と同時に申し訳なさそうな顔で「せつ、せつかくあの時

‘ 助けて頂いたこの命 ’ を・・・無駄に。」

服部「しっ・・・しっかりせえや！！夏美ッ！戻るやろ？！また・・・皆の所に！

それで・・・有理に‘プレゼント’渡すんやろ？！な・・・なのに？！  
こ、こんな所

でくたばったらアカンッ!!」と続け様にジンを見て「そして、仕事が一と段落したら

この男の所に戻るんちゃうか?!」と更に続けて「もし、お前に何かおつたら・・・

俺、親父にしばらく顔向けできんねん。だ・・だから、生きてくれや!!夏美ッ!!

頼むからッ!もう一度俺達に元気な姿そして、'やかましい'姿見せてくれや!!」

そう言い珍しく涙ぐんで叫んだ。

コナン「・・・服部。」

夏美再びフツと笑った後再び血を吐いた。

ジン「夏美ッ！」

ライカその様子を見て察しそして夏美の隣に落ちていた槍を見て舌打をした。

コナン「其れは？」

ライカタバコ再び加え直し吸って「前にも話した事あったよな。夏美のご両親の死に

ついて。」

コナン頷いた。

ライカタバコ吸いながら夏美の血が付いた槍の枝の部分を持って「こいつは・・・」

夏美のお母さんを死に追いやった。広州の討伐隊の隊長であるチェンランの

武器である槍だ。」

コナン「それを聞いて」「じゃ・・・ま、まさか?!」

ライカ「額き」「ああ・・・その、まさかよ。」

コナン「・・・死の槍。」

ライカ「こいつを喰らったら・・・確実に待ち受けるのは、死」。

恐らく夏美はデパート帰り後運悪くチェンランを見つけ追ったんだ。

そうしたらこの倉庫に入ったら行き成りこいつを喰らってしまったんだろうさ……。」

コナン其れを聞いて思わず固まってしまった。

ジン達もライカ達の話も嫌でも聞こえてしまった。

ライカ槍をその場に一先ず置き再び夏美の下へとコナンと共に歩いて行った。

すると夏美「……な、なあ。相棒？」

ライカ「あいよ。相棒。」

夏美「……最後の相棒の頼み事、聞いてくれねえか？」

ライカタバコを吸いながら夏美の所に膝を付き「私で良ければ・  
何でも来てやるよ。」

そして、夏美懐から愛車の鍵を取り出し「帰り運転してくれねえ  
か？私じゃあは

もう・・難しいと思うからさ。」と更に続けて「後部座席に・・白  
い袋があるから・・。

974

その中に小さな白い箱が入っていると思うから・・。そいつ、をい  
・妹の・・。

有理に渡してやって欲しい。」

ライカ夏美から夏美の愛車の鍵を受け取り「・・分かった。渡すと  
く・・。」

夏美其れを聞いて再びフツと笑って、「有難う、よ。」

そう言い携帯灰皿にタバコを揉み消した。そして服部を見て「……平さん。ご両親を

そして和葉さんを、大事にしてあげてくださいよ。」と更に続けて「こんな事……

私が言うのも何なんですが……くれぐれも、ご無理はなさらないで下さい。」

服部「……ああ。気いつけるわ。」

そしてコナンを見て「……大事にしてあげなよ。」、「彼女等」を……。

「彼女等」を……守れるのは「お前さんしかないんだよ。」と同時に一瞬



ジンも居たから本名で呼ぶのを躊躇したが・・・コナンを見て小声で「ごめんな。多分・・・」

これで「最後」だと思うから・・・好きな様に呼ばせてもらおうよ。  
新。」

コナン其れを聞いてジンに正体をばれるのを覚悟をしそしてメガネを外し

「バーロー。最後だ何て・・・。縁起が悪いぜ？」こんな「別れ方」なんざ・・・

本当は「したくねえ」んだがよ。夏美。」

ジンそのコナンの姿を見て一瞬驚いたが再び冷静を取り戻しフツと笑い

「やっぱり・・・お前、あの時俺がトロピカルランドでばらしたはずの・・・」

「東の名探偵だったか。」

コナン頷き「ああ。そうさ。お前にあの時毒薬を飲まされた工藤新一だ。」

ジン「ガキの姿になって・・・生きていたとはな。」

コナン（新一）フツと笑い「さすがのお前でも『驚いたか』？ジン。」

977

ジン「ああ。多少な。」そして夏美に再び顔を向けた。

ジン「・・・夏美。」

知らぬ間に涙が頬をつたっていた。

夏美顔にジンの涙が落ちて、夏美その様子を見てジンの頬に手をやり「どうしたの？」

「珍しいじゃない、貴方が人前で泣くなんて・・・。」と続け様に「それとも・・・。」

貴方、本気で、私を愛してくれていたんだ。」

ジン「当たり前だッ！！」と続け様に「お前、くたばんないよって言った筈だろう?!」

夏美ジンの頬から手を離し再びタバコに火を灯し微笑んで「ご・ご・ごめんなさいね。」

何せ・・・行き成り、だったから・・・でも、ちゃんと結果的には、貴方の腕の中、に

戻ったでしょ？」

ジン「ああ。」そう言い夏美からタバコを取ってそして夏美にキスをし再び

タバコを夏美の手に戻した。

夏美一瞬驚いたがすぐにフツと笑いタバコを吸い始めた。

そして「・・・ああ。何か、眠くなってきちゃった。もう、限界かな。」

ジン其れを聞いて「おいッ！夏美ッ！！寝るなッ！！このまま起きてろ！！！」

と続け様に「お前・俺を置いてくだばる気か?！」

夏美「……ごめんなさい。でも、**「限界」**。」と更に続けて「ねえ・  
ジン。私の

**「最後のお願い」**。」

ジン「……何だ?」

夏美コナンを見て「新が……生きていた事、組織には**「内密」**  
にしている

欲しいの。あいつも、あいつで、待たせている最愛の女ヒトがいるから・  
……。」

ジン「ああ。こいつがワカバを、裏切らねえ、んだったら内密にし  
ておいてやる。」

とコナンを見て言った。

ジン更に続けて「となると・・・夏美。こいつが生きていると言う事は・・・シェリーも生きてい

るんだろう？場所は何処だ？」

夏美再びタバコを口に加え直しそして「It's a big secret.....」

I'm sorry.....I can't tell you.....  
A Secret makes a woman woman.....  
.....」

と更に続けて息切れ状態で「あ、貴方と、あ・・・あの時偶然にもさ、再会した時に

いっ・・・言ったでしょ？わ、私はそ・・・組織には、深く関与、しない事になっているって

「……。」と続け様にライカを見て再びフツと笑い「……わ、悪い。  
あ、相棒……。」

さ、先に「逝く」。「そしてジンに「あ……有難う。あ……愛  
してるわ。」「ジン。」

そう言いそして服部とコナンには軽く挨拶してジンの腕の中で安ら  
かに「死んでいった。」

そして、夏美のタバコが手から床に落ちた……。

ライカ「お……おい？じよ、「冗談だろ?!あ、相棒?!お……おい  
ッ!目を開けてくれよ!」

相棒……相棒オオオオ~~~~~!」とそ  
の場の夏美の亡骸に

すがりつき泣き叫んだ。

ジン夏美の亡骸を強く抱きしめ「広州の討伐隊のチェンランツ！！  
俺が・・・必ず

‘地獄へと突き落としてやるぜ’！覚悟して置けよッ！」「そう叫び  
広州への‘復讐’を誓う。

服部拳を壁にぶつけ「く・・・クソオ！何でこいつが死ななきゃあ  
かんのやあああ！！！」

コナン「止めるッ！服部ッ！もうこれ以上・・・やったら手が赤くな  
るッ！」

コナンに止められて「ああ・・・すまんかった。工藤。ついな・・・。」



コナン「・・・服部。」

そして、ジン夏美の亡骸を自分の漆黒のコートに包み「帰ろうぜ。こいつを連れて

こいつが大好きだった‘ワカバ’によ・・・。」

ライカ自分が吸っていたタバコを携帯灰皿に揉み消しそして床から夏美の吸いかけの

タバコを拾い吸い始めて「そうですね。連れて帰りましょう。」。

そう言いチェンランの死の槍も事前に用意してあった漆黒の布に包み持ち帰った。

そして、ライカは夏美の愛車である青のベンツに乗り込んだ。

その後部座席には服部とコナン。

そして夏美の亡骸はジンの意向によりジンの黒のポルシェ356Aの後部座席に乗せた。

チェンランの‘死の槍’と共に・・・。

そして、2台の車はワカバへと戻って行った。

と同時にその2台の車を黒のシボレーが追って行った。

第63章。ミレイ最後の大学生活前そして・・・夏美・・・の死。(後編)完。

第63章。ミレイ最後の大学生活前そして・・・夏美の・・・死。（後編。）（後書

今章もお楽しみ頂き有難うございます。

さて、次章では再びワカバそして・・・

ミレイの最後の大学生活について書かせて頂く予定

となっております。もしかしたら・・・

赤井さんもひよっとしたら出てくるかもしれません。

尚・・・この第1作目では夏美さん‘亡くなりました’

が・・・書いている内に有理ちゃんが・・・

可愛そうな気がしてきましたので・・・。

尚・・・この小説で出てくる広州はどうなったかと言つと・・・。

恐らく時間上・・・書けませんでした。ジンの兄貴様の仕打ちを受  
けたと思って頂ければ

幸いです。。。

第2作目と3作目の（連載）では死なせずに・・・

そのままご登場と言っ事にさせて頂こうと思っております。

夏美さんスマンッ！（汗）

と同時に次章もどうぞ宜しくお願い致します。

オマケ

夏美「おいおい・・・堪忍してくれよ。汗」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願い！」

**第64章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後**

今章は夏美がワカバに無言の帰還をします。

今章も前編後編で長丁場となっております。

予めご了承ください。

第64章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後

此処は、ワカバ。

ライカはオウガに夏美の訃報にの事について報告していた。

オウガ「……………夏美の奴が、死んだ、だと？」

オウガは驚きを隠せないで居た。

其れはオウガの部屋に居たワカバのメンバーも驚いていた。

ライカ「…はい。デパート帰り後運悪くチェンランと遭遇してしまったそうです。」

と同時にオウガに一礼して「申し訳ありませんでした！兄様にいッ！」

オウガ「・・・いや。お前のせいではない。自分を責めるな。」

と同時に「夏美は？」

ライカ「ジンの兄貴様が・・・うちの遺体安置場所に・・・。」

オウガ「・・・そうか。」

と同時に、大樹、楓・・・すまん。



お前達と「約束」したのにな・・・。

そして、雷龍拳を握り締めて「・・・姉者。」

雷明も涙を堪えながら「・・・姉上様。」

2人とも自分の主・・・そして姉貴分を守れなかった事を心の中で悔やんだ。

そして、ジンが部屋に入って来た。

ウォツカ、ベルモットジンに気が付くが何て声をかけたら良いか分からなかった。

するとレイカ「・・・この事、有理には？」

ライカタバコにいつもの様に火を灯し「いや・・・まだ、伝えていない」。

と続け様に「伝えない方が、返って良いかと思うんだ。姉様。」

レイカ「・・・そう。」

すると、人の気配を感じた。

ライカ「・・・誰だ？」

そう言うと服部が「俺が見てくるわ。」

そう言いドアを開けた。

すると其処には信じられない顔をした有理がその場に立っていた。

ライカ「・・・ゆ、有理。」

有理は只何も言えずにその場に立ち尽くしていた。

そして……。

有理しばらく沈黙した後「ね・姉さんが『死んだ』って本当？ライカ姉さん？」

とライカに聞いてきた。

ライカ其れを聞いて只黙っていた。

有理部屋に勢いよく入ってきてライカの両腕をつかんで「ねえ・？本当なの？！」

教えてよッ！ライカ姉さん！」

と詰め寄った。

そしてライカ有理の顔を見る事出来ずに小さく頷いた。

有理「・・・そ、そんな。姉さんが・・・。」

そう言いライカに居場所を聞いて夏美の遺体が安置されている遺体安置所まで急いで行った。

するとシュウワイ「ゆ・・・有理さんッ！」

と有理を追おうとするが、オウガに「止める！1人にしてやれ。」

其れを聞いたシュウワイ頷いた。

しかし、オウガも有理の事がどうしても気になりモニターを確認をした。

一方、有理は遺体安置所に居て夏美と対面していた。

無言のままの姉。

それでも有理は何かを話そうとしていた。

有理「・・・姉さん。お帰り。」と続け様に姉の顔を触り「ねえ・・・姉さん？これ、

演技」だよな？また・・・起き上がって「有理」って、呼んでよ。」

しかし、夏美からは何も返事が戻って来ない。

それでも有理笑顔で「ね・・・ねえ。姉さん。起きてよ。ねえ・・・。姉さん。」

お願いだから・・・起きて・・・ねえ・・・今日私の「誕生日」なんだよ？

姉さんと同じ20代になったんだよ？一緒に「お酒飲もう」って・・・昔だけど・・・

‘約束したよね’？」「しかし・・・何も返事が返ってこない。

次第に、有理ようやく、‘姉が死んだ’事を理解する。

有理涙を流し「・・・姉さん。お願いだから、一人にしないでツ  
’って

言ったのに・・・。「そう言い夏美の遺体にすがり付いて」・・・姉  
さん。夏美姉さん・・・。

ねえさあああああん！！！！」と思いつきり泣き叫んだ。

すると有理はふと昔に両親が逝った時の夏美の言葉を思い出した。



（有理が物凄い悲しんでいる所に夏美が来て

「大丈夫だ！姉さんが付いているッ！だから・・・だから・・・もう泣くな！」

今度は、姉さんがお前を守ってやるからな。だから・・・安心しろ。  
）

と笑顔で。

有理「・・・姉さん。」

すると夏美の声が聞こえてきたような気がした。

「有理。ごめんな。あの時守ってやるって約束したのに・・・もう、側に居てやれなくて。」

本当にごめんなー

と有理はしばらく夏美の遺体から離れようとはしなかった。

一方、ミレイは、ワカバでの夏美の訃報を聞いた後ウォツ力達に断りを居れ

大学にいつて行った。

そして、ミレイ最後の米花女子大学での生活が始まった。

第64章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大  
学での最後。(前編。)

完。

**第64章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後**

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の後編を書かせていただきます。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

有理「……………」

「次章もどうぞ宜しくお願いします。」

第65章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後

今章は前章の後編です。

此方も長丁場であり暗い話です・・・。

ご観覧頂く際にはご注意を。

第65章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後

此処は、米花女子大学何時もの様にミレイは授業を受けていた。

其れも、此処での最後の授業、。

そして、ミレイ心の中で……。

雪音姉さんやそして……琢磨兄さん、夏さんまで、居なくなっ  
てしまっただ今、

私自身が、表の世界、に留まる意味もない……。

いめんね。

雪音姉さん。

姉さんが、ジン兄さんにあの時、殺されていたのに、それで……  
闇から逃げ出して

来たのに……、結局は……。

私は……。

「闇の方が心地良い」。

だって……私は。

元々は‘闇の人間’。

と呟いた。

そして、私の心の中で、闇の声がした。

ワタシハ、ウマレモソダチモ、ヤミ’。

ダカラヤミカラヌケダスコトハナカナカ、ムズカシイ。

ワタシノココロノヨリドコロハシヨセン、ヤミノナカ’。



すると、1限の授業も終わり・・・そして、2限の授業も終わり、

そして、ミレイにとって最後の授業である3限が始まりそして・・・

終わった。

すると、真理恵が何時もの様に寄って来た。

「ミレイさん。」

ミレイ「ああ。沙江島か。」と続け様に「13日のパーティ有難うな。」

真理恵「いいえ。此方こそ態々来て頂いて有難う。」と続け様に「  
ねえ・・・ミレイさん。」

ミレイ「何？」

真理恵「映像上映前から姿見えなくなっただけど・・・何処に行つて  
いたの？」

ミレイ「其れを聞いて」ああ。ちよいとね。」

とはぐらかした。

真理恵「・・・そう。」

そしてカノンも来て真理恵にパーティの件でお礼を言っていた。

そしてミレイ事前に帰り支度を済ませて「じゃ・私じゃあは此れで。」

そう言い教室を去って行くとしたその時カノン「ミレイ。」

ミレイ「ん？」

カノン「今日・・・やけに何時もより荷物多くない？」

ミレイフツと笑い「そうかい？ 気のせいだよ。」と続け様に「

「じゃね。」

そう言い今度こそ教室を去って何時もの様に喫煙所に向かいタバコを吸い始めた。

そして、ブロンドの髪の女性が入って来た。

「ミレイ」・・・ベルモット姉さん。」

ベルモット事クリス・ヴィンヤード。

「あら？その荷物の多さ・・・。どうやら、もう、・・・。」とクスと笑った。

ミレイ頷き「ああ。もう、表には用はないからね。」

と続け様に「どうして？分かったの？」

ベルモットタバコに火を灯し再びクスと笑い「何となくよ。ジンから既に聞いていたからね。」

貴女が、闇に戻る、事を。」

ミレイタバコ吸いながらフツと笑い「そうかい。」と続け様に「でも、今回は普通に」

答えてくれたね。」と更に続けて「何時もの『口癖』が出てくるか  
と思ったよ。」

ベルモットクスと笑い「ああ。『A Secret makes  
a woman woman』でしょ？」

と続け様に「そう、言っただけじゃなかった？」

ミレイ「ううん。特に……。」

そう言いタバコを消し「んで？ベルモット姉さんが此処に居るって  
言う事は……。」

ベルモットもタバコを消し「ええ。貴女の『迎え』。」と続け様に  
「ジンに頼まれてね。」

ミレイ「有難う。」

そして、ベルモットミレイの荷物を持ち「じゃ・・行きましょうか？」

ミレイ頷いた。

そして大学の路地裏に止めてあったベルモットの車で1度ワカバに戻る為

ワカバに向かった。

一方、此処は再びワカバ。

有理はアレからずっと遺体安置所に居たが一先ず自分の部屋に戻って行った。

その後、赤井が入って来た。

赤井「・・・夏美。」

「大丈夫ですよ。私はそう簡単には、くたばりません、」って。広州を完全につぶす

まではね。-

そして夏美の顔に手をやり、「くたばらない、」って言ったくせに・・・  
そう簡単に



「くたば」っちまって。お前は・・・何処まで・・・。」

一人で背負い込み・・・一人で・・・。

そして夏美の笑顔が赤井の脳裏に蘇って来た。

赤井「・・・・・・・・お疲れさん」。妹よ。」

そう夏美は赤井の「妹分でもあった。」

だが、FBIの仕事等でろくに構う事が出来ずにいた。

赤井フツと笑い「こうなるんだったら・・・もっと、お前を構ってやれば良かったな。」

と同時にまじめな顔になり「・・・すまない。夏美。」

そして、有理が再び遺体安置所に戻ってきた。

有理「あ。」

赤井「よ！有理。」

有理「・・・秀一兄さん。」

と続け様に「来てくれたんだ。」

赤井「ああ。」

そして、有理行き成り赤井に飛びついた。

赤井「……有理。」　　「そう言い有理を只抱きしめた。

一方此処は再びオウガの部屋。

オウガは未だにモニターを見続けていた。

オウガ「・・・赤井。」

と続け様にレイカ「彼もあえて、危険な事、するわね。ここにはジン達も居るのに・・・。」

オウガ「ああ。そうだな。」と続け様に「とまあ、あえて、危険を冒して、まで・・・。」

夏美に会いたかったんだろうさ。」

ジントバコに火を灯し「奴と夏美の関係は？」

オウガ「赤井と夏美は兄妹分だったんだ。」

其れを聞いてジンタバコを吸いながら・・・。

「ほう。そうか。でも、夏美は俺に一言も言わなかったぞ？」

オウガ「言いたくても、言えなかった、んだろうぜ？何せお前の所の組織と」

赤井が所属しているFBIは、敵同士、だからな。」

「ジン其れを聞いて「たく・・・それだけじゃ、怒らねえ」のによ・・・。」

すると「あら？果たしてそうかしら？」

とベルモットの声がした。

ジン「・・・ベルモット。」とそのドア越しで言った。

するとベルモット、ミレイと共にオウガの部屋に入って来た。

ベルモットクスと笑い「貴方の事だから、お気に入り、ちゃんを敵に取られるのは

かなり嫌がると思うけど?」

ジンベルモットを睨みつけて「・・・テメエ。」

そう言いベレッタの安全装置をはずした。

その音を聞いてミレイ慌ててジンの所によって「お・・・落ち着いて  
！ジン兄さんッ！！」

ベ・・・ベルモット姉さんも悪気はなかったのよー！」と必死で宥め  
た。

ジン「ミレイ。」そう言い安全装置を元に戻した。

其れを見たベルモット再びクスと笑い「あら？ミレイの前では、素  
直、なのね？」

ジン「・・・うるせ。」

ウォツカ心の中で・・・。

ミレイの姉さんすげ・・・。

あの兄貴を一瞬で・・・。

すると、ジンウオツカを見て「何を考えていた？ウオツカ。」

ウオツカ「い・・・いえ。特に何も。」

と慌てて弁解した。

そしてミレイオウガの所のモニターを見て「本当に・・・夏さん居なくなっちゃった。」

んだ・・・。」と悲しそうに呟いた。

オウガその様子を見て「・・・ミレイ。」



ジン達もミレイのその様子を黙って見ていた。

一方此処は再び遺体安置所。

有理は赤井から離れた。

そして赤井「それで？お前これからどうするんだ？」

有理「・・・姉さんの『拳法』受け継いで此処にずっと『留まろう』  
と思う。」

赤井其れを聞いて「だが、姉は・・・そう『望んでいない』んだろっ  
？」

有理「・・・かもしれない。だけど、姉さんはお父さん達の、意思を、受け継いだ。」

「逃げてばかりでは、何も、変わらない。」だから・・・。」

赤井「本家」には戻らず、ワカバ」に居る。そう言う事が・・・。」

有理頷きそして、再び夏美の遺体の所に向かいそして左腕に手を乗せ

「姉さん、私が今度は、お父さん達の拳法を受け継ぐよ。」其れと同時に

「姉さんの意思も」・・・。「そう言いそして」「拳法伝承術。」

すると夏美の左腕から有理の左腕へと光が渡った。

「こうして有理は両親と姉の、意思を受け継いだ。」

赤井は只黙って其れを見ていた。

と同時に、夏美・・・有理はお前が思っているより、強かったぞ。

そう心の中で再度呟いた。

そして有理「姉さん。ごめん。でもね・・・これは、私の意思、でもある。これから

ワカバの為に頑張るよ。」

そして、赤井再び有理に近づき軽く頭を撫で、「姉みたいに一人で背負い込むな。」

もし何かあったら俺で良ければ、相談、しろよ。」

其れを聞いて有理笑顔で「有難う。秀一兄さん。」と続け様に「私、此れからお兄様（オウ

ガ）の所に行くけど・・・秀一兄さんも来る？」

赤井フツと笑い「・・・いや。俺は、遠慮させてもらうよ。」と続け様に

「もしかしたら、奴、と鉢合わせになるかもしれないからな。」

（奴＝ジン）

有理「・・・そっか。なら、仕方ないね。」

そして2人して遺体安置所から出て有理缶コーヒーを赤井に渡した。

有理「はい。秀一兄さんの好きなブラックコーヒー。姉さんに会ってくれたお礼。」

赤井「有難うな。」と続け様に「しかし、良く分かったな。俺がブラック好きなの。」

有理「姉さんが言っていたの。秀さんコーヒーはブラックしか飲まないんだよってね。」

赤井再びフツと笑い「・・・そうか。」

あいつ・・・覚えていたのか。

有理「あ、もし出るんだったら、裏口、から出た方が良いよ。」

と一つの裏側のドアを指差した。

赤井「そうさせてもらおう。「そう言い」じゃ・・・またな。有理。」

有理頷き「うん。またね。秀一兄さん。」

そう言いオウガの部屋に向かった。

そして、オウガの部屋に付き入って行き夏美の「葬式」についての説明を受けた。

第65章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大  
学での最後（後編。）

完





第65章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後

今章もお付き合ひ下さり有難うございます。

さて、次章は夏美との最後の別れを書かせて頂き

たいと思います。この小説も後残り・・・わずかに

迫ってきました。其れでは次章も今章と同様に

お楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ライカタバコに火を灯し「次章もどうぞ宜しく。」

**第66章。夏美の葬式そして、有理の姉への想い。（前書き）**

今章は、夏美の葬式の場面と有理の姉への想いを  
書かせて頂きました。此方も暗い話また長丁場に  
なっておりますのでご観覧する際にはご注意と  
ご理解とご了承をお願い致します。

**第66章。夏美の葬式そして、有理の姉への想い。**

そして・・・。

2月16日（火）夏美の葬式が始まった。

場所は勿論ワカバの火葬場。

急遽服部の連絡で大阪から大阪府警本部長である父平蔵とそして和葉の父である

遠山刑事部長も駆けつけた。そして、夏美と有理の実家である橘家の本家の人達も。

勿論。ワカバのメンバーそして、有理。ジン達もその場に居た。

だが・・・赤井の姿は何処にも見当たらなかった。

恐らく、此処でジンと鉢合わせになったら大変だろうと思い自粛したのだろう。

そして、葬式の最後にオウガが皆に挨拶をしそして夏美自身にも、最後の言葉、を

かけた。

そして、有理も涙堪えつつも・・・夏美の笑顔に写っている遺影を見て

「・・・見て。姉さん。今日はね、こんなにも大勢の方が、来て下さったよ。」

と続け様に「私も昨日で20歳になりました。一応、大人の仲間入り」と

言う事で此れから私も、自分の意思、でこのワカバに留まる事を決めました。

と同時に「お父さん達の意味」、そして「姉さんの意思」、を受け継ぎます。

だから・・・どうか。どうか。安らかにね。「と更に続けて「今まで「本当にお疲れ様でし

た。」そう言い夏美の遺影に一礼してその場から離れた。

そして、オウガ平蔵の所に行き声をかけてやってください。と頼まれ夏美の遺影の所に

足を運び「・・・夏美。久しぶりやな。まさかお前との再会が「こんな形」で実現してしまう

とはワシ夢にも「思ったらなかった。」と続け様に「お前の訃報は・・・。平次から聞いた

た。最初はワシも信じる事が出来へんかったんや。何せ・・・お前は

‘あの時’と同様に

‘そう簡単にくたばりは’しないと思っもみいひんかったからや。  
今でもどっかから

お前が出て来てあの何時もの様に明るく元気な笑顔で、‘どうも。平蔵さん。お久しぶりで’

‘す。’とワシの所に顔出してくれそうな気がして今でもなんのや。  
‘と更に続けて’

‘だが、今こうしてお前の前に立つとそれが‘現実’だと改めて思わされた。

こんな事・・言うて良いのかわからへんけど・・‘今までお疲れさんな。ゆっくり休んで’

や。‘ほなな。いつか、向こうで会おうや。’其れまで、寂しいと思っが待っててくれ

な。」「そう言い夏美の遺影に敬礼をしその場を去り遠山刑事部長の所に戻った。

遠山刑事部長は何も言わずにそつと平蔵の肩を軽く叩いた。

そして、最後に本家からもお礼の言葉を述べられ、葬式は終わった。

夏美の遺体は・・・ワカバが所有するワカバの丘に両親の墓の側に埋葬された。

そして大阪組は一先ず大阪に戻り、本家組も本家に戻って行き、

ワカバのメンバーも（有理を除いて）オウガの部屋に再び戻って行った。

一方有理はと言つと・・・。

自分の部屋で本来なら姉から貰うはずだった誕生日プレゼントの三日月のイヤリングを

ライカから受け取り其れを付けていた。

有理「・・・姉さん。」

今でも、姉さんの明るい声が、聞こえてきそうだよ。

私の部屋のドアの音が鳴り、よう！有理！何やっているんだ？

ってね。そして私が、心配すると、何時もの様にタバコに火を灯し



ながらあの笑顔で

‘大丈夫だよ。姉さんはそう簡単にくたばらない’よ。だから安心しろ。ちゃんと

戻ってきてやっから。’って私の頭を撫でてくれて言ってくれそうだよ。

でも、結果は、こごなってしまった’けど。私は、姉さんが側に居てくれたから

お父さん達が居なくても何とか、堪える事’が出来た。

姉さんには何かと色々と、迷惑を’かけてしまった気がする・・・。

でもね・・・私ね姉さんの、妹’で本当に良かったよ。

姉さんが常にどんな時も、私の事’を想ってくれていたんだもん。

お母さんみたいに不器用ながらもね・・・。

私、姉さんのあの明るい笑顔を見るのがとてもとても、大好き、だ  
っただ。

でも、もう其れが見れなくなるのが、とても残念に思うよ。

だけど・・・このイヤリングとこのネックレスが姉さんだと思って此  
れから私、頑張るよ。

この姉さんが愛したワカバと共に・・・。

そして、有理事前に夏美の部屋から持って来た夏美が生前愛用して  
いたタバコである

ピアノシモワンをポケットから取り出し箱から1本取り出した。

そしてライターを探したが何処にも見当たらなかった。

その時、一本の火を灯していたマッチが出された。

有理

あれ？マッチ？私持っていたかな？

すると「おい。早くしねえと、消えちまうぜ」？

と低い男の声がして有理その声の主を見て驚き「ジ・・・ジンさん？  
いつ何時の間に？」

ジンフツと笑い「・・・悪いな。お前の事があれから気になってよ、様子を见にな・・・。」

有理、ジンに差し出されたマッチにタバコの火を灯し「態々有難うございます。」

ジン「いや・・・。」そう言いマッチの火を消した。と同時に「大丈夫か」？」

有理頷き「大丈夫です。」そう言いタバコを吸い始めたが、一瞬間てしまった。

その様子を見てジンクツと笑い再び「大丈夫か？」と続け様に「もしかして？初めてか？」

有理再度頷き「初めてです。だって・・・昨日20歳に、なっただか

り、だから。」

と苦笑いして言った。

ジン「そうか。なら、教えてやるよ。」そう言いタバコの吸い方を有理に教えていた。

有理ジンにタバコの吸い方を教わりつつクスと笑い「姉さんなら、タバコは体に毒だぞ」。

と笑いながら言われそう。」

其れを聞いたジンはタバコを吸いながらニヤリと笑い「だったら何故、吸う？」

有理「此れ吸っていると・・・このイヤリングとペンダント同様に、姉さんが側に居てくれそう」

な気がして……。」「と呟いた。

ジン「……そうか。」

と同時に心の中で……。

夏美。有理は、今でもこんなにもお前を……。

そう呟きそして有理を自分の腕の中に抱き寄せた。

有理「……あ……危ないですよ！ジンさん！私タバコ持っているの……。」

ジンフツと笑い「構わねえぜ。」と続け様に「なあ……有理。」

有理「はい。」

ジン「姉の代わりになれるかどうか分からねえが………。」

俺で良ければ、ずっとお前の側に居てやるぜ、？」

有理其れを聞いていつの間にか涙が出て来て「……お願い、します。」

とタバコを事前にテーブルの上に用意していた灰皿の上に揉み消してジンにすがりついた。

ジン「ああ。」そう言い有理を再び抱きしめていた。

そして、有理再び、夏美の声が聞こえてきた、様な気がした。

‘有理。人はな誰にだって、幸せになれる権利’があるんだ。只・其れが

中々‘いかせられていない’と姉さんは思うんだ。人は色々の人に寄っちゃあ

‘考え方が違うと思う。’だから、その考え方によっちゃあ‘幸せ’にもなれるし

返って‘不幸’にもなる。だから、有理……。お前にもな。’

ねえ・・姉さん？

実はね・・姉さんには内緒だったんだけど・・実は私もジンスさんの事が‘好きだった’

んだよ。姉さんが‘惚れるくらいに’。だけど、姉さんに怒られそ



うな気がして

返って言えなかったんだ。

姉さんが、この男オトコに惚れた理由・・・今となって何となくだけど、分かった気が、

するよ。それと、姉さんごめんね・・・。私は今自分の気持ちをジンさんに打ち明けます。

有理「・・・ジンさん。」

ジン「何だ？」

有理「実は、私・・・。前から、ジンさんの事が・・・。」

ジン「俺の事が？」

有理「好きでした。」と続け様に「私でも、姉さんみたいにちやんと振舞えるか」

どうか分かりませんが、……。今は、「恋人の妹」として見て頂いても結構です。

ですが、時間がたつたら……。こんな事言うのも何なんですけど、私を「新しい恋人」

として見てくれませんか？」そうジンの顔を見て言った。

と同時に顔が真っ赤になって一瞬ジンの顔から逸らしてしまった。

ああ、な、何言っているんだろう？私ったら、姉さんの「恋人」だった男に

我ながら恥ずかしい。。。

其れを聞いたジン再びクツと笑い有理の顎を持ち上げキスをした。

有理再び真っ赤になって「・・・ジ、ジンさん??」

ジンニヤリ「此れが、俺の答えだ」。有理。「と続け様に「だが、此れだけは言っておくぞ?」

俺は、「待てない性分でもあり、気に入った者は中々放さない性分なんでな。」

有理「・・・ジンさん。」

そしてジン有理の耳元で「しばらく、じゃねえ・・・今日からお前は俺の女」だ。「」

と続け様に「分かったな？」

其れを聞いた有理は顔真っ赤にしつつも大人しく頷いた。

一方、オウガは自分の部屋で有理の様子を見ていた。

オウガ「・・・良かったな」。有理。」

レイカ「有理もこれで・・・安心ね。」

其れを聞いたミレイ「しかしまあ・・・有理もジン兄さんを好きだったとは・・・。」

と笑いながら驚いた。

ベルモットも其れを聞いてクスと笑い「夏美も有理もある意味、物好きね。」

其れを聞いたウォツカは横で只苦笑いをしていた。

そして・・・。

シュウワイとシュウチェンもお互いに顔見合わせながら「ねえ・・・  
シュウワイ兄さん。」

最初にシュウワイに声をかけたのはシュウチェンだった。

シュウワイ「何だ？シュウチェン。」

シュウチェン「なっさんも・・・有理さんもある意味、『凄い男』<sup>キト</sup>を好きになっちゃってしまっ

たねえ。」

シュウワイ腕を組みながら頷き「俺も同感だ。」と言った。

すると、雷龍が「おい。2人共、もしこの事がジン様の耳に入ったらある意味

‘大変な事’になるぞ？」と笑った。

其れを聞いたシュウワイ達は慌てて周りを見ていた。

その様子をオウガ達は笑って見ていた。

第66章。夏美の葬式そして、有利の姉への想い。完。



**第66章。夏美の葬式そして、有理の姉への想い。（後書き）**

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、本小説も後予定では・・・2章か3章位で

完結となる予定です。

と言いましてもあくまでも予定は予定ですから

その辺もご理解頂きます様宜しくお願い致します。

オマケ

ライカ「・・・相棒。」と続け様に

「次章もどうぞ宜しく。」



**第67章。ミレイへの夏美への想い。(前書き)**

今章はミレイの夏美への想いを書かせて頂きました。

前章より多分短いと思います。

ミレイ自身の1人称です。

第67章。ミレイへの夏美への想い。

アレから、ミレイはずっとオウガの部屋に居た。

ミレイそっと壁に寄りかかり腕を組みながら目を瞑っていた。

そして・・・。

夏さん。

今まで色々と本当に有難う。

私も少なからず、表で過ごせた事本当に良かったと思っているよ。

夏さん。

夏さんが私が、闇の人間であれ、そして、表の人間であれ、差別を  
せずに気さくに

接してくれた事をとて嬉しかったよ。

でもね……。

私はやっぱり、表で生きる事、は出来ないよ。

生まれも育ちも、闇、だし、私は、夏さんやワカバの皆みたいに、  
表で生きる事、

が出来る、強くない、。

だけど・・・。

これだけは覚えて欲しい。

例え、住んでいるのが、闇であれ、表であれ私は、私、だし、  
其れが、平等、だと

思っているよ。

だから・・・。

私は取り合えず、大丈夫、だから・・・。

だから・・・。此れからも、向こうで、あの明るい笑顔で見守って

いてね。

多分・・・有理もそう望んでいるよ。

それに・・・それに・・・。

ワカバの皆も・・・。

だから・・・。

だから・・・。

もう・・・。心配しないで。

私も・・・いずれいつかは分からないけど、向こう、行くよ。

もし、会えたら・・・また一緒に、飲もう。

それまで・・・待っていてよ。夏さん。

第67章。ミレイへの夏美への想い。完。

**第67章。ミレイへの夏美への想い。（後書き）**

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、この小説も予定通りに行けば後・・・1章位で終わる予定です。

次章では、ミレイの闇への帰還。そして

ワカバについて書かせて頂きたいと思っております。

其れでは次章も今章と同様にお付き合い下されば

幸いです。

オマケ。

哀「この小説も後1章で終わりみたいね。

工藤君。」

コナン「・・・みたいだな。灰原。」

と続け様に「本当に終わるのかな・・・。」

ミレイ「どうだか・・・この作者気まぐれだから。」

笑

コナン「・・・おいおい。」と続け様に

「次章もどうぞ宜しくお願い致します。」



## 第68章。エピソード。（前書き）

今章では、ミレイとワカバを主に書かせて頂きました。

今章でこの小説も完結です。此方はかなり長丁場

になっておりますのでご了承ください。

此方で皆様にお詫びを致します。完結後再び自分で確認を含め読んでいたら

色々と訂正箇所が見つかりました汗。今更ではありますが訂正させて頂きました。

多分もう大丈夫だと思います。大変に申し訳ありませんでした。

## 第68章。エピソード。

すると、オウガミレイに声をかけ「夏美から聞いたんだが・・・お前は『闇に戻る』。」

らしいな。」

ミレイ頷き「ええ。大学の友達には『悪いですが』・・・もう、私は・・・」

『此処に居る事（表）に居る事は出来ません。今は亡き実の兄も元々『闇の人間』でしたか』

ら。」

オウガ「・・・そうか。」と続け様に「まあ・・・お前が決めた道だ。俺はとやかく言わんよ。」

ミレイ「・・・有難うございます。オウガさん。」

すると、ジンと有理がオウガの部屋に戻って来た。

オウガ有理を見て「・・・有理。大丈夫か？」

有理「はい。大丈夫です。ジンさんが側に居てくれたから、気が楽になりました。」

と笑顔で微笑んで言った。

オウガ頷き「そうか。」と続け様にジンを見て「ジン。有理を、頼む。」

ジンタバコ吸いながら頷き「ああ。夏美の分までな・・・。」

と有理の頭をそつと再び撫でた。

と同時に有理、オウガの所に行き「・・・お兄様。」

オウガ「言いたい事、は分かっている。姉さんと同じ道を、歩む、事だろうか？」

有理頷いた。

オウガ「だがな……。有理此れだけは約束してくれ。ワカバは確かに「生と死」の狭間に

置かれているが……。だが、自分から「散るような」真似だけはそして……

ジンや本家の人間を悲しませるような事はしないでくれ。恐らく……お前の両親や

姉もそれを「望んでいる」。

有理「……はい。お兄様。」

と同時にジン「じゃ……。俺達はソロソロ帰らせてもらっせ。」

そして「ミレイ。」

ミレイ頷き「じゃ・・オウガさん。またいつか機会がありましたら・  
」。

オウガ「ああ。」と続け様に「だが、此れだけは言わせて欲しい。  
例え、闇の人間であれ

表の人間であれ・・此方<sup>ワカバ</sup>は協力してくれる者を拒まない。いつでも

気楽にまた来てくれ。」

ミレイそのオウガの言葉を聞き「・・有難うございます。」そう言  
った。

と同時にジン「お前はどつする？有理……。俺達は帰るが？今日は付いてくるか？」

有理「何時仕事が来るかどうかわからないから……。」

すると、レイカ「有理。お姉さんが死んでそんなに日にちたっていないから……。」

貴女はもうしばらく休んでも良いわよ？」と続け様に「ねえ？オウガ？」

オウガレイカから其れを聞いて頷き「ああ。今しばらく……ジンとの時間を過ごしたら

どうだ？」

有理「・・・でも。」

するといつの間にか戻って来たライカが有理に近づいて来て軽く肩をポンと叩き

「良いんじゃないか？お前さんは今は『平然と』装っているが・・・  
内心は

あまり『穏やかじゃないだろう』？お前さんやお前さんの姉さんと  
は『長い付き合い』

なんだ。何となく分かるよ。だから・・・今はな？」

有理「・・・ライカ姉さん。」



するとオウガ「大丈夫だ。もしどうしてもお前の力が必要になった時に仕事の連絡は

俺から入れてやっから。」と微笑んだ。

其れを聞いた有理「では、お言葉に甘えさせて頂いて行かせて頂きます。」

とオウガに一礼しある程度荷物を持ってジンの側により「私も行きます。ですが・・

休暇中にもしかしたら、ワカバで仕事の連絡が入り、途中でアジトに戻らないと行けなくなる

と思いますが・・。」

ジンフツと笑い「ああ。構わねえよ。」と続け様に「それと・・有

理俺に対しての

敬語は止める。俺達は、恋人同士、だからな。」

有理「・・・ごめんなさい。つい癖で・・・。」

ベルモット其れを聞いてクスと笑い「まじめなのね、貴女。」

有理其れを聞いて思わず笑いそして・・・オウガ達を見て「じゃ、お兄様。お姉様

それに皆・・・行って来ます。」

オウガ「おう。気をつけてな。」

レイカ「楽しんでらっしゃいね。」

シュウワイとシュウチェン「行ってらっしゃい！有理さん！」

そしてライカ何時もの様にタバコに火を灯し「ああ。楽しんでな。」

有理「はい。「そう言い」では。」

と今度こそオウガの部屋をジン達と共に出ようとしたその時「有理様。」

有理「何？雷龍？」

雷龍「貴女様にお渡ししたい物がございます。」

そう言い2通の手紙を取り出した。

有理その手紙を見ながら「……此れは？」

雷龍「1通目は亡きご両親からでもう1通は姉者がお亡くなりになられる前に……」

本来なら貴女様のお誕生日にお渡しするはずだった……お手紙です。

もし、お時間そしてお読みになられる気になられましたらその時にも……

「……」

有理、雷龍から手紙を受け取り「・・・有難う。雷龍。」

雷龍、有理に一礼しそしてジン達にも一礼しその場を去った。

そして、雷明も兄雷龍と同様に有理とジン達に一礼をした。

ジン達は今度こそワカバを後にした。

そして・・・ワカバの駐車場でジンの愛車である黒のポルシェ356  
Aに乗り込もうとした

その時、何時の間にか来ていたコナンがミレイに声をかけてきた。

ミレイ「お？コナン？どうした？」

コナン「いや・・・お前に挨拶しておこうかと思ってよ。闇に戻るらしいからよ。」

と続け様にミレイ慌てながら小声で「・・・おいおい。来て平気なのかよ？此処にはジン兄さ

んもいるんだぞ？」

コナン苦笑いし「大丈夫だよ。アレからジンの奴に見抜かれてしまったから・・・。

まあ、多少・・・危険だな。」

ミレイ「・・・そうか。」そして辺りを見渡し再び小声で「あれ？そう言えば哀（志保）は？」

コナンも小声で「バーロー。『来れる訳ねえじゃねえか』。あいつはお前と違って・・・」

『組織の裏切り者』で下手すれば・・・。」

ミレイ小声で換えてフツと笑い「・・・そうだったな。」

そしてウォッカ「ミレイの姉さん。お取り込みの所申し訳ありやせんが・・・ソロソロ

出発しますぜ？」

ミレイ「ああ。悪い。今乗るね。」と続け様に「じゃな……。コナ  
ン。また機会があったら

「会おうや」。

コナンフツと笑い「おう。」

そう言いミレイベルモットと有理が乗っている後部座席に乗り込ん  
だ。

そして、出発しようとしたその時にベルモットに「cool gu  
y。」



コナン「ん？何だ？ベルモット？」

ベルモットクスと笑い「ジンが呼んでるわよ。」

コナン「へ？ジンが？」

そう言い不安を募らせつつもジンが座っている助手席に向かった。

コナン「・・・何か用か？ジン。」

ジン窓を開けコナンを見てニヤリと笑い「今回は俺の妹分と夏美が  
かなり世話になったな

「工藤新一。」

運転席に座っていたウォツカが驚いて「え？い・・・今兄貴何て？」

ジン灰皿にタバコを消し再びタバコに火を灯し「こいつは・・・昔俺がばらしたはず」

の東の探偵のガキ「工藤新一」なんだよ。」

ウォツカコナンを見て「お前・・・？まさか・・・？」

コナンメガネを外し「ああ。そうさ。ジンの言う通り俺は工藤新一だ。」

「どうやら・・・夏美の死んだあの日にジンの奴にはれてしまったんだ。」

「

・ ウオツカ「じゃ・・・もしかしてあの時の毒薬の何らかの影響で・・・

「ガキの姿に」？」

コナンメガネを掛けなおし「そう言う事。」

ウオツカ「しかし・・・お前も度胸あるよな。下手すれば・・・再びばらされる」

とも知らずに・・・」

ジンタバコを吸いながら再びニヤリと笑い「こいつは、ばらさねえよ。」ウオツカ。」

ウォツカ「え？良いんですかい？」

ジン「ああ。『ワカバ』にこれからも付き続ける事を条件にな。」

ウォツカ「成る程。」

と同時にジン「まあ・・・シェリーの奴もこいつがどっかで恐らく匿っているだろうよ。」

と続け様に再びコナンを見て「そうだろ？工藤新一？」

コナンフツと笑い「こ想像にお任せするよ。」と続け様に「だが、

あいつはそつとしておいて

やって欲しい。」

ジンフツと笑い「考慮しよう。」

そして、コナン「ソロソロ行った方が良いんじゃないか？ジン？噂ではこの後赤井さん

此処に来るらしいからよ。」

ジン「そうさせてもらおう。」と続け様に「じゃなあ。またいつか、会おうぜ。」

コナンニヤリと笑い「ああ。」

そしてコナン黒のポルシェ356Aから離れた。

ジン、ウォッカに出すように指示する。

そして黒のポルシェ356Aは走り出した。

コナンは其れを只無言のまま送って行った。

と同時に黒のシボレーがまるで入れ替えるようにワカバの駐車場に入ってきて

コナンそれに近づき黒のシボレーから降りてくる赤井に挨拶をし夏の墓参りに

ワカバの丘に向かった。

一方、有理はワカバの駐車場に止めてある姉が乗っていた青のベンツを見ていた。

そして・・・。

ふと有理には姉が青のベンツによっかかってタバコを吸いながら有理を何時ものような笑顔

で微笑んでいて、楽しんで来いよ。’ と言っている姿が見えたような気がした。

有理其れを見て、’ 行ってきます’。姉さん。’

そう言い見えなくなるまで青のベンツを見つめていた。

その様子を見てウオツカ「・・・有理さん？」

ジン「多分・・・姉の愛車を見ていたんだろつよ。」と続け様に「そうだろう？有理。」

有理小さく頷いた。

そしてベルモットタバコに火を灯し「でも・・・彼女のあの青のベンツどつするのかしら？」

有理「あ、あれはね・・・ベルモットさん私が貰う事になっているんです。」

一応・・・事前に免許も取得しましたし・・・。」



ベルモットタバコ吸いながら微笑んで「そう。良かったわね。」

有理嬉しそうに頷いた。

そして、ミレイ「所で有理、雷龍から貰った・・・手紙読まないのか？」

有理「・・・後でホテルに付き次第読みます。」

ミレイ「そうか。」

そう言い黒のポルシェ366Aは杯戸町にある某ホテルへと向かって行った。

そしてホテルに付くと同時にジンと同じ部屋で有理は過ごす事となる。

因みにウォツカとベルモットとミレイは別室。

その時に手紙を読んだ。

まず、両親の手紙・・・。

そして読み終わったら次に・・・。

姉の夏美の手紙。

其処にはワカバへ想い。

そして・・・自分の事・・・。

そして・・・有理の誕生日の事事等を書いてあった。

有理「・・・そ、そんな。姉さん。」

と涙ぐんでいた。

ジン「どうした?」

有理「・・・ジンさん。姉さん・・・あのメイランの、過去の銃弾の影響で、」

病魔に冒されたみたいなの。」

ジン其れを聞いて驚いて「・・・そうか。」

そう言い只有理を黙って再び抱きしめた。

そして有理「・・・姉さん。」と悲しそうに小声で呟いた。

一方、ウォッカとベルモットはそれぞれ自分の部屋で仕事等の準備等を

して過ごしていたが、ミレイは自分の部屋でタバコを吸いながら窓を見ていて

外はすっかり夜になっていた。

そしてミレイ」「只今、私の世界」。「そう言った。

そして・・・心の中で・・・。

今後はこの闇の中で再び、闇の始末屋赤龍、として生き続ける。

私が、私で、あり続ける為に・・・。

第68章。エピソード完。



## 第68章。エピソード。（後書き）

今章でこの第1作目が終わりです。

長い間本当に・・・お付き合い下さり有難うございました

す。尚・・・連載此れの他にも第2作ありますので

其方も其方で再びお付き合い下されば幸いです。

尚・・・前々回？辺りにも述べさせていただきましたが

夏美さんが亡くなるのは恐らくこの作品だけです。

残りの作品には出てくる予定です。

何で？と言うその辺の突っ込みはまことに恐れ入りま

すが無しでお願い致します。

其れでは本当に最後までお付き合い下さり有難う

ございました。

この小説の最後のオマケ。

N「作者でございます。第1作目無事に完結

致しました！」

コナン「お疲れさん。」

N「有難う！コナン君ッ！無事に終わりました！」

元太「でもよ・・・今思うと俺達の出番少なくなっか

？」

光彦「僕も同感です。」

歩美「私も・・・。」



「N」・・・どうぞお許しを・・・。」

哀その様子を見てクスと笑い

そして「今まで御覧頂き感謝するわ。この作者の  
作品後2作あるらしいから其方もどうぞ宜しくね。

では・・・またいつか会えること願いつつ・・・。」

これ以上長くなるとアレので以下自粛。(笑・)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4900h/>

---

「闇から逃亡した少女とそれを追う漆黒の闇。」

2010年10月10日22時54分発行